

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第147集

# 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成元年度分)

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成元年度分)

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 序

平成元年度の発掘調査事業は、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、日本道路公団、建設省、岩手県からの委託を受けて、高速道路建設やバイパス建設に関連する遺跡を中心に、あわせて27遺跡145,623㎡の調査を実施してまいりました。

調査遺跡からは、縄文時代の集落跡や埋葬人骨、奈良・平安時代の集落跡や墓跡、中世の城館跡、堀跡など、各時代に及ぶ多数の遺構や遺物が発見されております。特に大日向II遺跡の屈葬人骨、岩崎台地遺跡群の大型掘立柱建物、柳之御所跡の堀跡や池跡、藤原氏時代の木製品など注目されるところであります。

発掘調査略報は、調査報告書の刊行に先だち、27遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。研究者のみならず、多くの方がたに活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業をすすめるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会等関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成元年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中 村 直

# 目 次

## I. 日本道路公団関係

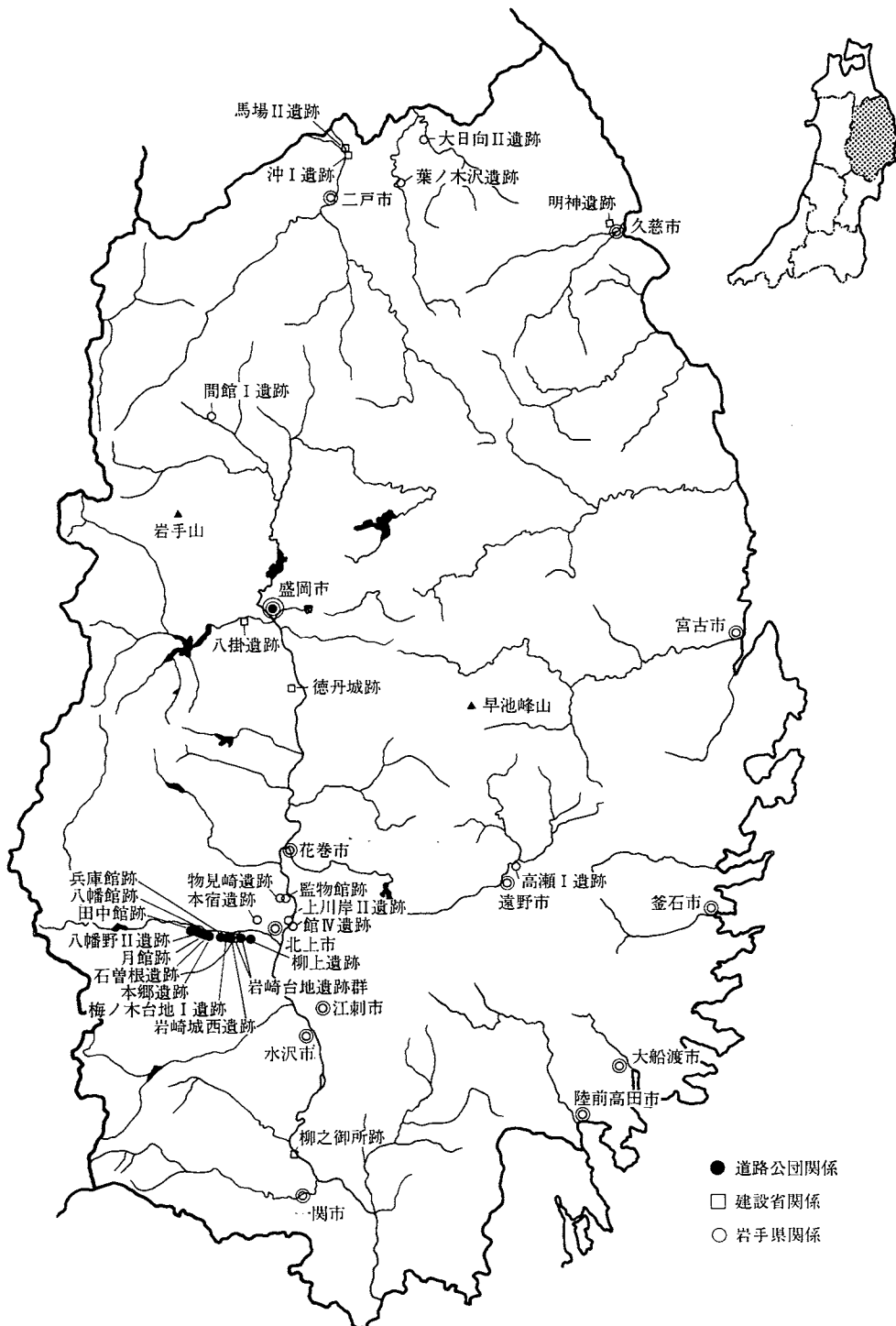
(1) 柳 上 遺 跡	(北上市)	3
(2) 岩崎台地遺跡群	(和賀町)	9
(3) 岩崎城西遺跡	(和賀町)	23
(4) 梅ノ木台地 I 遺跡	(和賀町)	31
(5) 兵 庫 館 跡	(和賀町)	39
(6) 本 郷 遺 跡	(和賀町)	45
(7) 石 曾 根 遺 跡	(和賀町)	53
(8) 月 館 跡	(和賀町)	61
(9) 八 幡 館 跡	(和賀町)	69
(10) 八幡野 II 遺跡	(和賀町)	77
(11) 田 中 館 跡	(和賀町)	85

## II. 建設省関係

(1) 明 神 遺 跡	(久慈市)	93
(2) 馬 場 II 遺 跡	(二戸市)	101
(3) 沖 I 遺 跡	(二戸市)	105
(4) 八 卦 遺 跡	(盛岡市)	111
(5) 徳 丹 城 跡	(矢巾町)	117
(6) 柳 之 御 所 跡	(平泉町)	123

## III. 岩手県関係

(1) 大日向 II 遺跡	(軽米町)	139
(2) 葉ノ木沢遺跡	(九戸村)	147
(3) 間館 I 遺跡	(西根町)	153
(4) 高瀬 I 遺跡	(遠野市)	161
(5) 物見崎遺跡	(北上市)	169
(6) 監物館跡	(北上市)	177
(7) 上川岸 II 遺跡	(北上市)	181
(8) 館 IV 遺跡	(北上市)	189
(9) 本宿遺跡	(江釣子村)	197
(10) 岩崎台地遺跡群	(和賀町)	203

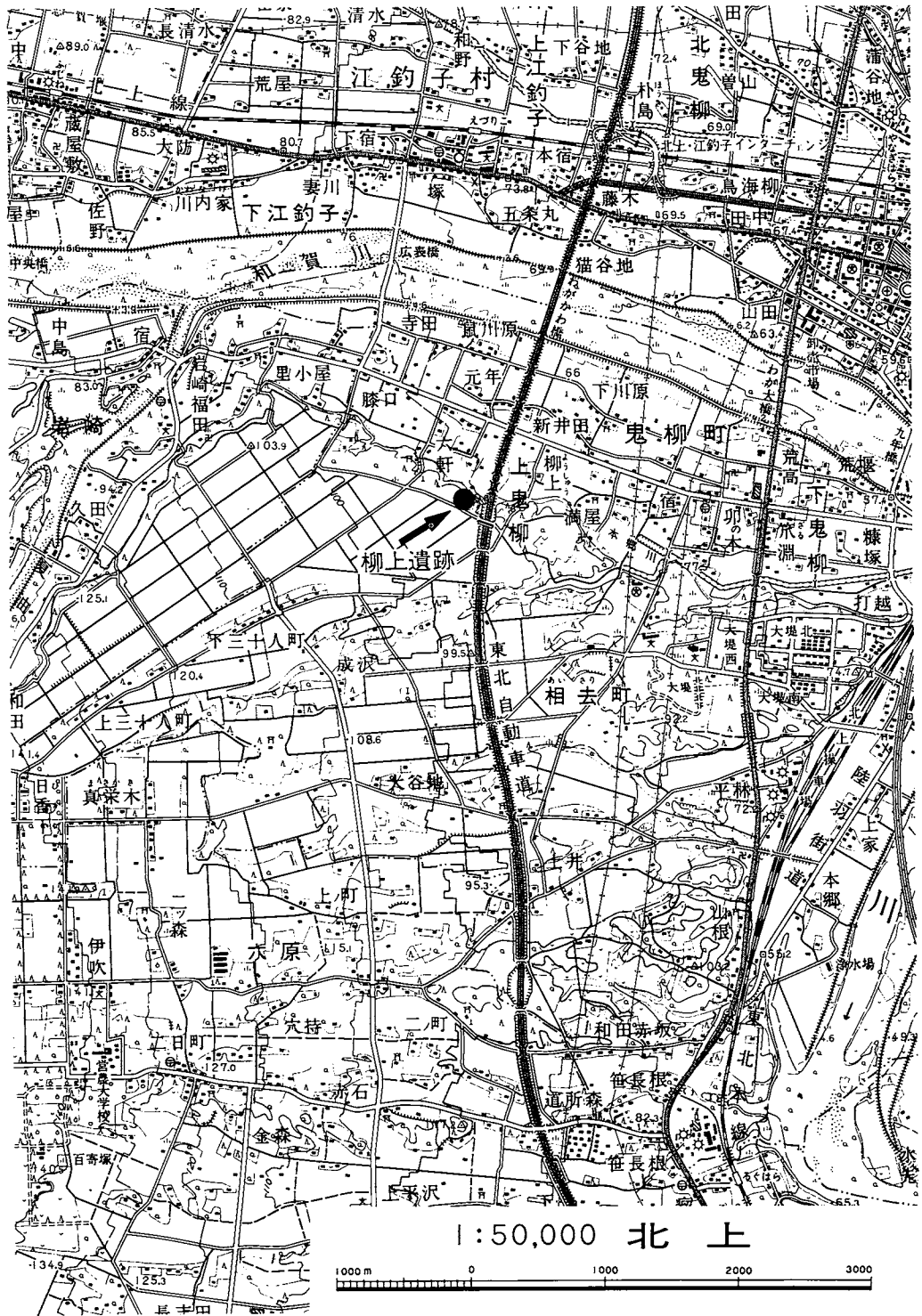


平成元年度調査遺跡位置図

## I . 日本道路公団関係

(1) 柳<sup>よう</sup>上<sup>しゆう</sup>遺跡

所在地 北上市鬼柳町字上鬼柳3地割357ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年7月17日～8月4日、10月6日～10月7日  
調査対象面積 90㎡  
発掘調査面積 90㎡  
遺跡番号・略号 ME65-2191・YS-89  
調査担当者 小原眞一・高橋 堅  
協力機関 北上市教育委員会



柳上遺跡位置図



## 1. 遺跡の立地

柳上遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南西約4km付近に位置する。夏油川によって形成された扇状地の扇端部に立地し、標高は89～90m、和賀川との比高は約20mである。  
現況は山林である。

## 2. 調査の概要

本調査は、東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査である。今年度の調査区域は水源確保の井戸用地にあたり、調査面積は東側50㎡、西側40㎡合わせて90㎡である。

発見された遺構は、東側調査区から縄文時代の土坑12基、柱穴状土坑30基、西側調査区から時期不明の溝跡1条である。

### 〈土坑、柱穴状土坑〉

土坑は平面形によって隅丸方形、楕円形、円形の3種類に分けられ、隅丸方形のものが一辺約1.8mで深さ20～30cm、楕円形のは長軸径1.5～2mで深さ16～50cm、円形のは直径1.2～2mで深さ67cmから1mである。

柱穴状土坑は調査区全域に広がっており、直径25～50cm、深さ15～35cm程度のものと、直径50～90cm、深さ70～80cmのものに2分される。土坑、柱穴状土坑のいずれから、縄文時代中期の土器片が出土していることから、縄文時代の遺構と思われる。

### 〈溝跡〉

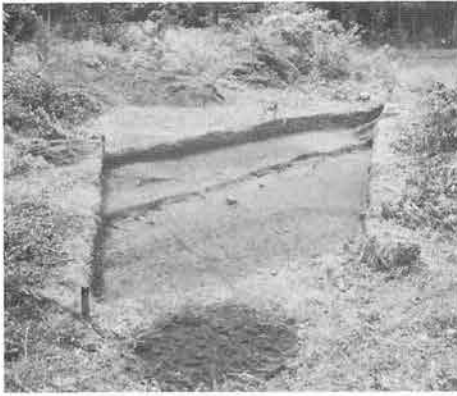
溝跡は、長さ8m、幅70～100cm、深さ7～23cmである。調査区の中央部を南北に横切り、さらに調査区域外の北側の沢に続くものと思われる。出土遺物も無く、時期は不明である。

### 〈出土遺物〉

出土した遺物は、縄文時代中期、晩期の土器・石器である。土器は中期が主体であるが、ほとんどの土器片が磨滅していることから、他から流入してきたものとも考えられる。石器には石鏃、削器、磨石、石棒がある。

## 3. まとめ

今回の調査は狭い範囲に限定されていたため、遺跡の性格を把握することはできなかったが、多くの土坑、柱穴状土坑が発見されたことから、周辺に遺構の広がることが予想される。



西側調査区



東側調査区



土坑



土坑



1



3



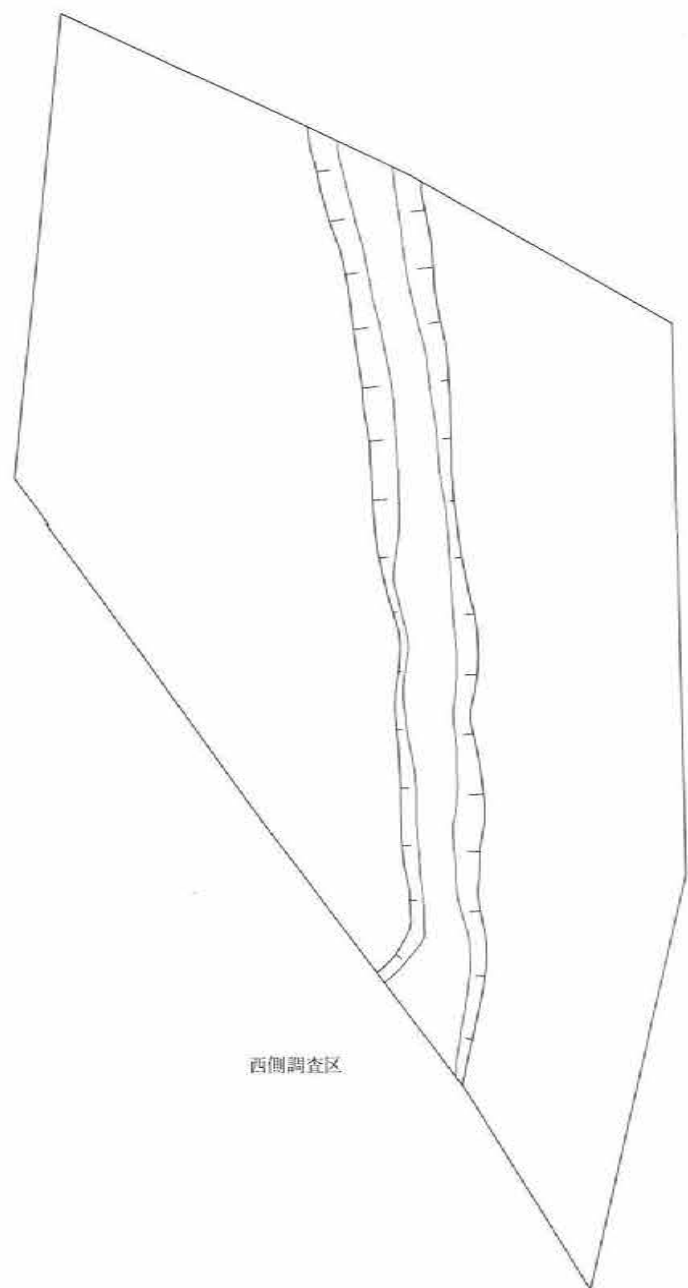
2



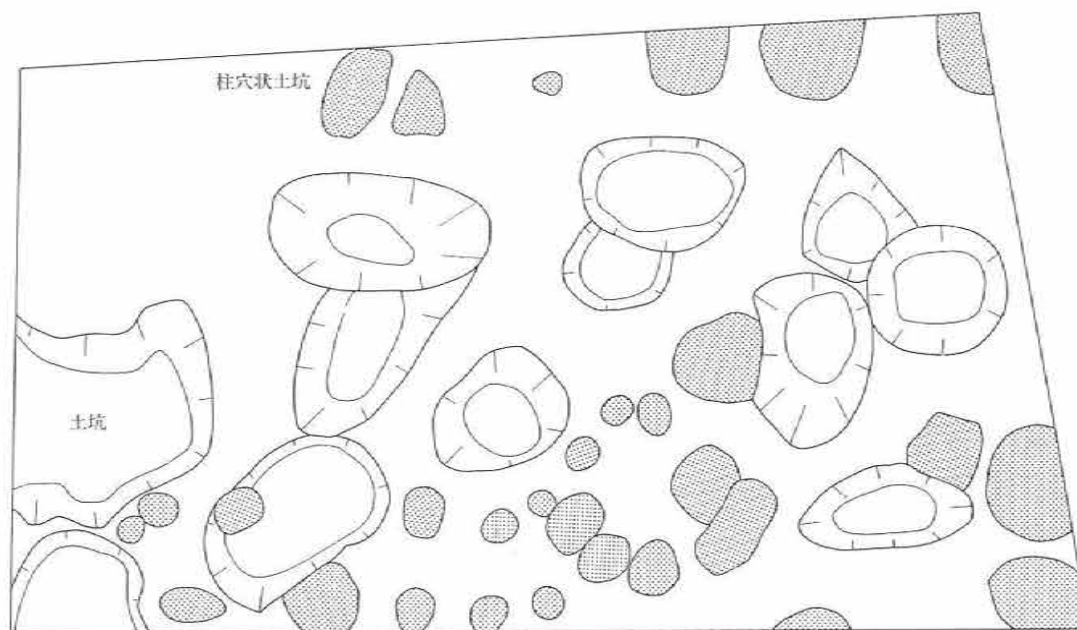
4

1. 2. 縄文土器 3. 石鏃 4. 削器

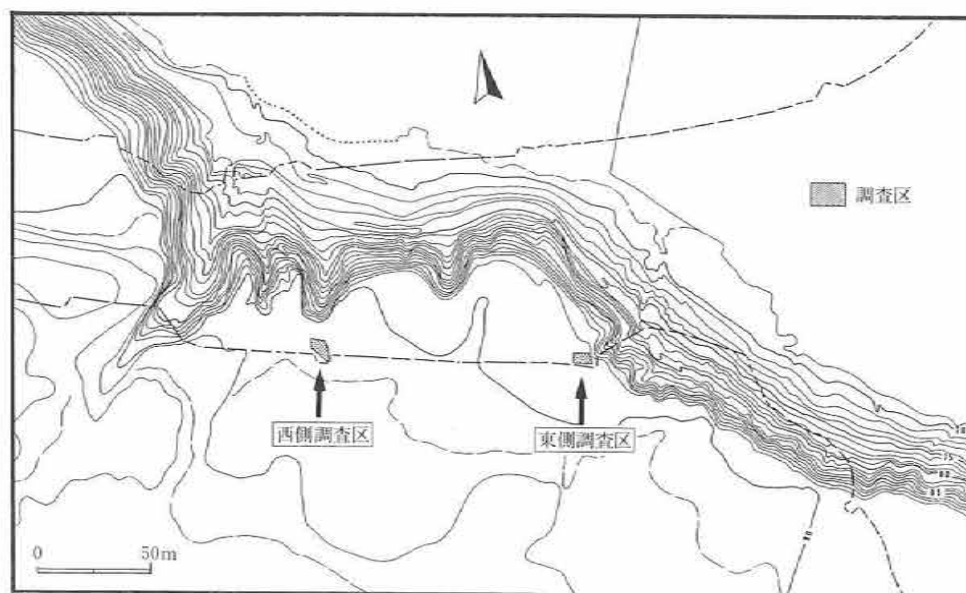
柳上遺跡 遺構・出土遺物



0 2 m



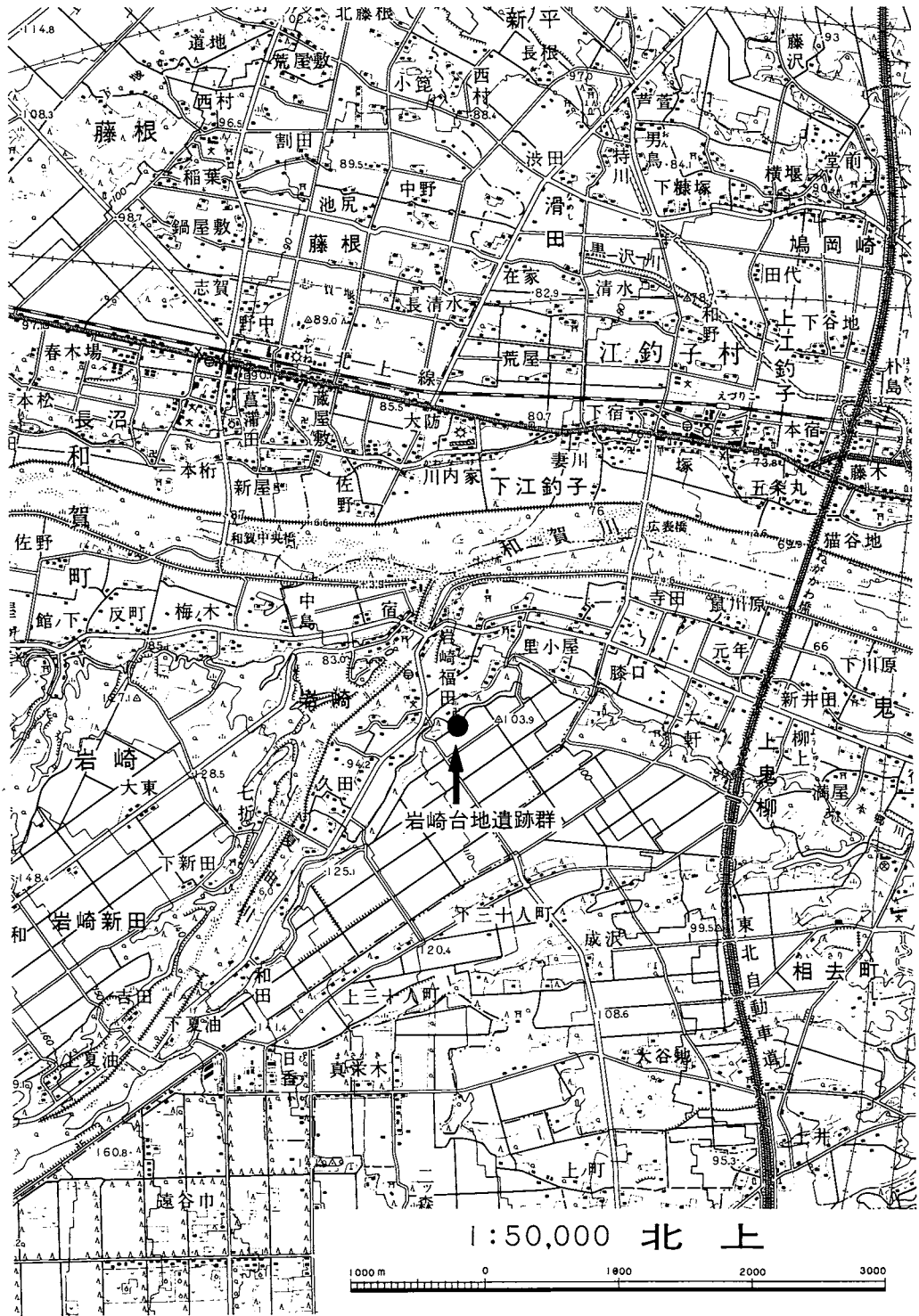
東側調査区



柳上遺跡調査範囲と遺構配置図

## (2) いわきだいち 岩崎台地遺跡群

所在地 和賀郡和賀町岩崎11地割46ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年4月11日～11月17日  
調査対象面積 29,250m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 29,250m<sup>2</sup>  
遺跡番号 ME65-2020・64-2318・64-2316・64-2360  
64-2288  
調査略号 ISD-89K  
調査担当者 高橋與右衛門・平井 進・中村良一・中川重紀・  
鈴木貞行・遠藤 修・川村 均・村上 修・佐々  
木信一・小原真一・濱田 宏・相原伸裕・森下 宏・  
女鹿文雄・高橋 堅・及川靖世  
協力機関 北上市教育委員会・和賀町教育委員会・江釣子村  
教育委員会



岩崎台地遺跡群位置図

## 1. 遺跡の立地

当遺跡群は、和賀町役場の東南東 8 km、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南東 3.5km 付近に位置する。遺跡は和賀川の支流夏油川が形成した河岸段丘状をなす扇状地の扇端部に立地し、標高は 95～105m である。奥羽山脈の焼石岳北麓を水源とする夏油川は、本遺跡の北西 1.5km で和賀川と合流し、遺跡の 1.3km 北方を東流する。和賀川右岸の沖積面とは比高 20～25m の段丘崖で限られる。

## 2. 調査の概要

調査は東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査である。当遺跡群には東から欠の下台地、伍大坂 II、伍大坂 I、高田坂、久田 II の各地区が含まれ、今年度は伍大坂 I、同 II、高田坂を対象としたが、その他は次年度以降に調査を行う予定である。

調査によって古代～中世を中心とする、竪穴住居跡 68 棟、住居跡状遺構 8 棟、掘立柱建物跡 12 棟、土坑 71 基、陥し穴状遺構 46 基、墓壇 10 基、方形周溝遺構 24 基、溝跡 83 条、集石 5 箇所、柱穴群 3 箇所 (860 個)、焼土 8 箇所の各種遺構が検出された。遺物は土師器、須恵器、鉄製品、韃の羽口、ガラスと琥珀の玉など平安時代に属するもののほか、若干の縄文土器、弥生土器、石器などが出土している。

### 〈竪穴住居跡〉

68 棟は東端部に 8 棟、中央部に 22 棟、西端部に 38 棟が分散し、地点によって分布が異なる。東端の 8 棟は、北端の住居跡が段丘崖の南 20m ほどに位置し、他は段丘崖から 6～22m の距離にある。中央部は 100m の距離をおいて東側の 17 棟と西側の 5 棟に分かれ、0.5～38m の間隔で立地する。西端部の 38 棟は 1～40m の間隔をおいて 22～80×200m の範囲に散在し、東寄りの密度がたかい。規模は、最大 7.5×7.5m、最小 1.8×2.2m と大差があるものの、東端部は一辺 3m 以下、中央部は 3～5m に 13 棟、西端部は 3～6m に 23 棟があり、地点によって若干違いがある。カマドを設置する壁は北西～東～南と西方以外全てみられるが、中央部では北西～東に 13 棟、西端部は東～南に 26 棟が該当し、大きな違いがある。袖部の構築方法には、河川礫を芯にシルトの貼り付け、焚口部に河川礫を入れ他はシルトの積み上げ、全てシルトの積み上げ、地山削り出しの 4 型があり、焚口部に河川礫を入れる例とシルトのみによる例が多い。煙道部の不明な例もあるが、割り貫きによって掘られ、屋外に延びる煙道をもつ。柱穴は対角線や一方の壁に寄せて配置するが例は少ない。

出土遺物がロクロ使用成形になる土師器と須恵器であることから、全てが平安時代に位置づけられるが、分布状況やカマドの方位の特徴から何時期かに細分される。

### 〈住居跡状遺構〉

平面形が方形や長方形を示し小規模な住居跡に近似するが、カマドや炉をもたない遺構である。中央部に2棟、西端部に6棟の8棟である。規模は最小1.8×2 m、最大2×3.8mであり、一辺2 m台が多く、平面形から方形5棟、長方形2棟、台形1棟に分けられる。柱穴は壁沿いの床面に8個配置する1棟のほかはない。土師器や須恵器を出土した例が多いことから平安時代の遺構と推定されるが、1棟は平面形や柱穴配置から中世の可能性もある。

### 〈掘立柱建物跡〉

12棟のうち、中央部西端に5棟、西端部東寄りに7棟が分布する。中央部の5棟は南側が2棟、北側が3棟で相互に重複して隣接する。南側の2棟は11.35m（4間）×14.27m（5間）、11.87m（4間）×14.67m（5間）の東西棟であり、前身建物である後者は桁行・梁行とも2間の身舎に四面庇で西側にさらに1間の孫庇がつき、前者は桁行3間、梁行2間の身舎に四面庇がつく。北側の3棟は11.75m（5間）×10.1m（4間）、11.35m（4間）×10.35m（4間）、11.45m（4間）×9.65m（4間）の規模をもち、前者は東西棟、後2者は南北棟である。前者が最も新しく、後2者は前身建物であるが新旧関係は不明である。柱穴の掘り方はいずれも円形や楕円形と差がないものの、径0.3～1.2m、深さ0.2～1 mと規模には大差がある。西端部の7棟は柱穴の掘り方が大型の2棟と小型の5棟に分かれる。前者2棟は南北に44mの距離で位置し、南側の規模が桁行5.6～6 m（3間）×梁行4.5m（2間）で、北側は桁行3.8m（2間）以上、梁行4.3m（2間）で北側は調査区外に延びる。掘り方の規模と平面形は、前者が径45～60cmの円形や楕円形で深さ50cm、後者は径40cmの円形で深さ35cmである。後者5棟はほぼ中央に近接して位置する。規模は、桁行8.8～9.8m（6間）×梁行5.6～5.8m（5間）、桁行9.7m（5間）×梁行3 m（1間）、桁行6.7～7 m（3間）×梁行1×1.2m（1間）、桁行3.8～3.9 m（2間）×2 m（2間）、桁行4.2～4.4m（2間）×梁行1.8m（1間）で、1棟は南・西側に庇を付し間仕切りをもつ。柱穴の掘り方は径・深さとも20～30cmの円形が主体である。

中央部の建物跡は出土遺物や柱穴配置と柱間寸法から古代末～中世前半頃が推定され、他遺跡の類例から信仰に関係する建物跡と考えられる。西端部の建物跡のうち、前者南側は重複関係から平安時代であるが北側は不明である。後者5棟は柱配置や規模から中世以降の可能性が強く、前者は倉庫、後者は屋敷を構成する主屋と付属屋と推測される。

### 〈土 坑〉

71基は東端部に6基、中央部に27基、西端部に38基が分布する。東端部では東側の2基と中央部の4基に分かれ、開口部径50～80cm、深さ0.8～1 mで断面形がビーカー形の5基と、1×1.6mの長方形気味で断面形が不定の1基がある。中央部の27基は東側の15基と西側の12基に分散するが、前者は散在し、後者は掘立柱建物跡の周囲に立地する。東側には0.5～1.8m、深さ

15～30cmで方形や長方形の4基と、長径1m前後、深さ30～50cmの円形や楕円形の11基がある。西側の12基は長径1～1.5m、短径0.5～1mの楕円形や、短径が1m前後で長径10m前後の溝状の2型があり、ともに深さが20～25cmと浅い。西端部の38基は調査範囲全域に散在し、方形や長方形気味の5基と円形や楕円形の32基に分かれる。前者の規模は0.5～1.5mで深さ15～60cm、後者は径0.5～1.2mで深さ0.15～1.2mである。遺物の出土が少なく時期の特定はできないが、形状や規模から平安時代と縄文時代の2時期があると推定される。

#### 〈陥し穴状遺構〉

46基は東端部の2基、中央部の28基、西端の16基に分散し、平面形から溝状型10基、円筒型34基、楕円型2基に細分される。規模は、溝状型が長さ1.5～3.6m、幅0.2～0.3m、深さ0.4～1.12m、円筒型は径0.5～1m、深さ0.7～1.2m、楕円形が長軸径0.7～1.5m、深さ0.6mであり、円筒形の底面に小土坑をもつ例が多い。いずれも規則的な配列はみられない。出土遺物がないため時期の特定はできないが、重複関係から円筒型は平安時代より古くその他は不明である。

#### 〈墓 墳〉

10基のうち東端部の1基のほかは西端部にあり、住居跡や溝跡と重複または単独で散在する。規模は長軸1.4～2.2m、短軸0.6～1mの長方形や楕円形をなし、東端部の1基は壁沿いに河川礫がめぐる。底面は平坦であるが掘り方をもつ例がある。副葬品には刀子、撮子、耳環、ガラス玉、土師器坏がある。

#### 〈方形周溝遺構〉

24基は東端部の32×35mの約1,200m<sup>2</sup>の範囲に分布し、北側は調査範囲外に広がる。これらは北東―南西に延びる細い溝で3列に区画された中に並列するが、住居跡との重複はない。東端の区画は道路で不明であるが、現状で10×30mに8基、中央の区画は14×33mに2列並行して9基、西側は9×40mに7基が並ぶ。内径の最大は9.5×10m、最小1.8×3.5mと差が大きく、西側が大規模で北に寄ると小規模になり、平面形は方形や長方形をなし、周溝の幅は0.3～1.5m、深さ0.1～0.5mと不規則であるが、北から南に順次掘り足したと判断される。土坑等の関連施設は未検出であるが、一部に炭化物や焼骨が検出されたほか、周溝内の3箇所集石や石組がある。周溝内の遺物が縄文土器と不安時代の土師器や須恵器であり、平安時代の遺構と推測されるが、周溝内の石組から「永楽通寶」が出土しており中世の可能性も考えられる。性格的には墓域の区画と推定される。

#### 〈溝 跡〉

83条は東端部に7条、中央部に18条、西端部に58条と調査範囲全域に分布する。長さは最長90m、最少数mと差が大きく、方向は一定しない。幅は0.2～1m、深さ0.05～0.5mとバラツキが大きい。いずれも平安時代の住居跡よりも新しいことから中世以降に属すると推定される。



### 〈集石遺構〉

5箇所は東端部の方形周溝遺構の範囲内にあり、周溝内の3箇所とその他2箇所に分かれる。乱雑に積み上げたもの、石室状に組んだもの等の種類がある。性格は不明であるが、1基から人歯と貨幣の出土があったことから、墓の可能性が強い。

### 〈柱穴群〉

約860個の検出であるが、これらは中央部の東西両端と西端部に分散する。規模は径0.2～0.4m、深さ0.15～0.35mとバラツキが大きく規則性を欠くが、この中に建物跡12棟と柱穴列1条が含まれる。時期の特定は困難であるが、古代～中世と推定される。

### 〈出土遺物〉

平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・各種玉類のほか、縄文土器・弥生土器・縄文石器等であるが、大多数は平安時代の遺物で占められ、その中でも土師器が主体をなす。

土師器には坏・高台付坏・甕・壺の器種がある。坏は若干の非ロクロ使用成形のほかはロクロ使用成形され、内面ミガキ後黒色処理と無処理のものがある。底部は全て平底であるが、回転糸切り無調整と全面再調整の2種類がある。高台付坏は全てロクロ使用成形され、内面ミガキ後黒色処理と無処理がある。高台は回転糸切り離し後の貼り付けである。甕には非ロクロ使用成形とロクロ使用成形を含み、大小関係はあるが長胴形の器形である。前者の体部外面はヘラケズリのほかハケメ調整を多用し、口縁部は外反し端部の挽き出しはない。後者は体部外面の下半をヘラケズリ調整し、口縁部を外反させて端部を上方に挽き出す受口状である。壺は全て非ロクロ使用調整され、体部中位に最大径をもつ球胴形のほかは甕と同様である。

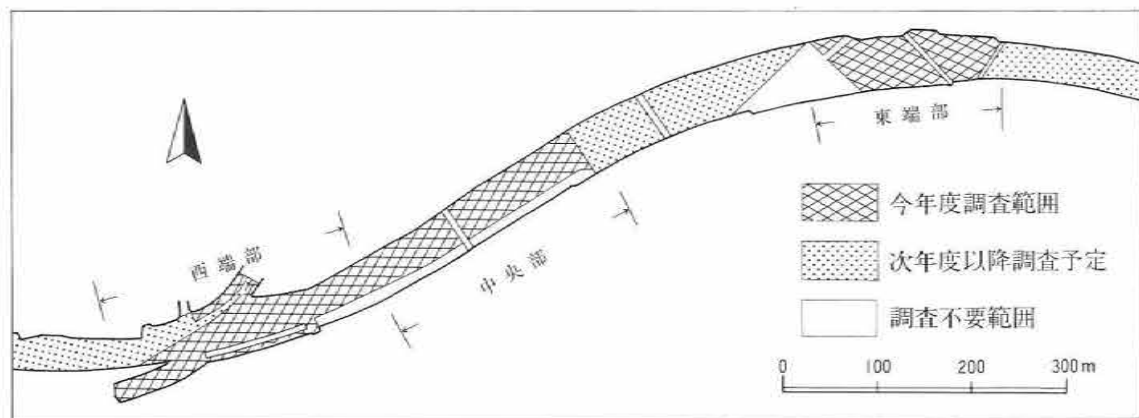
須恵器には坏・甕・瓶の器種がある。坏はロクロ使用成形で底部切り離しは若干の回転糸切りの他は回転糸切り無調整であり、一部に環元不足で褐色のものもある。甕には平底の小型と丸底の大型があるものの、前者は破片のため詳細は不明である。後者は非ロクロ使用成形で体部最大径を肩部にもち、底部が丸形を示す。瓶はロクロ使用成形されるが、大小がある。大型は完形がないため詳細は不明であるが、小型は頸部が細く短く器高の低い器形を示す。

灰釉陶器はK-90号窯式の碗か皿の小破片である。鉄製品には刀子・撮子・釘・鎌・耳環等があるが、数は少ない。玉類には青色ガラス玉65個、黄ガラス玉2個、琥珀玉2個がある。

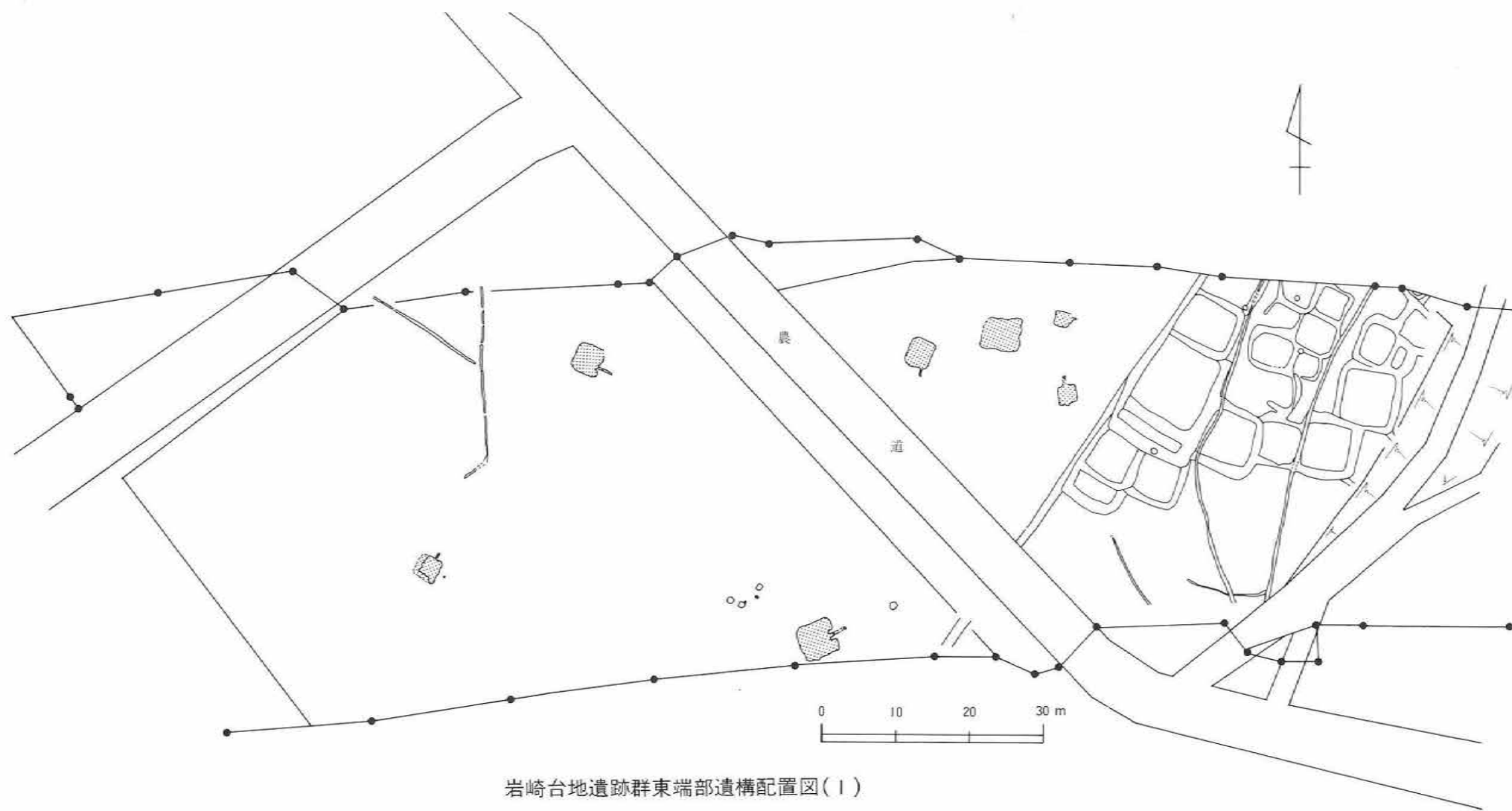
縄文土器・弥生土器は完形品がなく、全て破片である。石器は石鏃2点のほかは剝片である。

## 3. まとめ

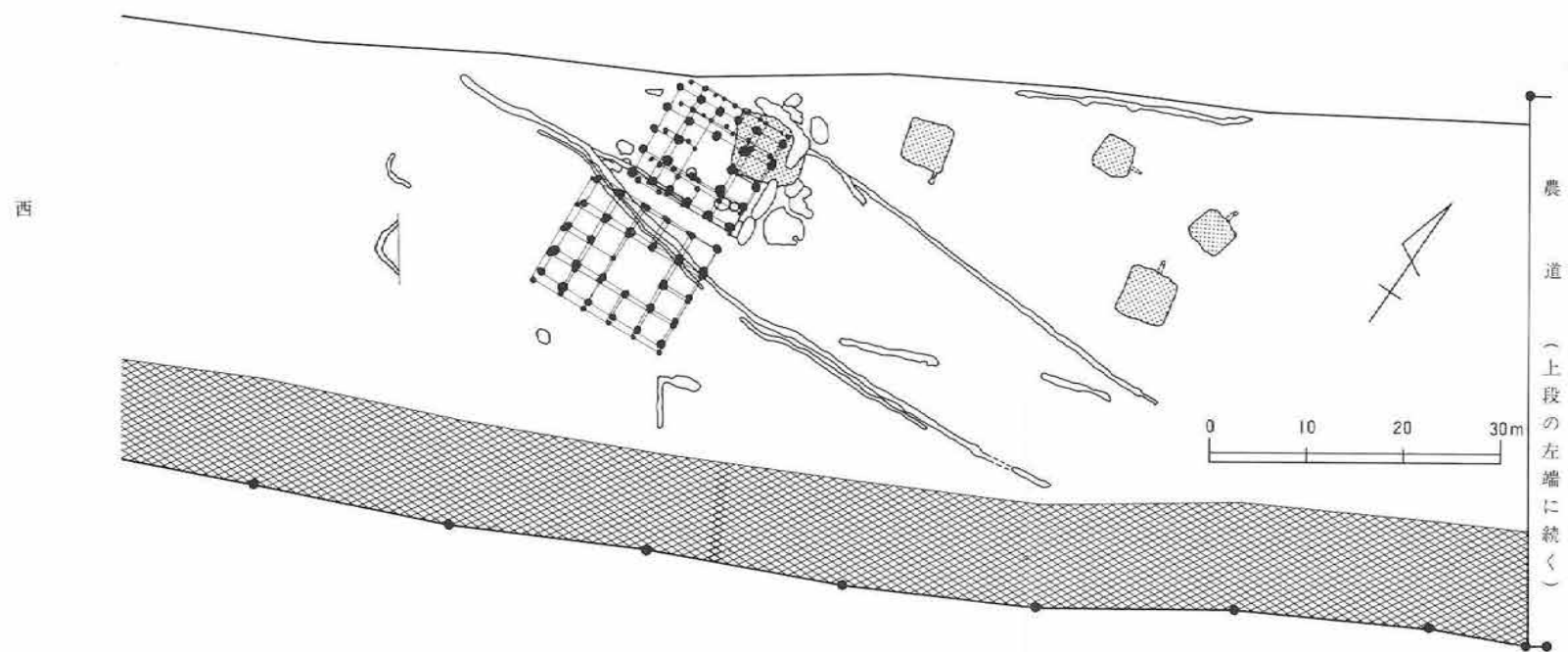
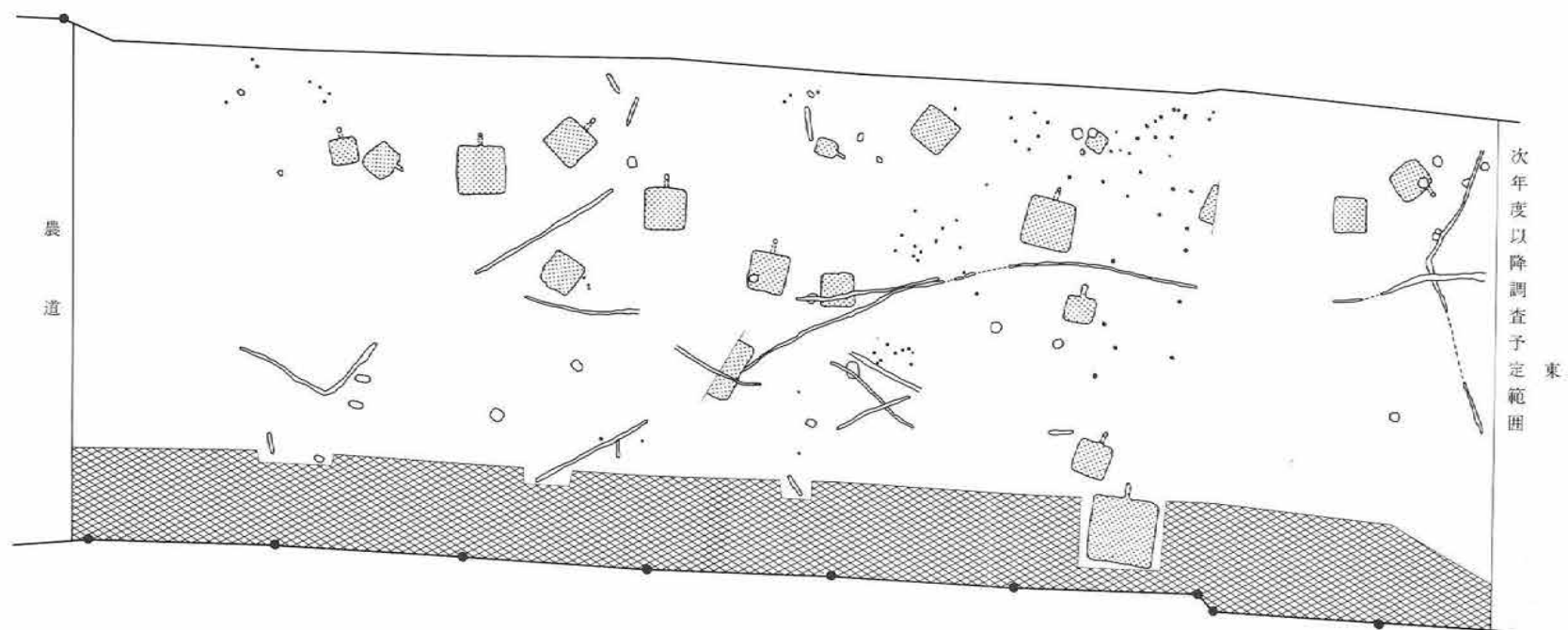
当遺跡群は発掘調査によって平安時代の集落を主とする非常に大規模な遺跡であることが判明した。特に、68棟に及ぶ平安時代の住居跡、同時代と推測される24基の方形周溝遺構、信仰に関係すると推定される大規模な掘立柱建物跡などは重要な資料である。



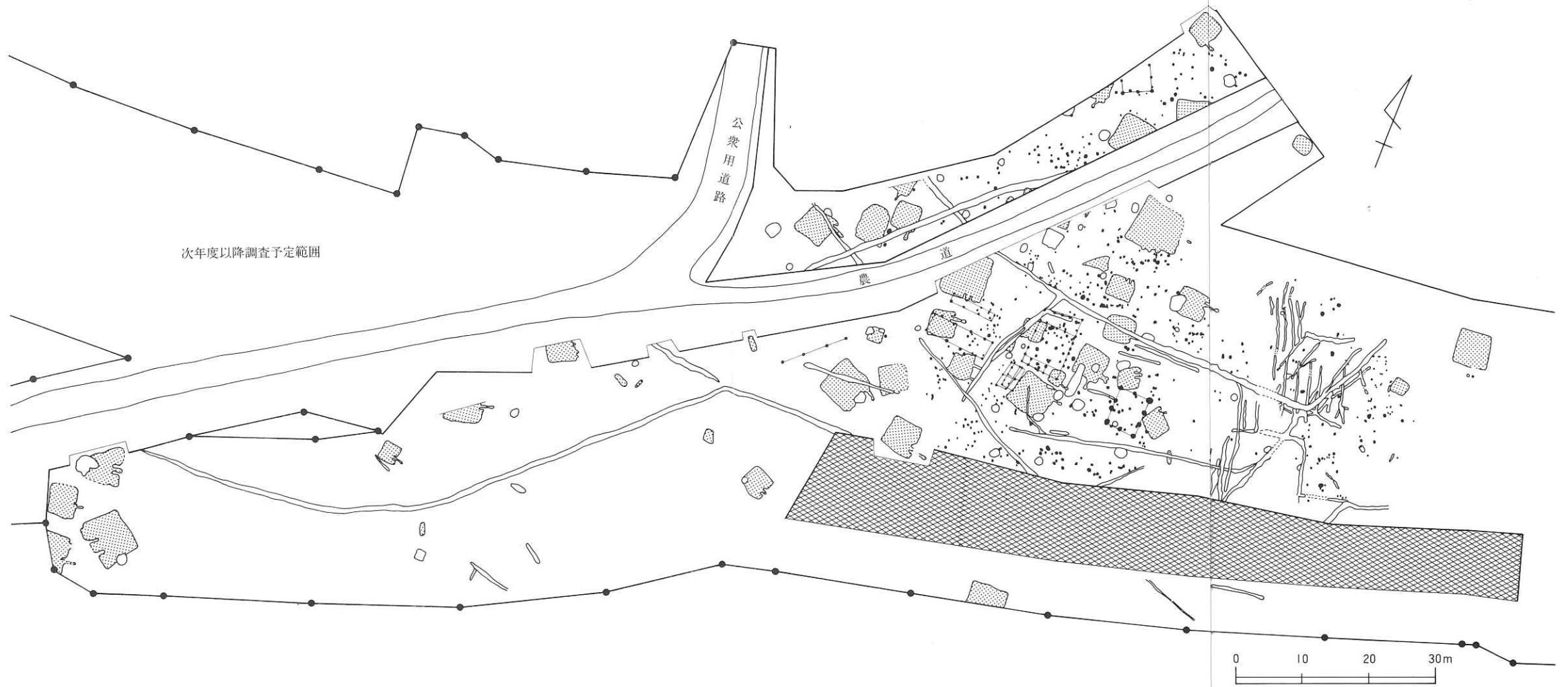
岩崎台地遺跡群調査範囲概略図



岩崎台地遺跡群東端部遺構配置図(1)



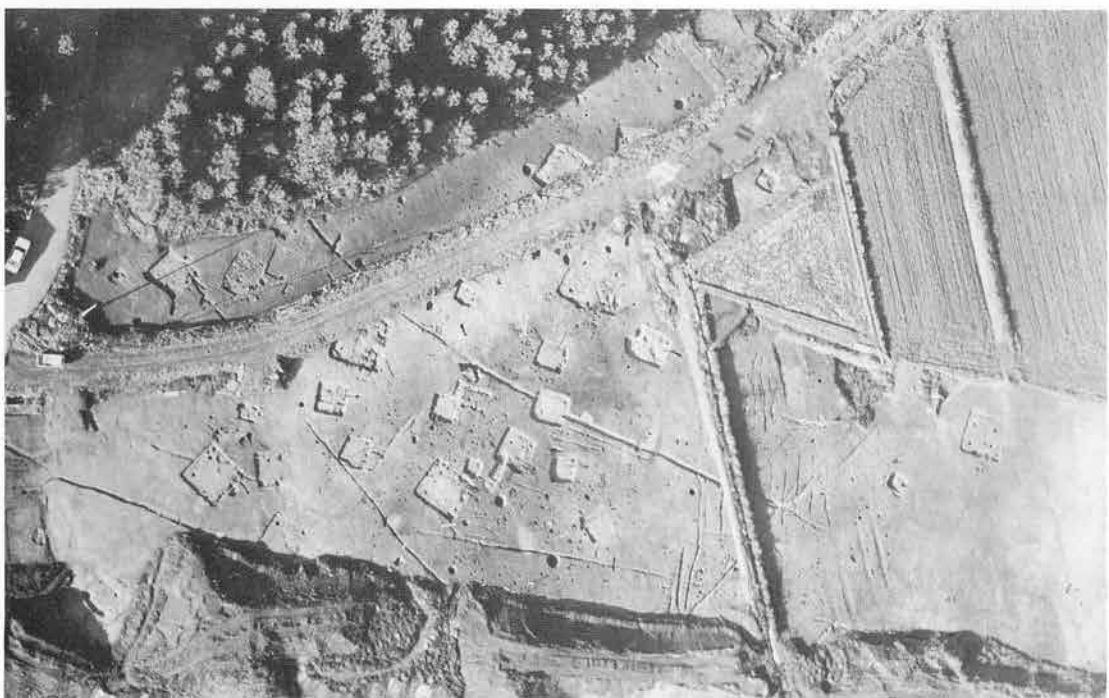
岩崎台地遺跡群中央部遺構配置図(2)



岩崎台地遺跡群西端部遺構配置図(3)

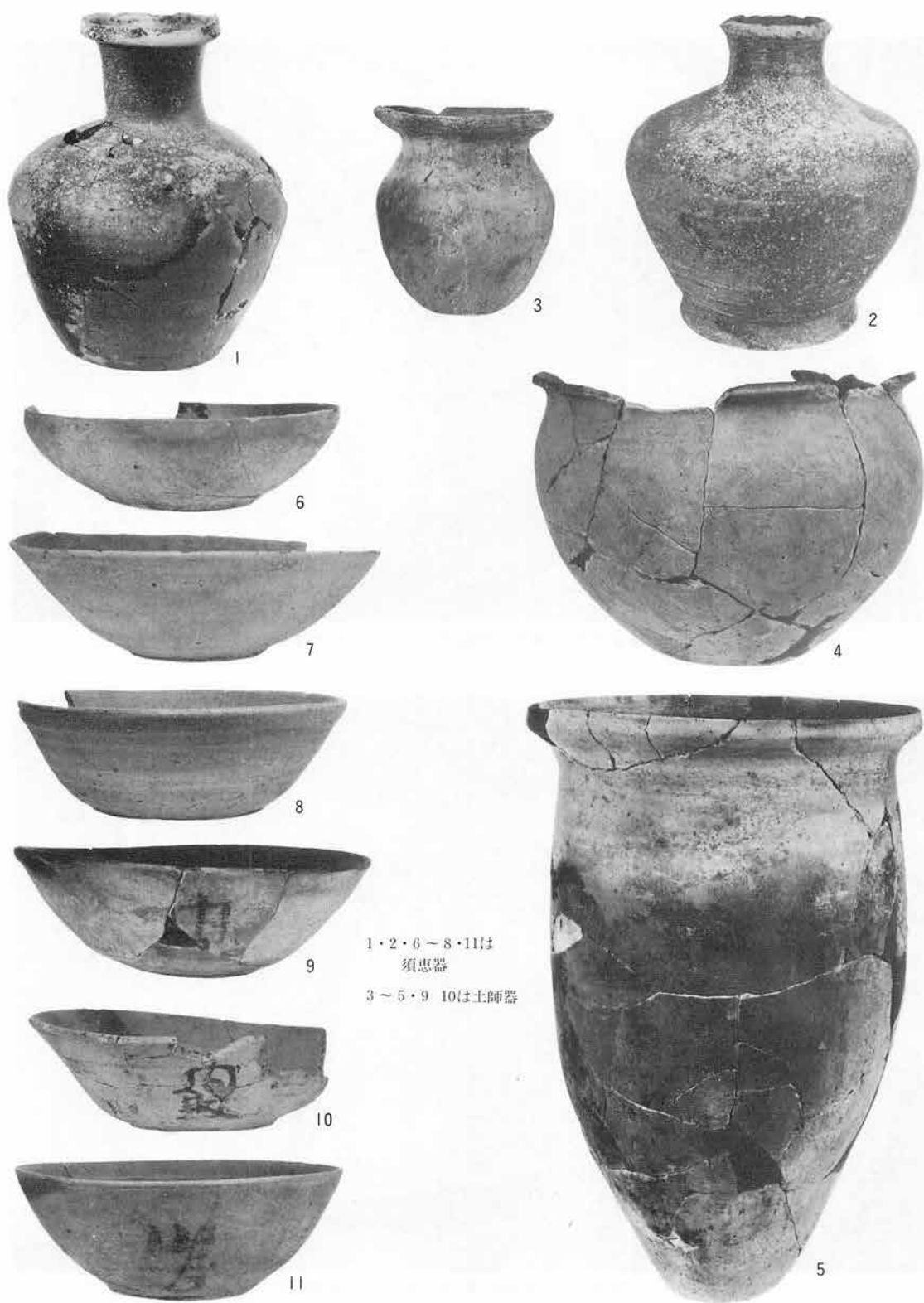


東端部方形周溝群の配列状況（東から空中撮影）



西端部の平安時代集落（南から空中撮影）

岩崎台地遺跡群 遺構



1・2・6～8・11は  
須恵器  
3～5・9 10は土師器

岩崎台地遺跡群 遺物

(3) <sup>いわさきじょうにし</sup>岩崎城西遺跡

所在地 和賀郡和賀町岩崎19地割4-1ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成元年4月10日～7月15日

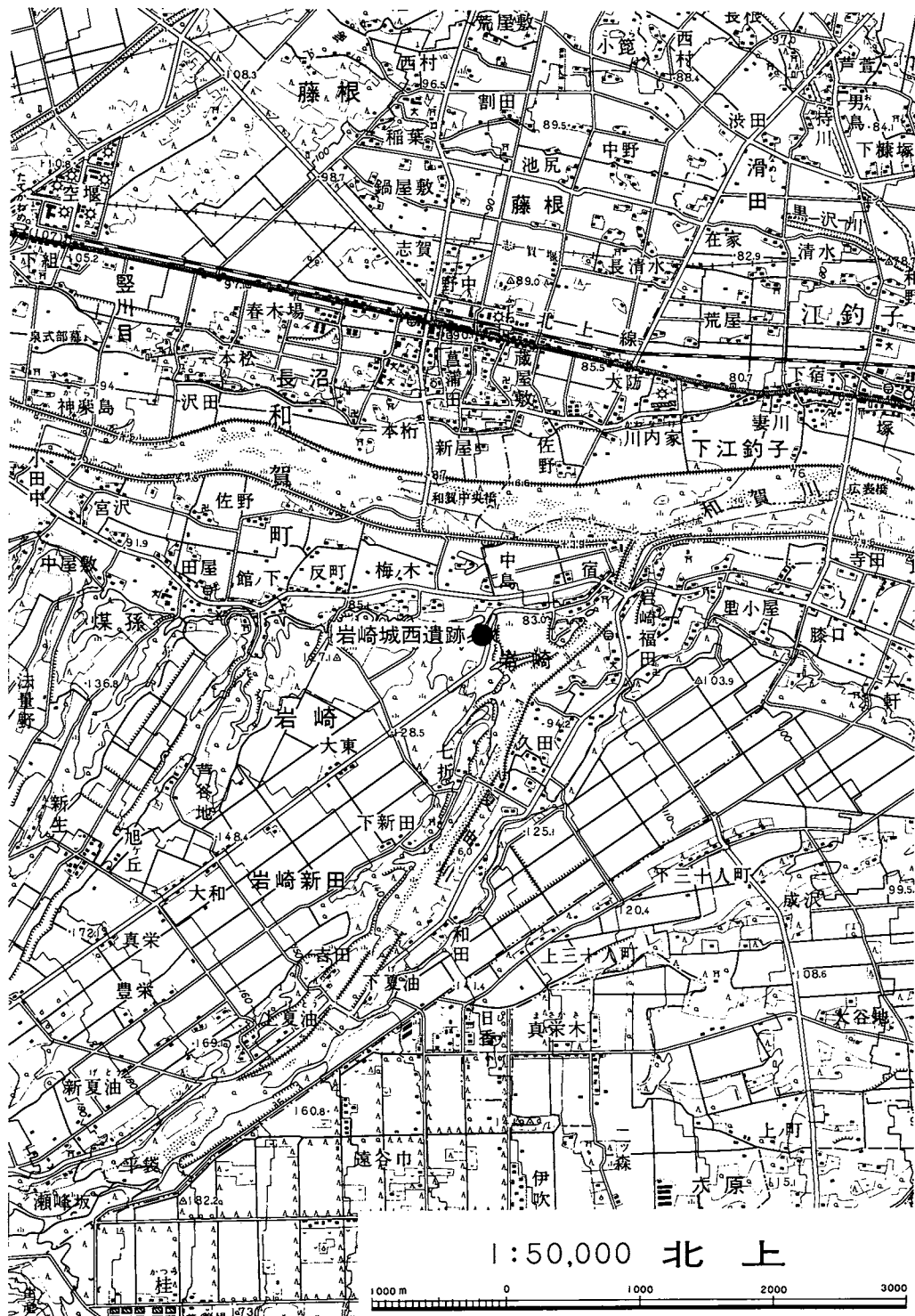
調査対象面積 5,550m<sup>2</sup>

発掘調査面積 5,550m<sup>2</sup>

遺跡番号・略号 ME64-2138・ISJ-89

調査担当者 中村良一・川村均

協力機関 和賀町教育委員会



岩崎城西遺跡位置図



## 1. 遺跡の立地

岩崎城西遺跡は東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南約2.3km付近に位置し、東流する和賀川右岸の段丘の縁辺部に立地する。この段丘は夏油川によって形成された扇状地が段化したもので、洪積世低位段丘の金ヶ崎段丘に属する。調査区域の標高は113～115m、和賀川沿いの沖積面との比高は約30mで、その境は急崖をなしている。現況は山林である。遺跡の東側には町道を挟んで現在消滅している梅ノ木遺跡が隣接し、さらに東方0.6kmの段丘上には岩崎城跡がある。西側には深い沢を挟んで梅ノ木台地 I 遺跡が隣接する。

## 2. 調査の概要

調査は東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査であり、調査区域は道跡建設予定地に沿った東西約130m、南北約70mの範囲である。調査の結果検出された遺構は、溝跡3条、柱穴列2列、柱穴状小土坑5基、炭窯跡1基、焼土遺構1カ所である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、古代の土師器、須恵器の土器類、陶磁器などのほかに、石器、石製品、金属製品等が若干である。

### 〈溝跡、柱穴列、柱穴状小土坑〉

調査区北側から検出された溝2条は、中央付近から東側へのびるものと、西側へのびるものの2条である。東側のものは幅1.5～1.7m、深さ45cm前後、長さは10m以上で調査区外にのびる。断面形はV字状である。西側のものは平面形が南側に若干膨らむ孤状を呈するもので、幅1.7～2.0m、深さ20～30cm、長さ24mで、西端は段丘崖まで達する。断面形は浅いU字状である。両溝間は5.3mである。これら2条の溝は形状や規模等に若干の相違がみられるものの、検出面が同一であることや、占地の状況に類似性がみられることから同時期に存在し、中央部が途切れるタイプの一連の溝と考えられる。

東側の溝に沿ってその南側に4柱穴1群の柱穴列が2列検出されている。2列共4柱穴がほぼ直線的に並ぶもので、重複関係から北側の1群が南側のものより新しい。芯々間は2.3～2.4mである。占地状況からこれらの柱穴列は溝に伴うものと推定される。また両溝周辺から5基の柱穴状小土坑が検出されている。溝が途切れる部分に2基並列し、その北西側に3基が並列する。深さは8～36cmで、2基並列する方が浅い。

また調査区南東端から検出された溝は、長さ13.5m、幅40cm、深さ10cm前後で直線的なものである。遺構の時期や性格については不明である。

### 〈炭窯跡〉

調査区東端部で検出されたもので、径2.0×1.6mの不整な楕円形を呈し、深さは30cmである。底面から炭化材が出土しており、埋土からロクロ成形の土師器坏の破片が出土している。

#### 〈焼土遺構〉

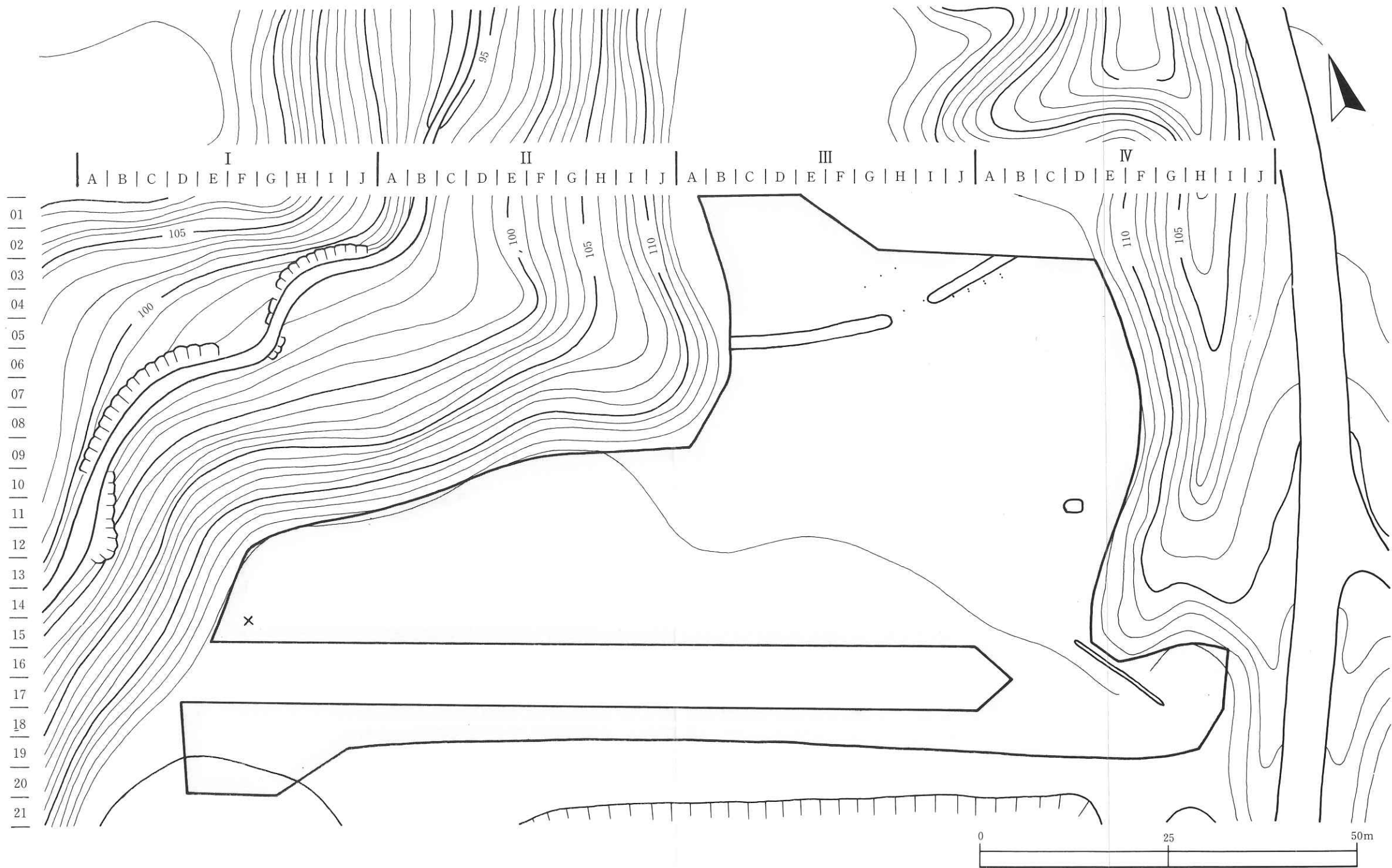
調査区南西端から検出され、風倒木痕の黒色土部分に形成されたものである。焼土は径100×60cmの不整長円形状に広がり、最大層厚30cm程で焼成変化を受けている。遺構の時期や性格については不明である。

#### 〈出土遺物〉

出土した遺物はおもに土器と石器である。土器は縄文時代前期・後期・晩期と弥生時代・平安時代のものであるが、大半は縄文時代のもので、細片が多く、出土量も少ない。陶磁器には中世の陶器が数点含まれている。石器は縄文時代の石鏃・石匙等の剥片石器や、磨石・凹石等の礫石器などのほかに、砥石が数点出土している。そのほか、管玉・硯等の石製品や、釘・弾丸等の金属製品が若干出土している。

### 3. まとめ

今回の調査の結果、若干の遺構が検出され、縄文時代の土器や石器を主体とする遺物が出土した。調査区北側の溝跡2条、柱穴列及び柱穴状小土坑群については、占地の状況や周辺域から中世の遺物が出土していることと合わせ、中世に属する遺構の可能性が強い。また遺物の大半は縄文時代の土器と石器が占めているが該期に属すると考えられる住居跡等の遺構が発見されなかったことから、縄文時代の集落は調査区外の削平された南側に存在した可能性が考えられる。



岩崎城西遺跡遺構配置図



遺跡全景



北側溝跡

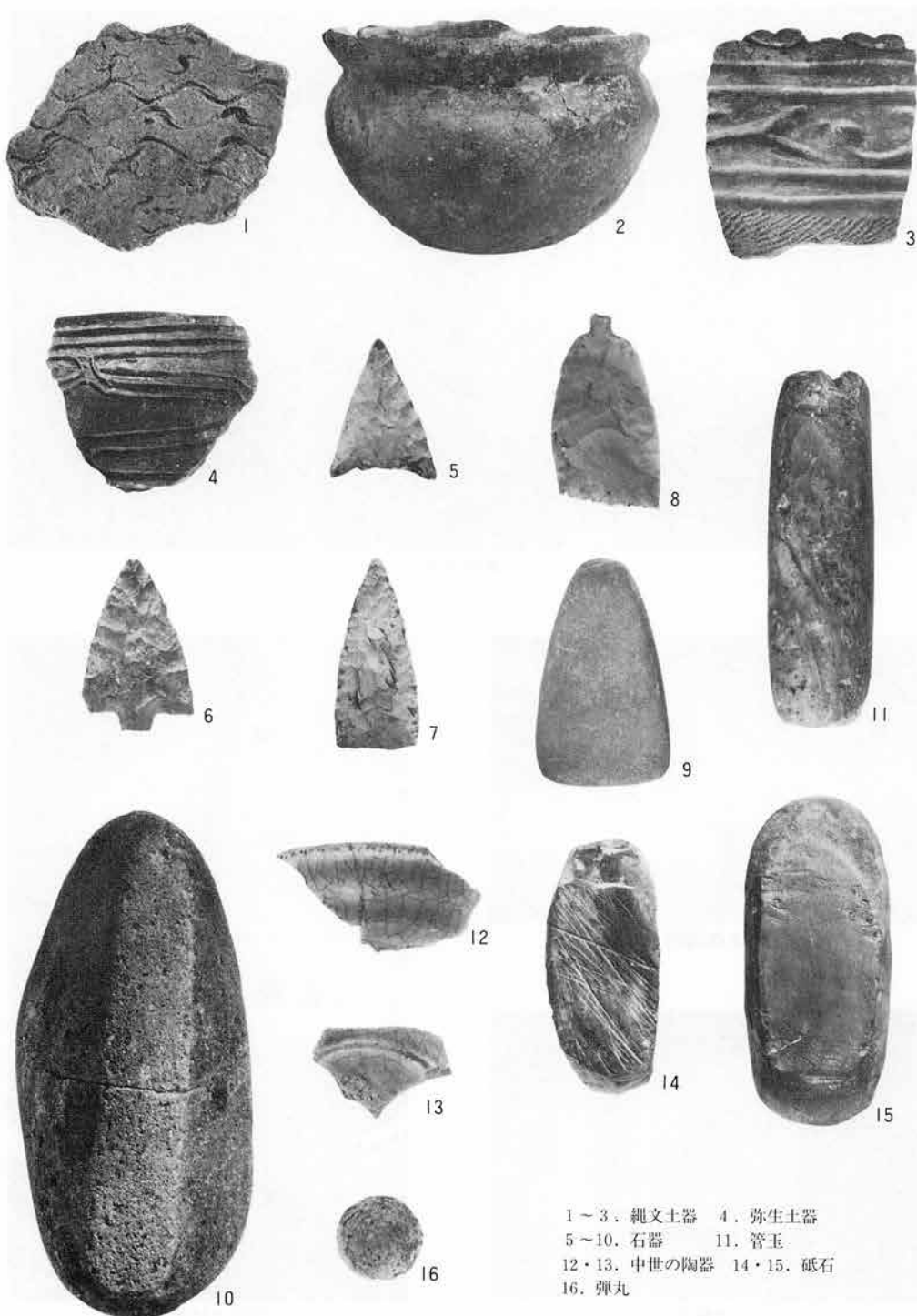


炭窯跡



溝跡と柱穴列

岩崎城西遺跡 遺構



岩崎城西遺跡 遺物

(4) 梅ノ木<sup>うめ きだいち</sup>台地 I 遺跡

所在地 和賀郡和賀町岩崎19地割11-1 ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成元年5月30日～8月25日

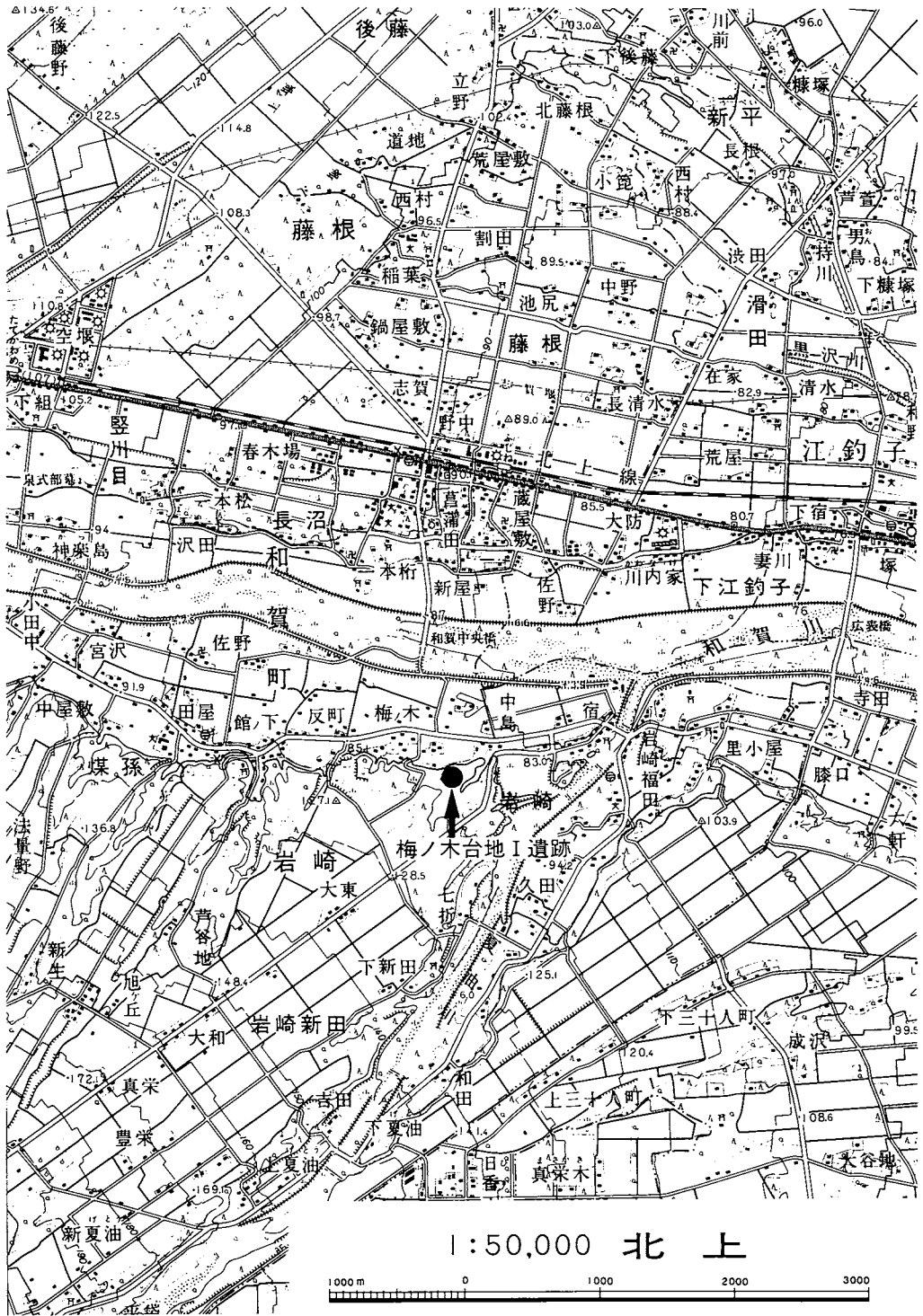
調査対象面積 6,000m<sup>2</sup>

発掘調査面積 6,000m<sup>2</sup>

遺跡番号・略号 ME64-2126・UM-89

調査担当者 平井 進・佐々木信一

協力機関 和賀町教育委員会



梅ノ木台地 I 遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

梅ノ木台地Ⅰ遺跡は東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南約2.3km付近に位置し、和賀川支流の夏油川によって開析された扇状地の縁辺に立地する。同所は金ヶ崎段丘と呼ばれる低位段丘で一段下の河岸低地とは比高約30mであり、その傾斜は急崖となっている。遺跡の標高は114～115mであり、現況は山林である。本遺跡の東側は深い沢を挟んで岩崎城西遺跡、西側は梅ノ木台地Ⅱ遺跡に接する。

## 2. 調査の概要

検出された遺構のうち縄文時代に属するものは陥し穴状遺構1基、焼土遺構8カ所であり、平安時代に属するものは竪穴住居跡1棟である。時期不明のものは土坑2基、溝1条、焼土遺構群である。出土した遺物は縄文土器、土製品、石器、土師器、須恵器、あかやき土器、石器、石製品である。

### 〈竪穴住居跡〉

地表から基盤層の灰白色粘質シルト層までは20cm程度である。掘り込みは同基盤層上面で止まっており、しかも埋土の一部は攪乱されるなど不明な点が多い。形状はほぼ方形、規模は2.8×2.5mと思われる。カマドは南壁中央に作られているが、破壊され、わずかに焼土と袖の芯材として使用された石によって位置が確認される。床面は灰白色粘土質シルト層上面を利用しており、同所は黒ずんでいる。柱穴、周溝はない。

### 〈土 坑〉

2基とも楕円形で、規模は1×0.7mである。深さは20cm程で断面形は皿状を呈する。表土直下で検出され、埋土も黒褐色土の単層で軟らかい。共伴遺物はなく時期は不明であるが、古代よりは新しいと考えられる。

### 〈陥し穴状遺構〉

平面形は溝状を呈する。規模は長さ2.9m、幅35cm、深さ53cmである。底部に杭跡等は見られない。出土遺物はない。

### 〈焼 土〉

共伴遺物がないため明瞭な時期決定はできないが、層位的な出土状況から縄文時代に形成されたものとなり新しい時期（近・現代か）に形成されたものがある。縄文時代のものは基盤層の粘土質シルト層の直上に形成されたものである。他の遺跡でも広く見られるような円形又は楕円形で層厚が数cm以下のもの4カ所と、風倒木痕の所に形成されたもの4カ所の合計8カ所である。後者の場合は基盤層に入り込む黒褐色土が焼成を受けており、平面形は三日月状を呈するものが多い。



新しい時期のものと思われる焼土は表土直下で検出された。形状、層厚とも不定であるとともに、焼成の度合も異なり、部分的には赤褐色を呈するものもあるが、大部分は極暗赤褐色の淡い焼土である。ほぼ遺跡の全面を覆う。後に述べる溝跡との関係では溝跡が焼土を切っているところと溝跡の埋土の上位に焼土が形成されているところもあり、溝を構築した前後の時期に何回かにわたって形成されたものと思われる。

#### 〈溝 跡〉

表土直下で検出された。検出面での幅は約60cm、深さ40cm、底部は鍋底となる。埋土は黒褐色土を主体としており、上部では地山との区別が不明瞭なところが多い。確認された長さは45mであるが、もっと長いかもしれない。地境溝の可能性もある。

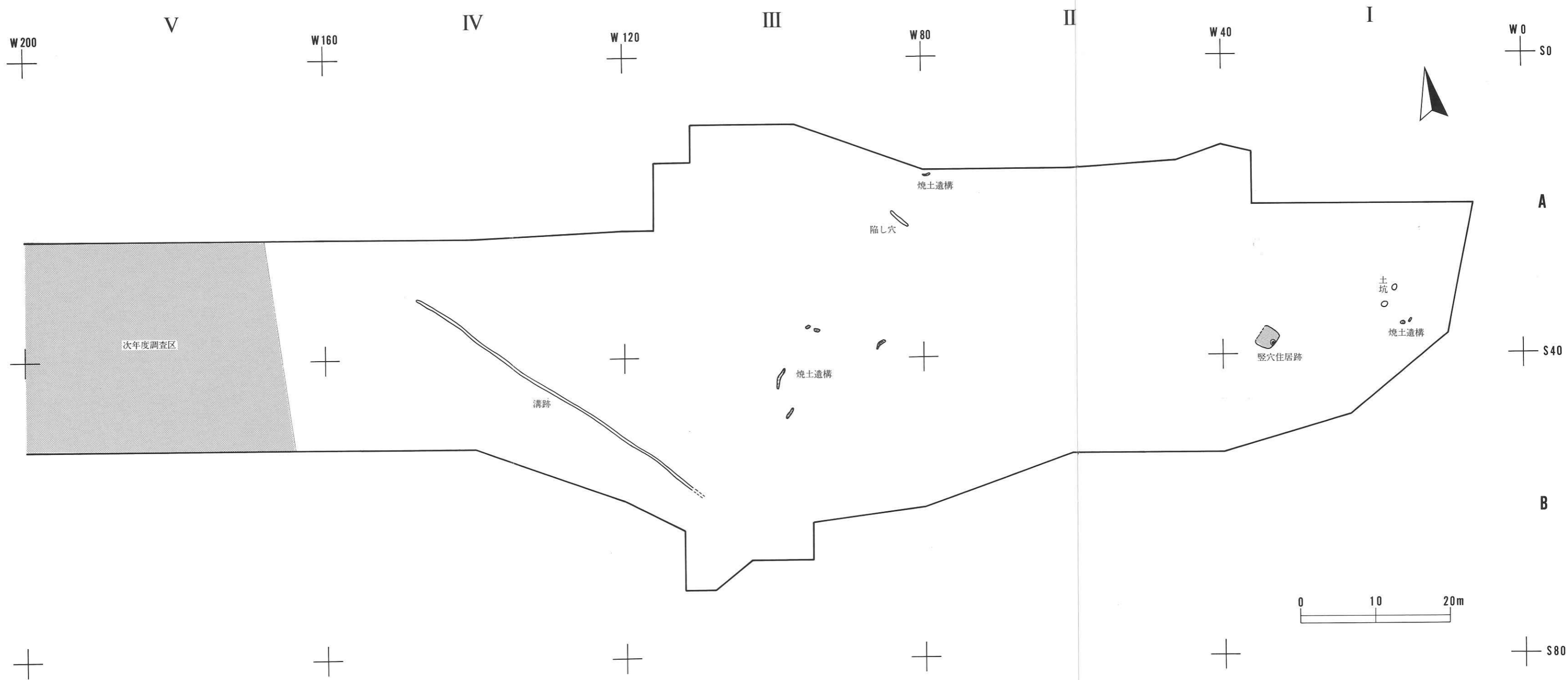
#### 〈出土遺物〉

縄文土器は前期後葉から中期初頭の大木6～7式が中心である。すべて小片であり、形状が推定できるまで復元できたものはない。小量ではあるが後期・晩期と弥生土器も出土した。土製品は板状土偶1点である。石器は礫石器が多く、剥片石器は少ない。器種別にみると、礫石錘、棒状磨石、凹石に偏重しており種類が限られる。

古代に属する遺物は土師器、須恵器、あかやき土器である。数点は遺構外から出土したが、大部分は竪穴住居跡内から出土した。すべて小片で完全に復元できたものは1点もない。器種は坏のみで、甕は出土していない。

### 3. まとめ

梅ノ木台地Ⅰ遺跡は縄文時代前期と平安時代の複合遺跡である。遺跡の性格としては縄文時代は遺物散布地、平安時代は集落跡といえる。縄文時代の遺物は前期末～中期初頭にほぼ限られ、良好な資料といえる。また、陥し穴状遺構を検出した地点からみれば、調査区北側に狩場跡が広がっているものと思われる。平安時代の竪穴住居跡が1棟検出されたが、大規模な集落跡を予想させるものはない。集落が広がっているとすれば、地形から見て調査区の南側にその可能性が認められる。



梅ノ木台地 I 遺跡遺構配置図



竪穴住居跡（平安時代）

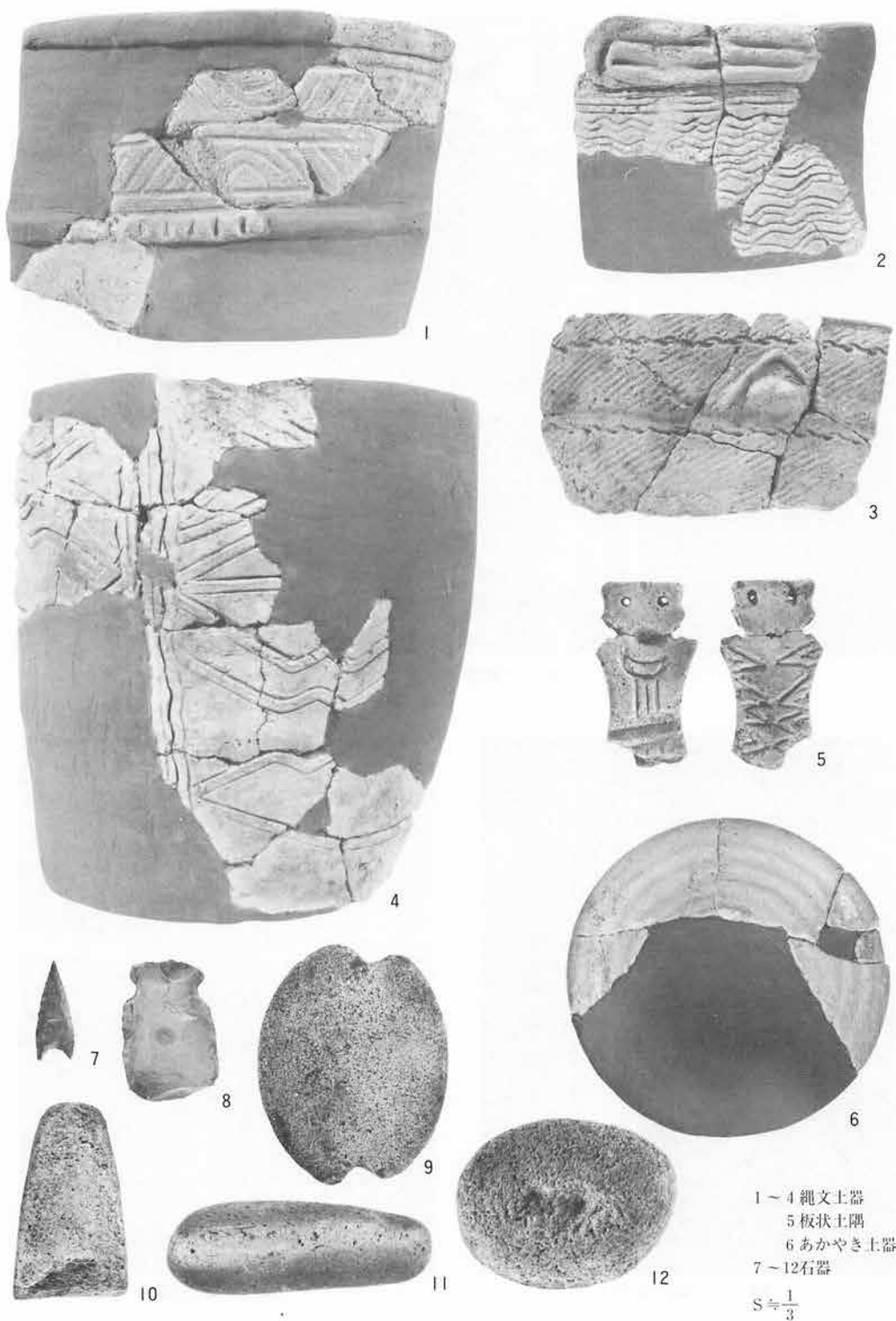


陥し穴（縄文時代）



溝（時期不明）

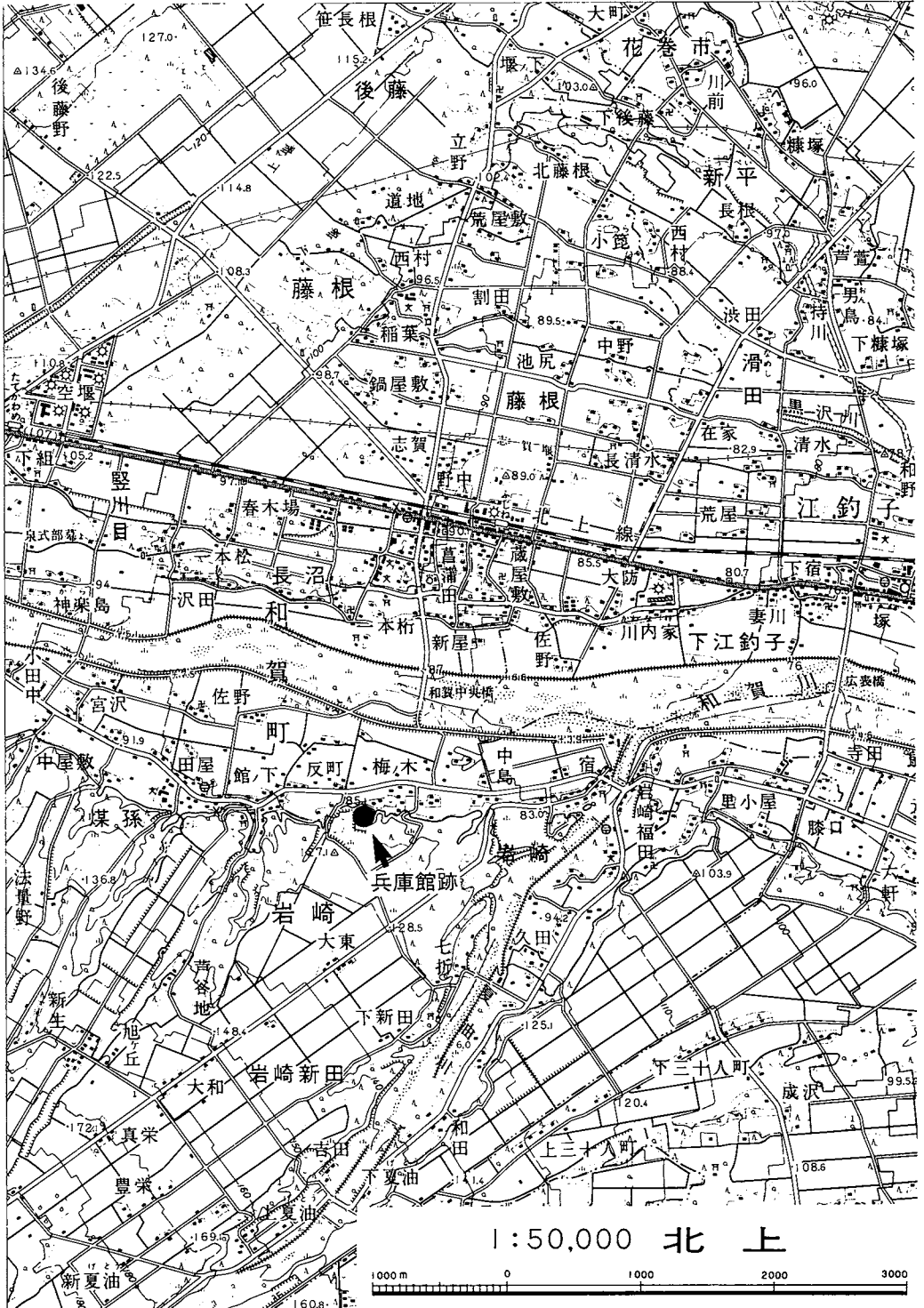
梅の木台地 I 遺跡 遺構



梅ノ木台地 I 遺跡 遺物

(5) 兵<sup>ひょう</sup> 庫<sup>こ</sup> 館<sup>だて</sup> 跡

所 在 地 和賀郡和賀町煤孫6地割64-6ほか  
委 託 者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年7月17日～8月5日  
調査対象面積 980m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 980m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME64-2019・HGD-89  
調査担当者 中村良一・川村 均  
協力機関 和賀町教育委員会



兵庫館跡位置図

## 1. 遺跡の立地

兵庫館跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南南西約1km付近に位置する。遺跡は、奥羽山脈から東流する和賀川右岸に発達した洪積世低位段丘上に立地している。また、和賀川とその支流夏油川の合流地点からは、西へ約2kmである。標高は122～123m、和賀川沿いの沖積面との比高は、約30～40mである。現況は山林と畑地がほぼ半々である。

## 2. 調査の概要

調査は、東北横断自動車秋田線の建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は、兵庫館跡主体部の西側にあたり、南北8m、東西105mにわたる細長い範囲と南東部の一部である。畑地は深耕されており、地山面まで攪乱されている。発見された遺構は、建物跡1棟、溝1条である。また、遺物は、縄文土器、石器、弥生土器等が若干出土している。

### 〈建物跡〉

検出された建物跡は炭窯に伴うものと思われる。身舎は桁行、梁行とも1間で東側に庇をもち、身舎部分に竪穴住居状の掘り込みをもつ。掘り込み部分の平面形は、長辺4m、短辺3.5mの長方形である。床面は2段になり、東壁から南壁に沿った幅70cmの範囲が10～15cmほど高くなっている。柱穴は北壁隅に2個、南壁の外に2個検出され、4本柱である。北側の調査区域外に炭窯がある。出土遺物がなく時期を特定することはできない。

### 〈溝跡〉

溝は、建物跡の掘り込み部分の東側1.2～1.6m付近で検出され、幅は30～40cm、深さ20～30cmで、ほぼ南北方向に直線的に延びている。柱穴との切り合い関係から、溝が建物跡より新しいものと思われる。出土遺物がなく、建物跡と同様に時期を特定することはできない。

### 〈出土遺物〉

西端から縄文土器片と石器の剥片が、東側からは、石斧の刃部破片、磨石、石皿等の石器と弥生土器片がそれぞれ若干出土している。また、沢頭付近にあたる南東部の調査区から、土製品、弥生土器4個体以上の細片がまとまって出土している。畑地からは、ほとんど遺物は出土していない。

## 3. まとめ

縄文時代と弥生時代の土器が若干ではあるが出土していることから、周辺に集落の存在することが推測される。検出された建物跡は炭窯に付属する施設と考えられ、その構築とともに貴重な資料になるものと思われる。館跡に関連する遺物、遺構は、館跡の主体部から離れていることから確認されなかった。



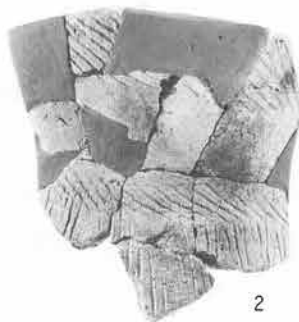
調査区近景



建物跡



1



2



3



4



5



6



7



8



9



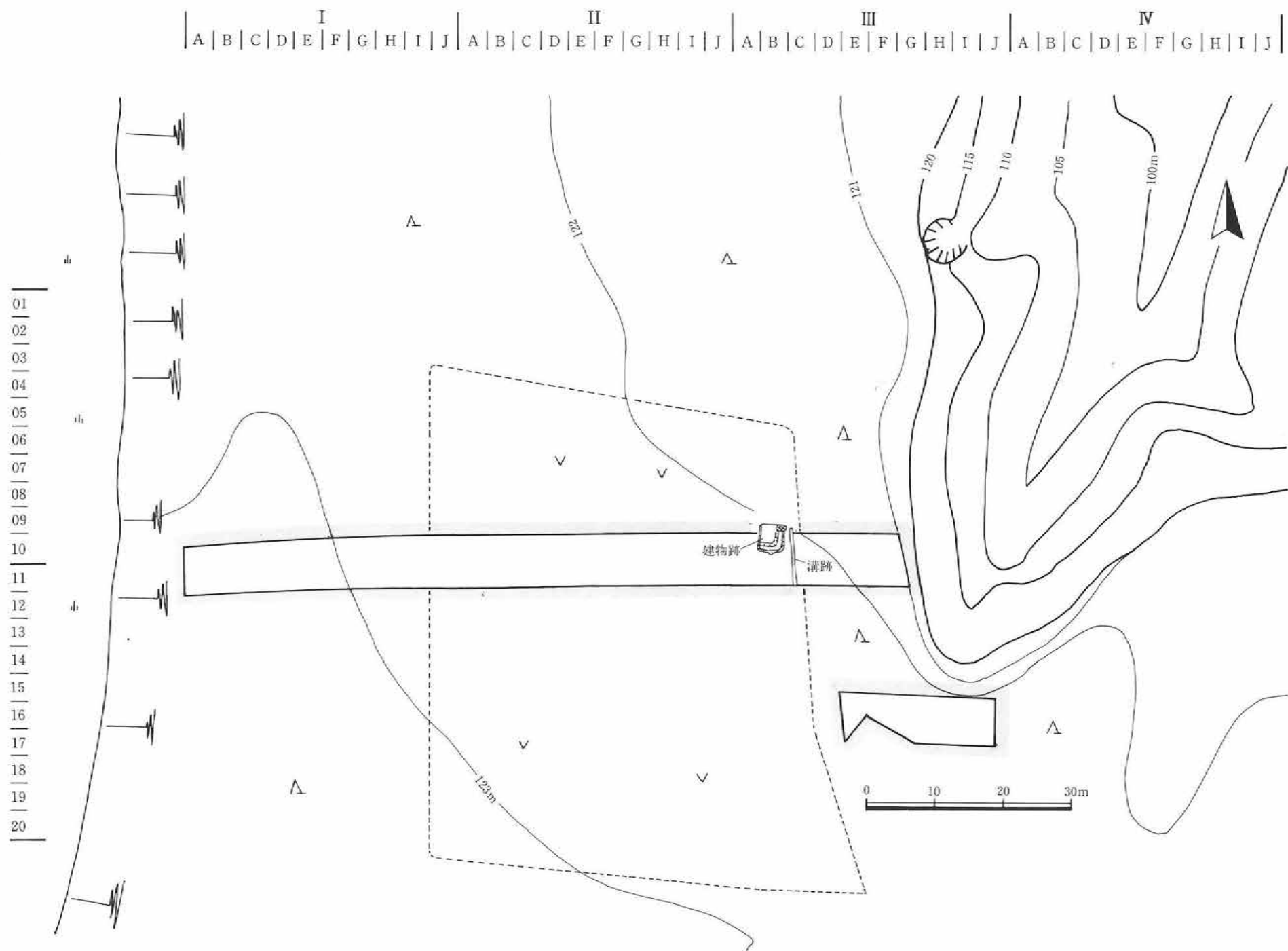
10

- 1. 縄文土器
- 2. 3. 4. 弥生土器
- 5~9. 石器類
- 10. 土製品

1~4, 7	S = 1/3
5, 6, 10	S = 1/2
8, 9	S = 1/5

兵庫館跡 遺構・遺物





兵庫館跡遺構配置図

## (6) ほんごう 郷 遺 跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫第2地割159-3ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年4月11日～10月31日  
調査対象面積 12,540m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 12,540m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME63-1262・HG-89  
調査担当者 小田野哲憲・酒井宗孝・菊地達哉・及川 渉  
協力機関 和賀町教育委員会



## 1. 遺跡の立地

本郷遺跡は、東日本旅客鉄道北上線立川目駅の南約2.5kmに位置する。遺跡は奥羽山脈から東流する和賀川右岸の河岸段丘上にあり、東側と西側は北流する沢に開析されている。調査区域は、この台地の先端部に相当し、標高は124～130m、和賀川との比高は約35mである。現況は山林である。

## 2. 調査の概要

本調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴う緊急発掘で、今年度は対象面積15,490㎡のうち12,540㎡を調査した。検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡15棟、陥し穴状遺構30基、炉・焼土遺構11、土壇24基、フラスコ形ピット2基、小判形ピット5、平安時代の竪穴住居跡4棟、方形土壇2基、時代不明の溝2条、集石2基、炭窯1基などである。遺構は調査区の中央部分に集中しており、西側ではほとんど検出されていない。出土遺物は縄文土器がほとんどで、土師器、須恵器、鉄製品等は遺構内で出土している。

### 〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡15棟はすべて中期に属する。形状は円形及びやや楕円形を呈し、規模は径4 m前後が最も小さく、平均は6～7 m程度である。長径15m、短径11mの大型住居跡が1棟ある。柱穴の数は一定しない。炉は地床炉、土器埋設を含む石囲炉が半々であり、石が抜き去られた炉もある。単独で検出されたのは5棟で、他は2～3棟が載り合って存在している。

平安時代の住居跡4棟は中型と小型が2棟ずつに分かれて検出された。中型の住居は一辺4.5×5 m前後で、カマドは東側で隅に寄る。柱穴は4本でカマド脇に貯蔵穴をもち、中から土器が多く出土している。小型住居は一辺2.5×2.8m前後で、カマドは東側と北側で隅に寄る。柱穴は検出できなかった。カマドの袖材として石のほかに須恵器甕の大破片を利用している。

### 〈土壇〉

縄文時代の土壇24基は径1 m前後の円形のものが多い。埋土中に焼土が混るもの、土器片、剝片が入っているもの、礫を敷くもの、無遺物のものなどがあり、深さも一定しておらず、様々な機能が考えられる。墓壇と判断できるような例はない。

平安時代の土壇2基は方形で、中型の住居の近くに位置しており、住居に付随する遺構と考えられる。

### 〈フラスコ型ピット〉

2基のうち1基は上部が削平されているが、2基とも開口部径1.2m、底部径2.0m、深さ1.0 m前後である。底部に黒色腐植土があり、禾本科とおもわれる茎及び種子状の炭化物が検出された。

#### 〈小判型ピット〉

5基のうち1基を除いて長径1.0～1.2m、短径0.5～0.7m、深さ0.8～1.0m前後の形状である。埋土中には礫や縄文土器片が混るが、底面からの出土品はない。住居跡内で検出されたものは貼り床の下にあり、内部施設ではないことを示している。

#### 〈陥し穴状遺構〉

検出された30基は形状から、溝状2、隅丸長方形12、円形7、底面方形のもの9基の4形態に分けられる。溝状のものは副穴をもたないが、他のプランのものでは半数近くが1～3本の副穴を有している。溝状プランのものは、調査区東端で検出され、他のタイプは住居跡群の中とそれより北側の一段低い面に集中している。

#### 〈炉跡・焼土〉

11基のうち8基は縄文住居跡の周辺で検出された。石囲いの例はないが、埋設土器をもつ例が2基ある。他の3基は時期判断する遺物に乏しく不明である。

#### 〈溝跡・炭窯等〉

道路より東側で長さ19m、32m以上の溝2条を検出した。後者は地籍図の地境いと合致しており、他の1条もその可能性がある。

炭窯は溝の下面で検出された。1.15×0.85mの長方形プランである。時代は不明である。

ほかに集石が2カ所で検出されたが、表土面にあり単に耕作の際に石を集めた可能性がある。

#### 〈出土遺物〉

縄文時代の土器はほとんどが大木7b・8a式であり、斜面部から大量の破片が出土した。土器以外には土偶、土版、岩版、有孔石製品、ヒスイ製垂飾り、各種の石器類が数多く出土したが、石鏃は少ない。

平安時代の遺物は住居跡と方形土壇出土のものがほとんどで、住居跡からは土師器坏・甕、須恵器坏・大甕のほかに、鉄製紡錘車、刀子、雁股鏃などが、土壇からは管状の土錘が出土している。

### 3. まとめ

本郷遺跡は南側の高位面に縄文時代中期の集落が、北側の低位面に平安時代（10世紀頃）の集落が営まれていたことが明らかになった。縄文時代の集落はさらに南側部分に、平安時代のそれは逆に北側に広がっているものと推定される。縄文・平安両時代とも遺物は短い時間内に集中しており、量的にも豊富である。前者では擦石類、石錘が多く石鏃は少なく、後者では土錘が多く出土するなど、和賀川流域での当該時期の生活を知る上で貴重な資料が得られた。



- |          |        |          |    |
|----------|--------|----------|----|
| 縄文時代の住居跡 | 土拵     | フラスコ状ピット | 集石 |
| 平安時代の住居跡 | 小判状ピット | 焼土・炉     | 埋甕 |
| 陥し穴状遺構   | 方形土拵   | 溝        | 炭窯 |

本郷遺跡遺構配置図

縄文時代中期の住居跡 (II G-1 住居跡)



全景 (北から)

平安時代の住居跡 (I G-1 住居跡)



全景 (南から)



床面・遺物出土状況



ピット内・遺物出土状況

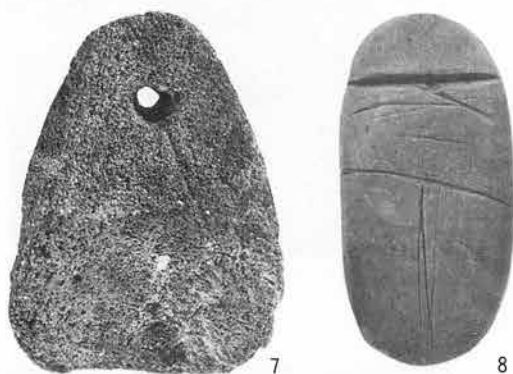
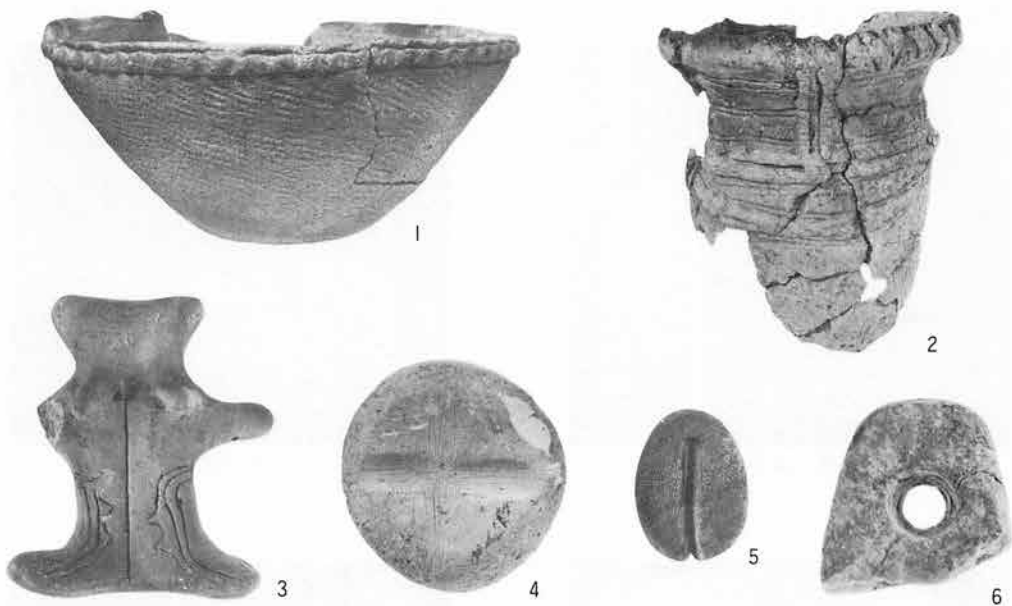


土器埋設石囲炉



カマドのくりぬき式煙道

### 本郷遺跡 遺構



- 縄文時代(中期)の遺物  
 1. 浅鉢 (S : 1/3)  
 2. 深鉢 (S : 1/3)  
 3. 板状土偶 (S : 1/2)  
 4. 石製品 (S : 1/2)  
 5. 块状耳飾り・未製品 (S : 1/2)  
 6. ヒスイ垂飾り (原寸)  
 7. 有孔軽石製品 (S : 1/3)  
 8. 刻線磨石 (S : 1/2)

- 平安時代の遺物  
 9. 土師器・甕 (S : 1/3)  
 10. 11. 土師器・坏 (S : 1/3)  
 12. 鉄器・雁股鍬 (S : 1/2)

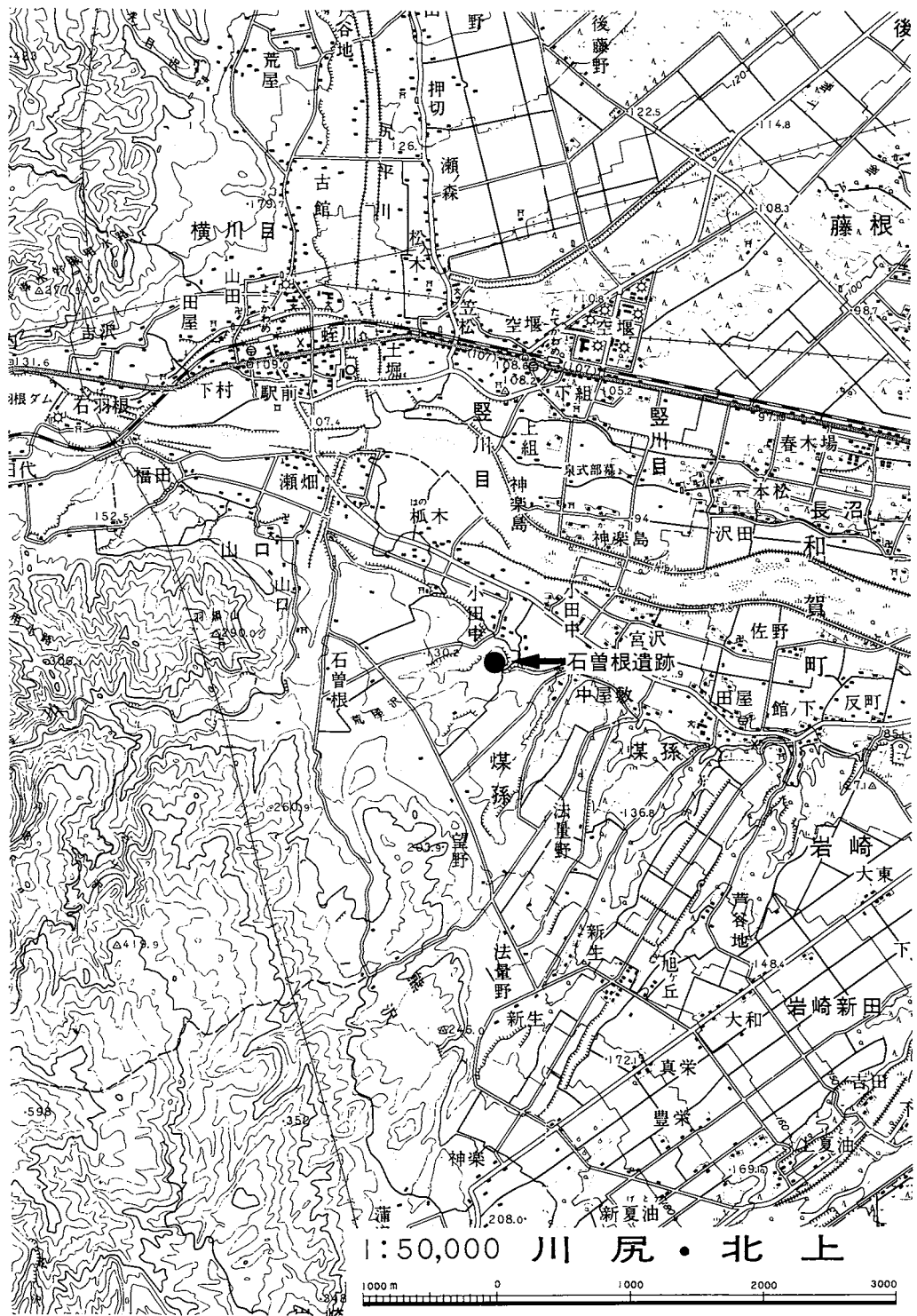


本郷遺跡 遺物



## (7) 石曾根遺跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫第2地割56-6ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年8月7日～11月17日  
調査対象面積 2,450㎡  
発掘調査面積 2,450㎡  
遺跡番号・略号 ME63-1174・IS-89  
調査担当者 酒井宗孝・菊地達哉・及川靖世・及川 渉  
協力機関 和賀町教育委員会



石曾根遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

石曾根遺跡は、東日本旅客鉄道北上線立川目駅の南東約2.3kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区域は、緩斜面を挟んで、標高126～127m前後の高い面と標高124m前後の低い面にまたがり、それぞれ洪積世中位段丘の村崎野段丘と低位段丘の金ヶ崎段丘に比定される。現状は山林である。

## 2. 調査の概要

調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴う緊急発掘調査である。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡14棟、掘立柱建物跡1棟、土坑18基、陥し穴状遺構13基、炉跡及び焼土遺構7カ所などである。

これらの遺構は、斜面部から高い面にかけて分布しており、一段低い面では検出されなかった。また、斜面のいくぶん急な部分には、遺物包含層が形成されていた。出土遺物は縄文時代中期の土器を中心に、石器、石製品、土製品などがある。

### 〈竪穴住居跡〉

14棟の竪穴住居跡は、出土した土器の特徴から中期中葉13棟、晩期末葉1棟に分けられる。

中期の住居跡は、高い面から斜面の中位にかけて直径70～80mの不整な弧を描くように分布する。平面形には、円形、楕円形、卵形、隅丸正方形、隅丸長方形がある。このうち最大の住居跡は、長辺約8.5m、短辺約7mの隅丸長方形を呈し、北壁と東西壁の一部に「ベット状」の段を有する。このほか、8.5×6.5mの卵形、7.5×6.5mの楕円形の比較的規模の大きな住居跡が2棟ある。炉の形態には石囲炉と地床炉があり、石囲炉6・地床炉5・不明2に分けられる。

これらの住居跡には重複するものや、相互の距離が近いものがあり、時期を異にする集落の営みが窺われる。

晩期の住居跡は、緩斜面の下部から検出された。斜面の下位にあたる東半部は流失しているが、残存部からの推定では直径3.5m前後の不正な円形を呈していたものと考えられる。炉は石囲炉で、床面のほぼ中央部に設置されている。柱穴は検出されなかったが、斜面上位にあたる壁に沿って幅15～20cm、深さ20～30cmの壁溝が巡る。埋土の下部には、灰白色の粉状火山灰が観察された。

### 〈掘立柱建物跡〉

柱穴内出土の土器から、縄文時代中期中葉の遺構である。桁行2間約4.8m、梁行1間約3.2mの規模をもつ。柱穴は直径35～45cm、深さ31～45cmの規模で、柱痕跡は確認できなかった。

### 〈土坑〉

土坑は、高い面から斜面の上部にかけて数基ずつまとまって分布する。形態は、14基がフラ

スコ形、2基が浅皿形、2基が円筒形である。遺物を伴うものが少なく、各々の時期については不明なものが多いが、住居跡と同様に縄文中期と晩期に分けられる。中期の土坑には同時期の住居跡を切る重複関係がみられた。規模は、底部径が1 m前後のものと1.5m以上のものがあり、深さは0.5～1.8mである。

#### 〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構には、溝状を呈するものと筒状を呈するものがある。溝状を呈するものは1基だけで、埋土の上部には晩期の住居跡にみられた粉状の火山灰が堆積する。規模は底部で長さ1.7m、幅35cm、深さ1.8mである。

筒状のものは、いずれも開口部が円形で、底部は隅丸方形を呈する。規模は開口部径1.2～1.7m、底部では1辺60～90cm、深さは0.9～1.2mである。底面には、直径20cm前後、深さ20～75cmの副穴をもち、土層断面に逆茂木と考えられる痕跡が観察されるものが数例ある。また、4基がほぼ同一線上に並ぶ配置がみられた。時期については今後の検討を要するが、縄文時代中期の住居跡に切られるものが2基、切るものが1基である。

#### 〈炉跡・焼土遺構〉

石囲炉1基と現地性焼土6カ所である。石囲炉は黒色土中から検出された。5個の礫を「コ」字形に配置したもので、炉内には僅かに炭化物がみられた。焼土遺構はいずれも褐色土層上面で検出された。柱穴や壁溝は検出されなかったが、検出面や周辺の土層の堆積状況から、掘り込みの浅い竪穴住居跡に伴う焼土の可能性が強い。

#### 〈出土遺物〉

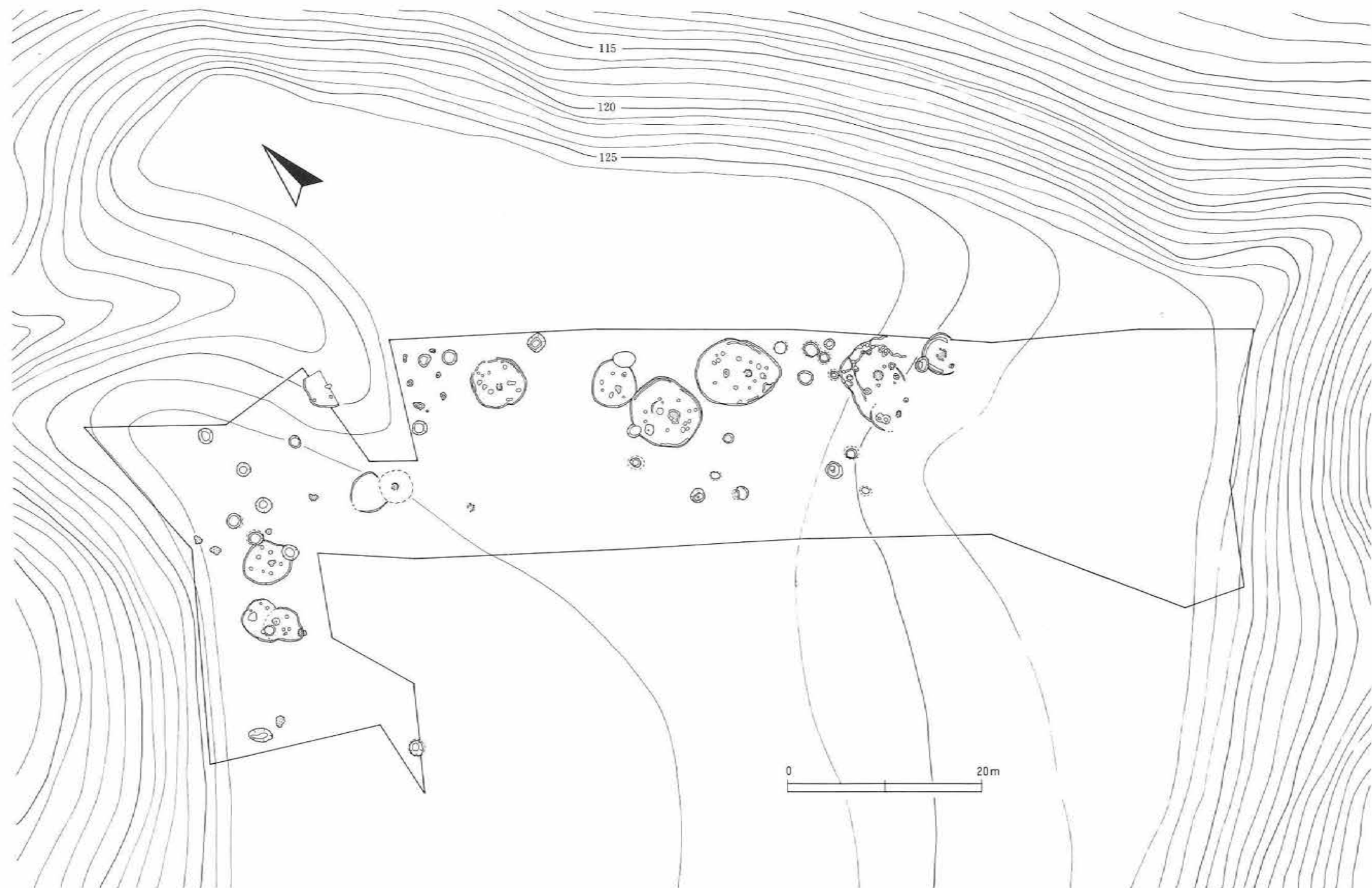
土器には縄文土器、弥生土器、土師器がある。大半は縄文土器で、中期中葉のものが多く、晩期末葉の土器が若干ある。弥生土器と土師器は共に数点だけの出土である。中期の土器は深鉢を主体とするが、特殊な器形としては、舟形の深鉢がある。

石器には石鏃、石匙、石錘、磨石、凹石、石皿などがある。なお、住居跡の埋土からは、多量の剝片が廃棄された形で出土している。

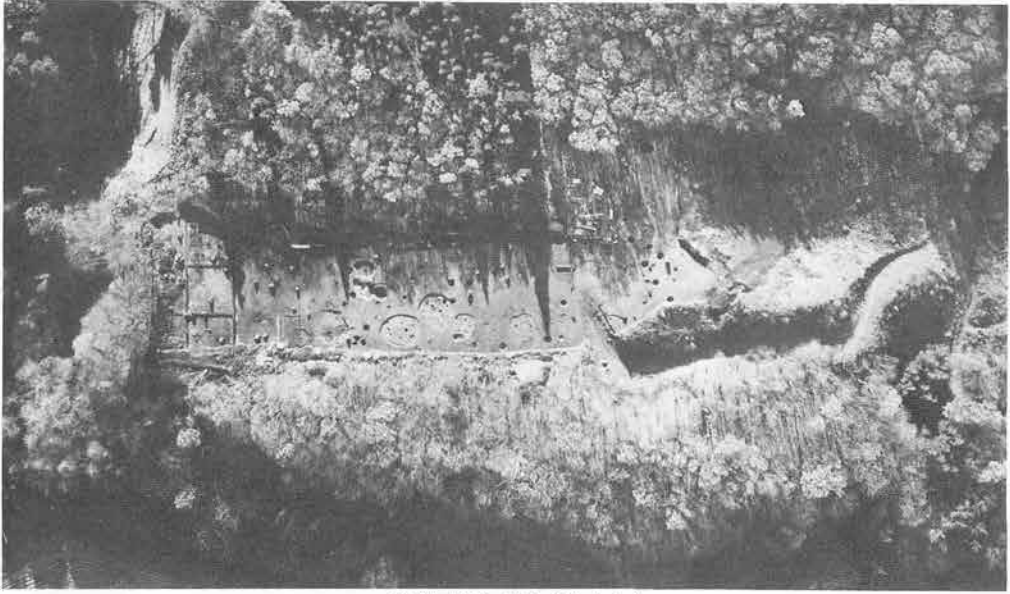
このほかに板状土偶、管状土製品、鰹形の垂れ飾りなどの土製品や、溶岩製の環状石製品、凝灰岩性の垂れ飾りなどの石製品が出土した。

### 3. まとめ

今回の調査で、石曾根遺跡は縄文時代中期の集落跡を中心とした遺跡であることが明らかになった。中期の住居跡や土坑の分布からは、当時の人々が場所を使い分けていたことが窺われる。また、縄文時代晩期末葉の住居跡は検出例が少なく、今後の研究に好資料を追加することができた。



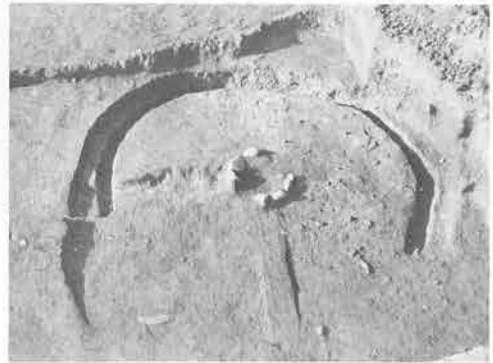
石曾根遺跡遺構配置図



調査区空中写真（北から）



縄文時代中期の住居跡



縄文時代晩期の住居跡

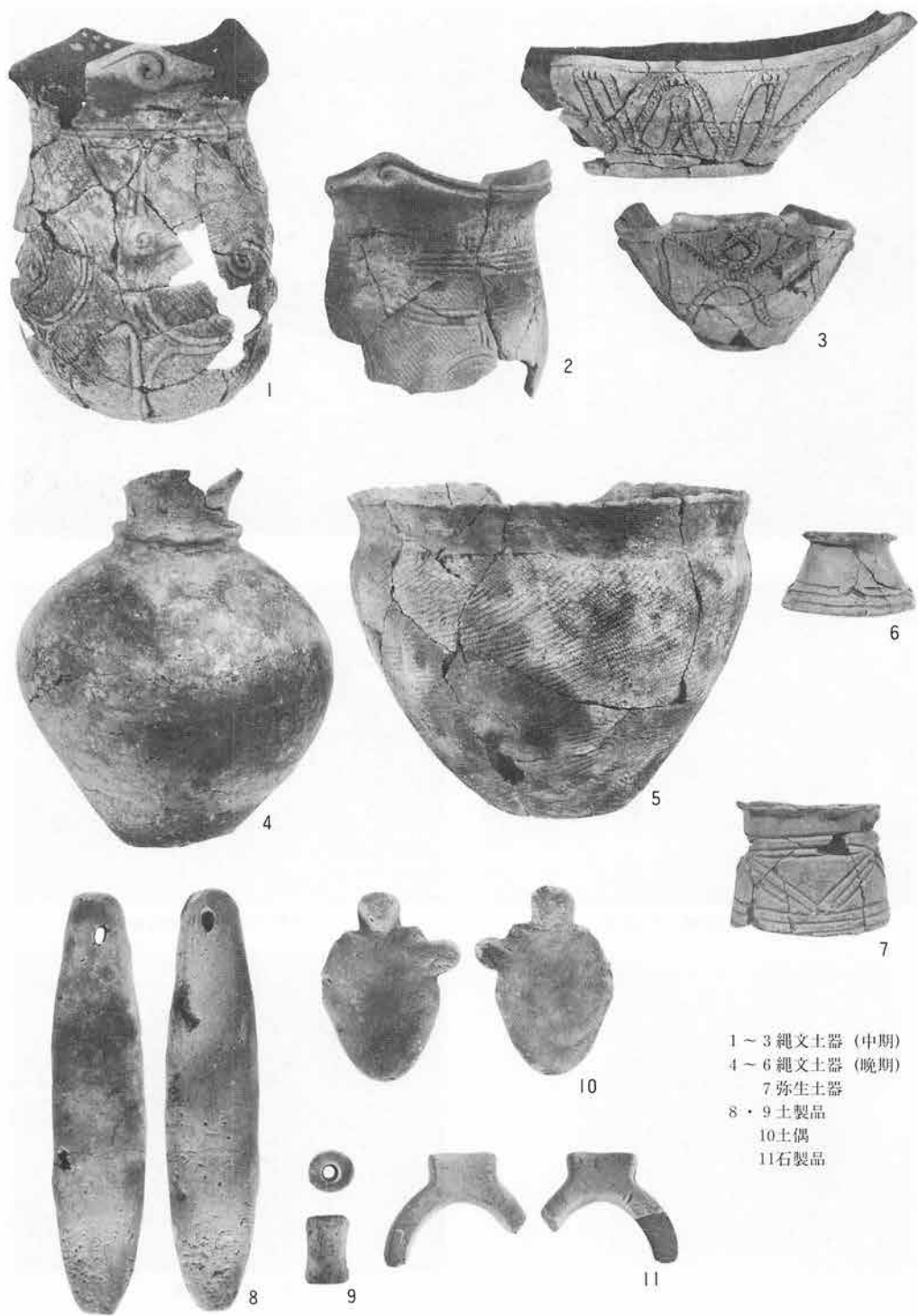


フラスコ形土坑



陥し穴状遺構

石曾根遺跡 遺構



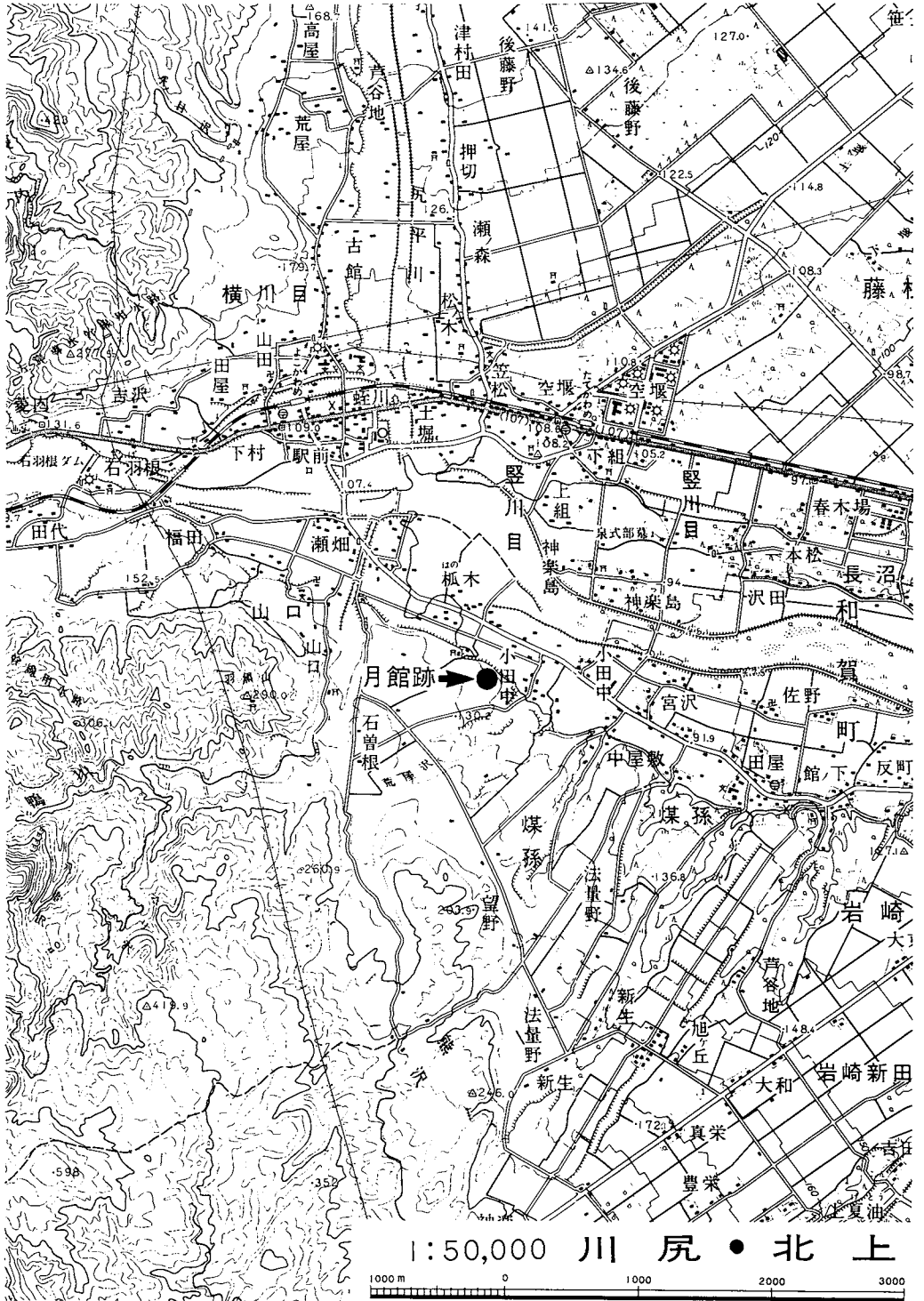
1 ~ 3 縄文土器 (中期)  
 4 ~ 6 縄文土器 (晚期)  
 7 弥生土器  
 8 · 9 土製品  
 10 土偶  
 11 石製品

石曾根遺跡 遺物

(8) 月<sup>つき</sup> 館<sup>だて</sup> 跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫1地割1-10ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年7月1日～10月7日  
調査対象面積 3,590m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 3,590m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME63-1117・TD-89  
調査担当者 中川重紀・鈴木貞行・女鹿文雄  
協力機関 和賀町教育委員会





月館跡位置図

## 1. 遺跡の立地

月館跡は東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東2.5km付近に位置し、和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地している。調査区域の標高は126m前後で、和賀川との比高差は約27mである。東側には「だの沢」と呼ばれる小沢を隔てて八幡館跡が存在し、西側は土取によって削平されている。現況は山林である。

## 2. 調査の概要

本遺跡の調査は東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は東西約100m、南北約40mの範囲である。

検出された遺構は、館跡に伴う堀跡1条、柵列状柱穴列1列、土塁状遺構1カ所、柱穴4個、ほかに縄文時代の陥し穴状遺構12基、土坑2基、所属時期の不明な溝跡8条である。

### 〈堀 跡〉

南北方向から湾曲して東西方向に走り、西端は「だの沢」に続いている。東西約50m、南北約11m、上幅約5m、底部幅約0.3m、深さ1.4～2mである。横断面形は葉研状であるが、両側の壁には10～20cmの比高差で犬走り状の段が見られる。

### 〈柵列状柱穴列〉

東西の堀に沿って、約5mの間隔で11個の柱穴が直線上に並んでいる。柱穴の平面形は方形で掘り方は一辺約60cm、深さ20～30cmである。柱痕は見られない。

### 〈柱穴・柱穴状小土坑〉

柱穴4個、柱穴状小土坑12個が検出された。柱穴の平面形は円形および方形で、円形のは直径約50cm、方形のものは一辺30～50cm、深さは共に約50cmである。これらは柵列状柱穴列中央付近に2個一対で検出されたため出入口に伴う遺構と推定される。平場西側で検出された柱穴状小土坑は、直径約20cmの円形である。

### 〈土塁状遺構〉

調査区西側の崖に沿って、幅約1m、高さ20～30cmの高まりが見られたものである。

### 〈陥し穴状遺構〉

平面形態から溝状3基、長方形7基、円筒形1基、楕円形1基に分けられる。溝状のものは長さ約3m、幅約40cm、深さ12～50cmである。長方形のものは一辺の長さ1～3m、幅60～70cm、深さ約1.2mで、底面に杭跡が認められるものがある。円筒形のは直径90cm、深さ1.5mである。楕円形のは長辺2.5m、短辺1.8m、深さ1mで、杭跡が底面中央に交差するように2カ所認められる。

#### 〈土 坑〉

平面形態が円形と長方形のものが各1基検出された。円形のは堀跡底面で検出され、直径90cm、深さ50cmである。長方形のものは長径1.15m、短径55cmである。これら2基の土坑は、形態等から陥し穴の可能性も考えられる。

#### 〈溝 跡〉

溝跡はいずれも地目境および地籍境に沿って検出された。長さ5～27m、幅約40cm、深さ約15cmで、これらは表土面から掘りこまれている。

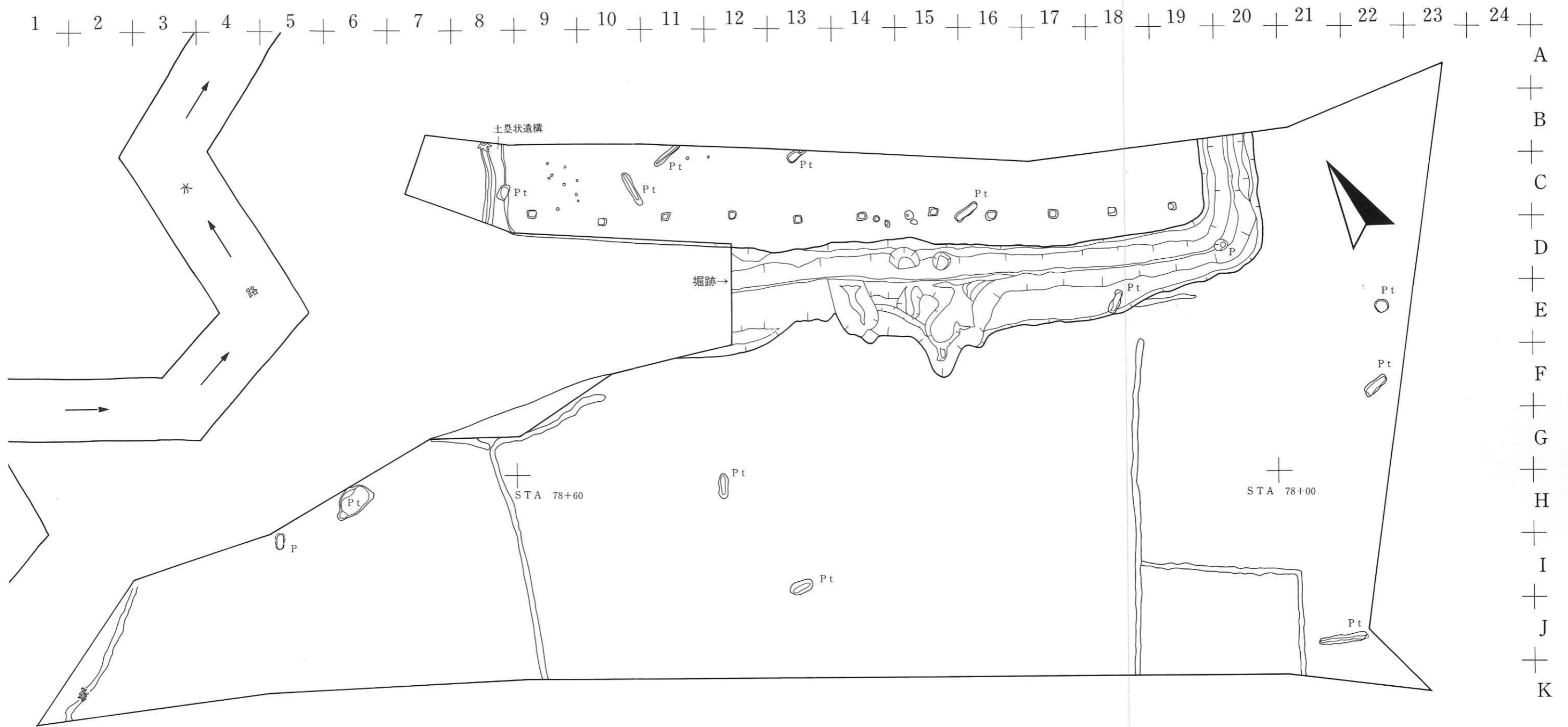
#### 〈出土遺物〉

館跡に伴うものと考えられる染付磁器の小片1点が、堀に画された北側の表土層から出土している。このほかには、主に調査区西側から縄文時代後期の土器片や石器が少量と、東側から弥生土器の破片数点が出土している。また、表土中から近世の泥人形1点が出土している。

### 3. まとめ

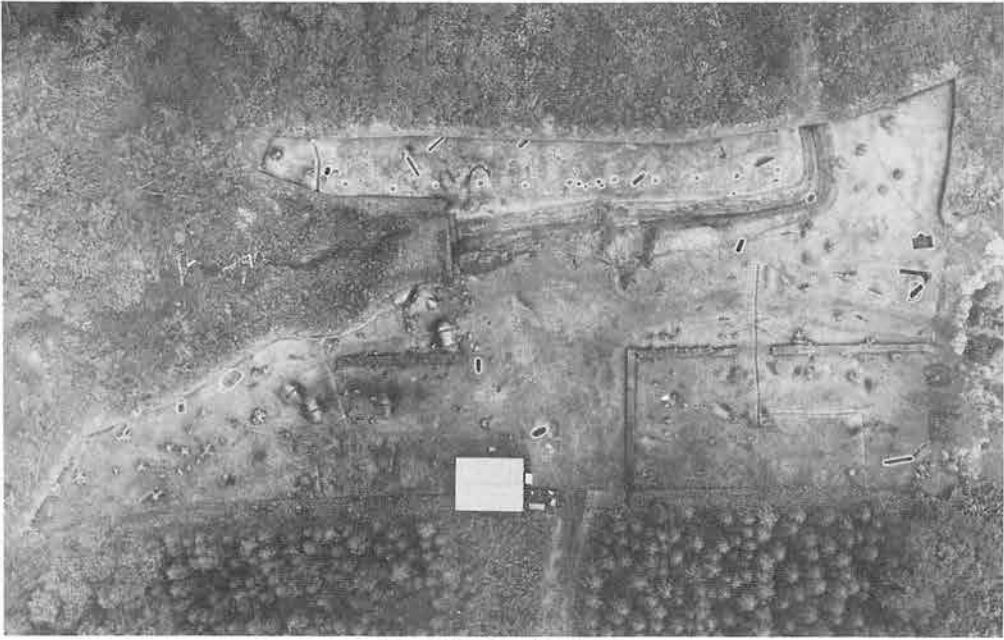
今回の調査では堀跡、柵列状柱穴列等が検出され、月館跡の一部が明らかになった。

館跡以外では、縄文時代の遺構と考えられる陥し穴が検出され、少量の遺物も出土していることから、縄文時代から狩り場として利用されていたことが推定される。



P t 陥し穴状遺構  
P 土坑

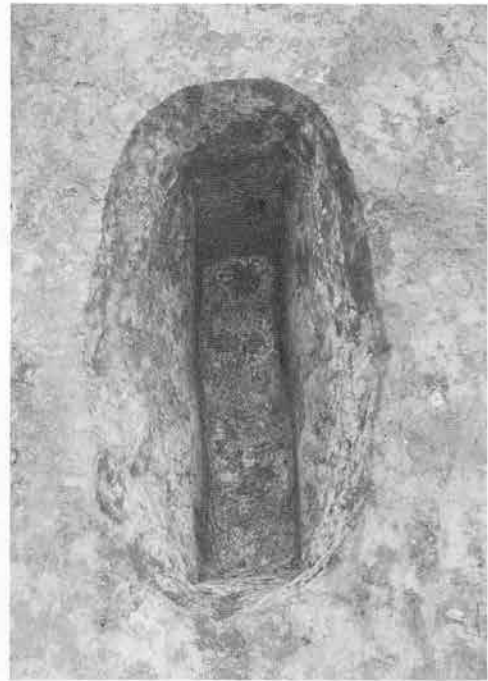
月館跡遺構配置図



遺構配置状況（空中写真）

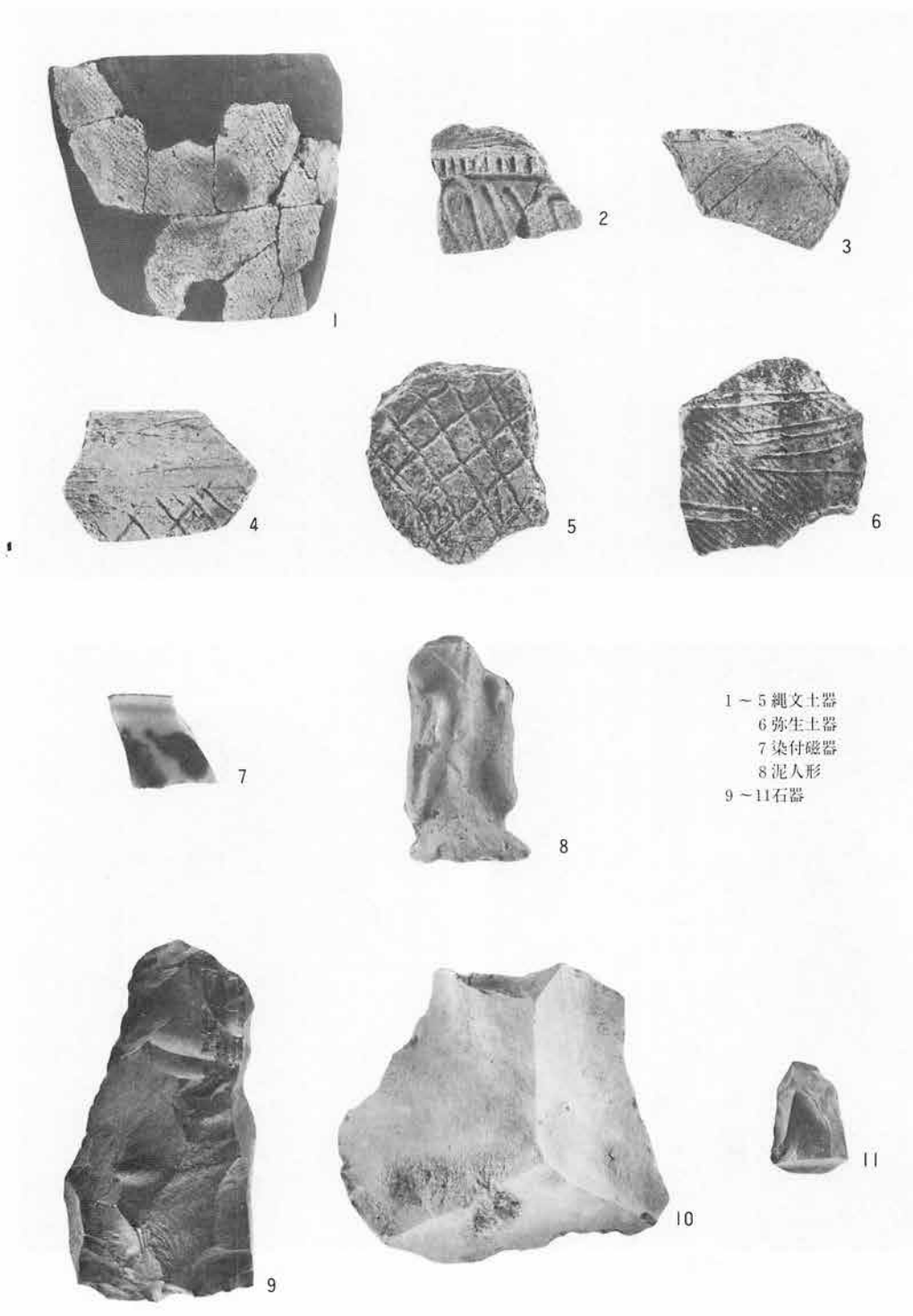


掘跡



陥し穴状遺構

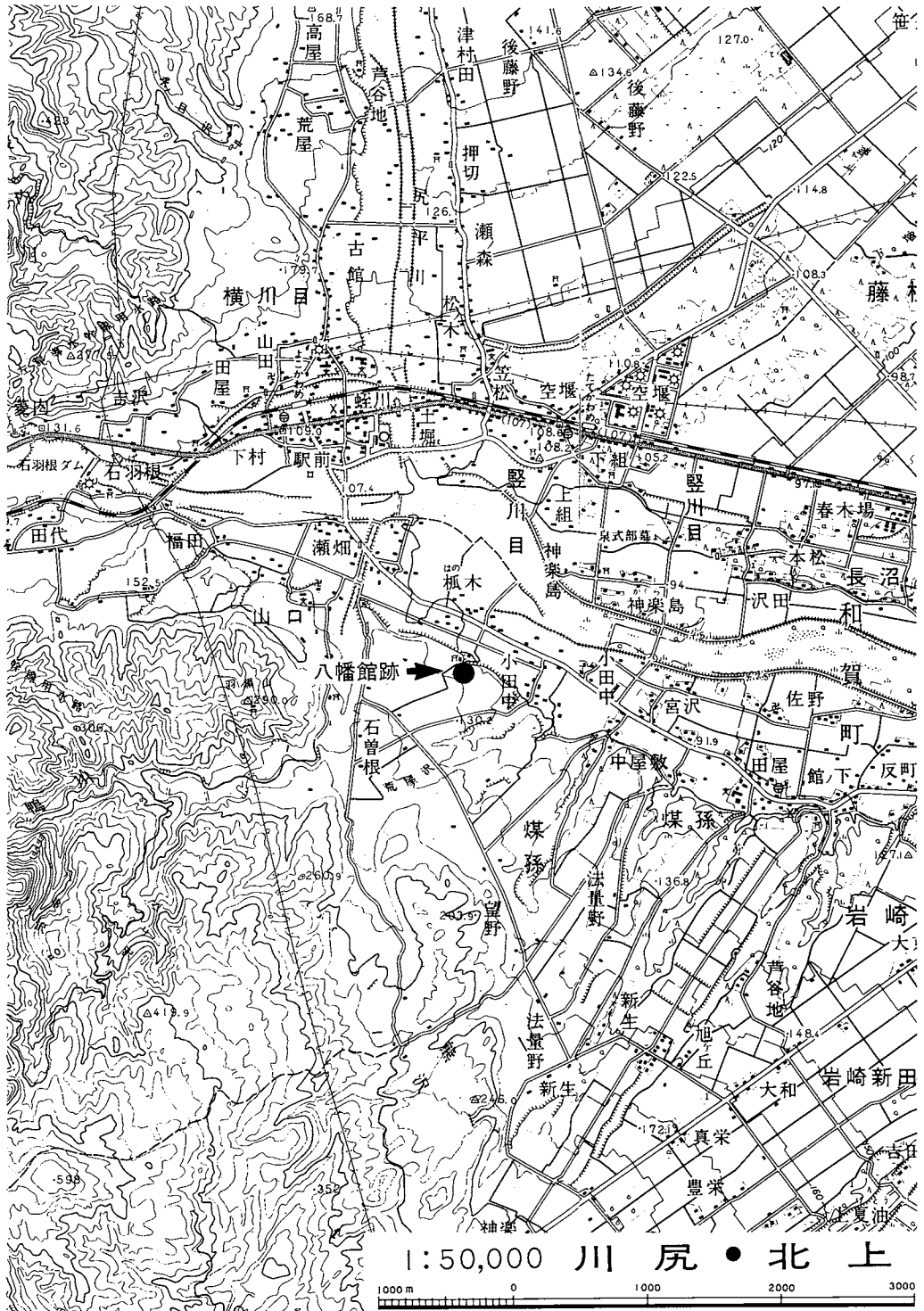
月館跡 遺構



月館跡 遺物

(9) はち まん だて  
八 幡 館 跡

所 在 地 和賀郡和賀町山口46地割67—16ほか  
委 託 者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年4月10日～7月31日  
調査対象面積 3,820㎡  
発掘調査面積 3,820㎡  
遺跡番号・略号 ME63—0194・HMD—89  
調査担当者 中川重紀・鈴木貞行・女鹿文雄  
協力機関 和賀町教育委員会



八幡館跡位置図



## 1. 遺跡の立地

八幡館跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東約2.5km付近に位置し、和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘の岩崎段丘上に立地している。遺跡の標高は126m前後、和賀川との比高差は約27mである。調査前の現状は山林であるが、以前には一部を畑地として利用していたようである。周辺の遺跡には東側に「だの沢」をはさんで月館跡、西側に農道をはさんで八幡野II遺跡が隣接している。

## 2. 調査の概要

東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査であり、調査区域は東西約90m、南北幅約40mである。

遺構は主に調査区の東側で検出され、平安時代の住居跡4棟、縄文時代晩期終末から弥生時代と考えられる土坑5基、陥し穴状遺構4基、時期不明の焼土遺構1カ所、溝跡3条である。

### 〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡4棟は何れも黒褐色土層中から掘り込まれ、東端の1棟は崖の崩落により、全体を確認できなかった。他の3棟はおおよそ方形状を呈している。規模は3棟とも1辺3m前後である。床面はいずれも黄褐色土層上面であり、黄褐色土層中への掘り込みは浅い。カマドは南壁東寄り、南東壁北寄り、南西壁西寄りに設置され、南東壁東寄りのカマドでは袖部、煙道部とも石組みされている。他のカマドの袖は芯材に石を使用し、その上をシルトで覆っている。柱穴は不明である。

### 〈土 坑〉

長方形のもの3基、円形状のもの2基に分けられる。長方形土坑の1基は長さ1.60m、幅95cm、深さ80cm、他は長さ2m、幅90cm、深さ50cmであり、長軸の方向が東西方向にある。円形状土坑の規模は直径1m前後、深さ30cmと浅い。円形状土坑の埋土から縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器片と石器が若干出土している。

### 〈陥し穴状遺構〉

4基のうち1基は長軸の方向が北東から南西方向の溝状を呈し、長さ4m、幅40cm、深さ1mである。他の3基は長方形で、長さ1.6～2.2m、幅0.7～1.2m、深さ0.8～1.5mである。深い1基には杭跡がある。

### 〈焼土遺構〉

調査区東側のII層面で検出された直径20cm、厚さ10cmの焼土であり、溝の一部を切っている。同一面で焼土粒や炭化粒が見られたが、遺物等は出土していない。

#### 〈溝 跡〉

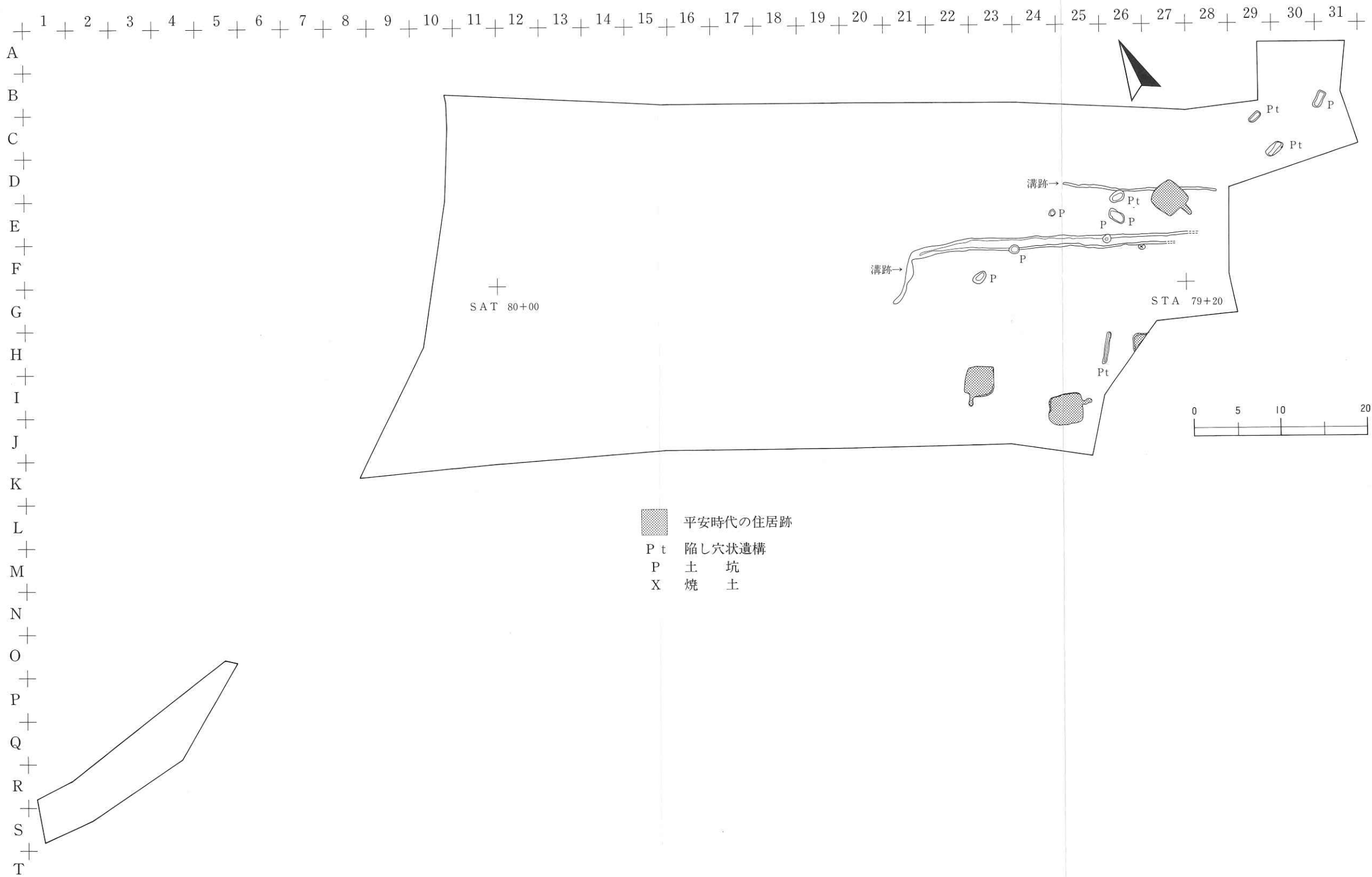
調査区の東側に平行して3条検出された。いずれも基本土層のII層から掘り込まれ、長さ18～23m、幅20cm、深さ20～30cmである。

#### 〈出土遺物〉

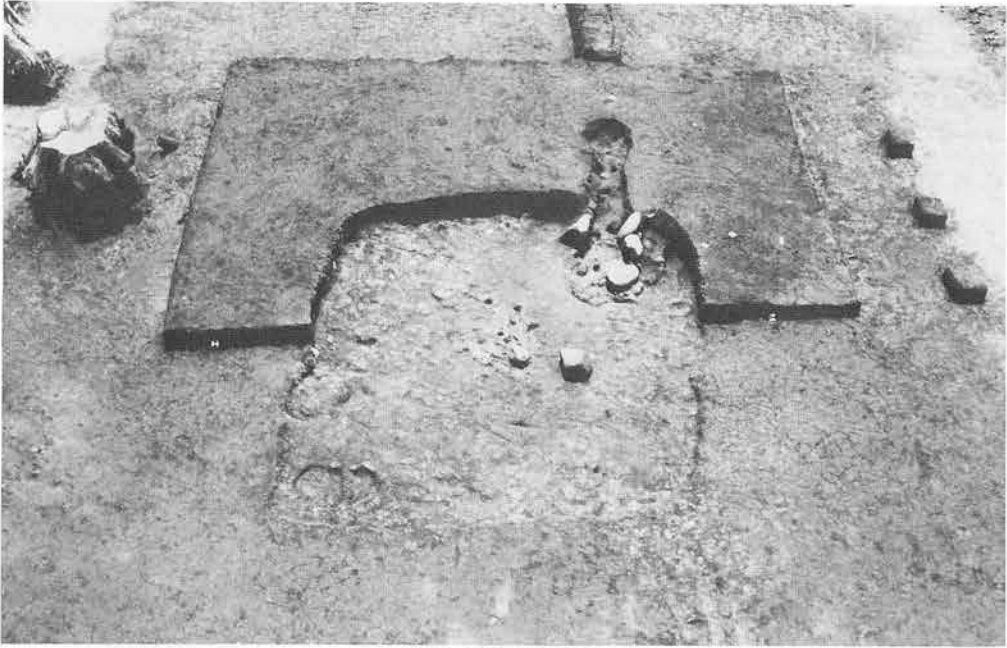
平安時代の住居跡からは坏、甕、蓋等の土師器、須恵器の破片が出土している。調査区東側のII～III層中にかけて縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器、土偶、石器、剥片等が出土している。他には西側のV層中から礫の一部に加工が施された大型の剥片が1点出土している。

### 3. まとめ

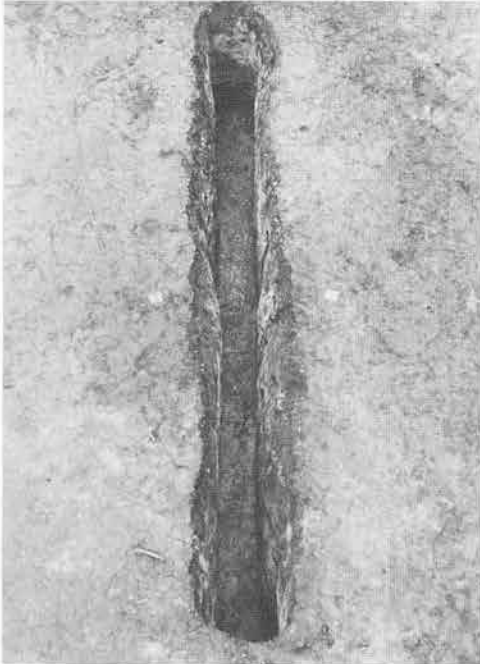
今回の調査によって、館に関する遺構や遺物は確認されなかったが、平安時代の住居跡やその他の遺構や遺物が発見された。それらの遺構や遺物から、縄文時代から弥生時代にかけての時期、そして平安時代の複合遺跡であることが確認された。今回の調査区は縄文時代には狩り場、平安時代には居住域であったことが明らかになった。



八幡館跡遺構配置図



平安時代の住居跡



陥し穴状遺構



土坑

八幡館跡 遺構

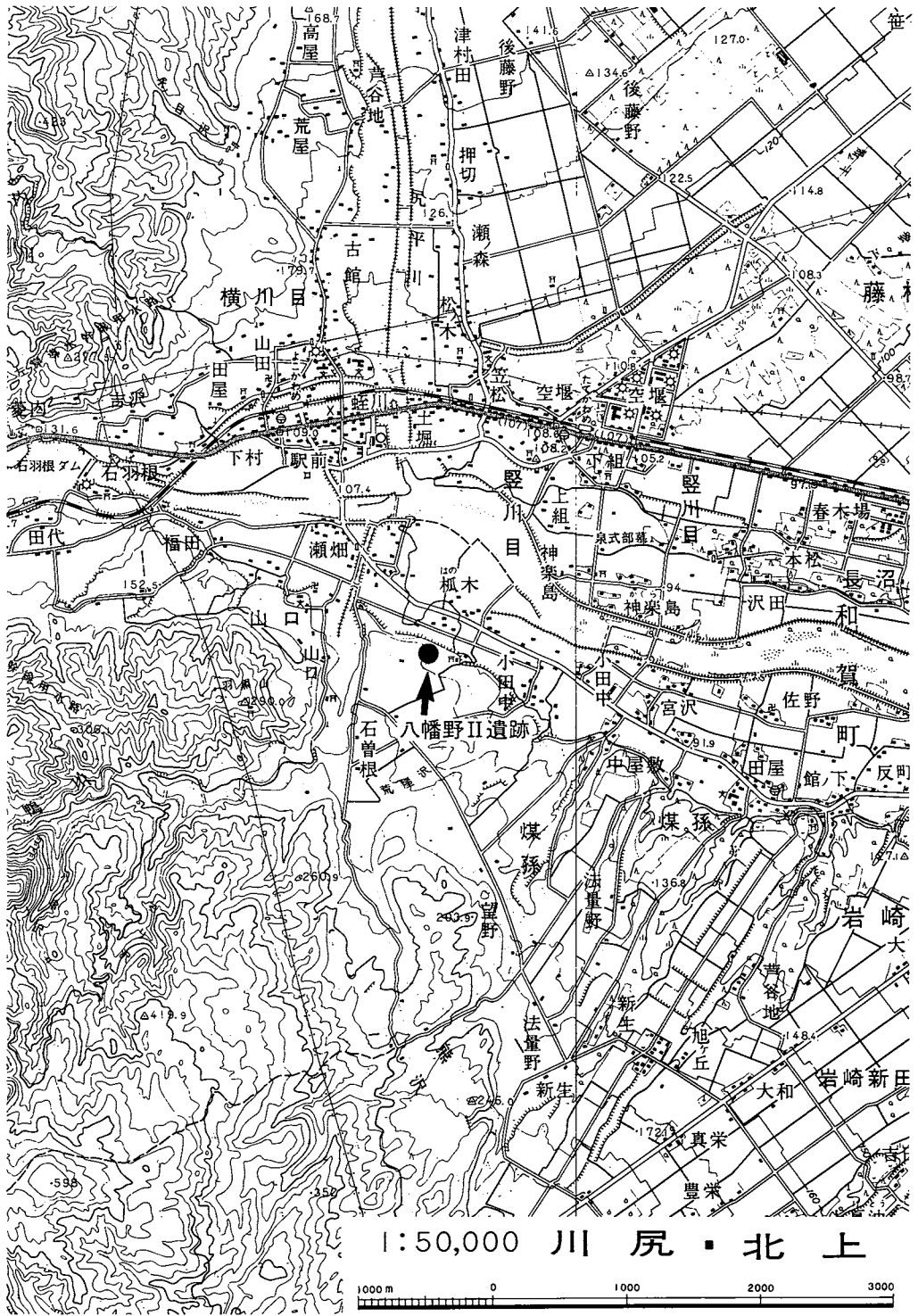


- 1・2 弥生土器  
3～5 土師器  
6～8 石器  
9 土偶  
10 独钻石

八幡館跡 遺物

(10) はちまんの  
八幡野 II 遺跡

所在地 和賀郡和賀町山口40地割99-1ほか  
委託者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年5月16日～10月19日  
調査対象面積 25,160m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 25,160m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME63-0181・HMII-89  
調査担当者 工藤利幸・村上 修・及川靖世  
協力機関 和賀町教育委員会



八幡野II遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

八幡野II遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東2.2km付近に位置し、奥羽脊梁山脈に源を發し和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に發達した更新世低位段丘上に立地している。遺跡をのせる段丘は、その上を鈴鴨川等による崖錐性堆積物に被われており、この堆積物は扇状地を形成している。遺跡の標高は127～132mの範囲にあり、和賀川との比高は27～32mである。

遺跡の西側には田中館跡が、東側には八幡館跡や月館跡が近接している。調査区域の現況は山林であるが、一部の区域は昭和40年代前半まで畑地として利用されている。

## 2. 調査の概要

本年度の調査区域は、東西約300m、南北170mで段丘縁に並行し、南北方向の中ほどに未調査区域が東西に広がっていることから大別2区域に区分される。調査区域の土層堆積状態は、かつての土地利用や崖錐性堆積物の起伏との関係から地点によって大きく異なるが、崖錐性堆積物の上位は大別3層に区分される。これらの堆積物は、いずれも黒色～暗褐色の腐植土である。また倒木痕や凹地などには完新世の降下火山灰が散見される。

発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、大小の土坑8基である。このほかに火山灰のブロックが住居跡様に分布するところ1カ所、焼土2カ所が確認されている。これらの遺構は、極く一部の区域に偏在している。遺物は段丘縁に沿った北側の区域全域から散在的に出土しているが、南側の区域からは数点の剥片と土器片が出土しているにすぎず、大部分の遺物(特に土師器、須恵器)は竪穴住居跡の周辺から出土している。

### 〈竪穴住居跡〉

住居跡は、平面形が1辺5.3m前後の方形と考えられるが、竪穴部が黒褐色～黒色土中にあることや倒木痕のため全体の形状は不明である。カマドは南辺の西側に偏って設けられており、袖部は偏平礫等を芯として造られているが木根等による破壊が見られ天井部は残っていない。

煙道部は掘りこみ式で礫や土師器破片を組みあわせて造っている。カマド周辺の床には大小の土坑が見られるが、明らかに柱穴、周溝と判断できるものは確認できなかった。出土遺物はカマド周辺を中心にロクロ使用の土師器坏や須恵器、ロクロ使用、不使用の土師器甕や須恵器壺、須恵器甕、刀子片などが出土している。

### 〈土 坑〉

土坑は長方形のもの2基、楕円形のもの5基、不整形のもの1基の計8基である。長方形の土坑1基からは、炭化材と共にロクロ不使用の須恵器甕の破片や完形の土師器坏、砥石、釘などが出土している。



#### 〈焼 土〉

焼土は2カ所が確認されている。これらの規模は径35～45cm、厚さ2～5cmほどで、石組や石囲、そして遺物をともなわない。

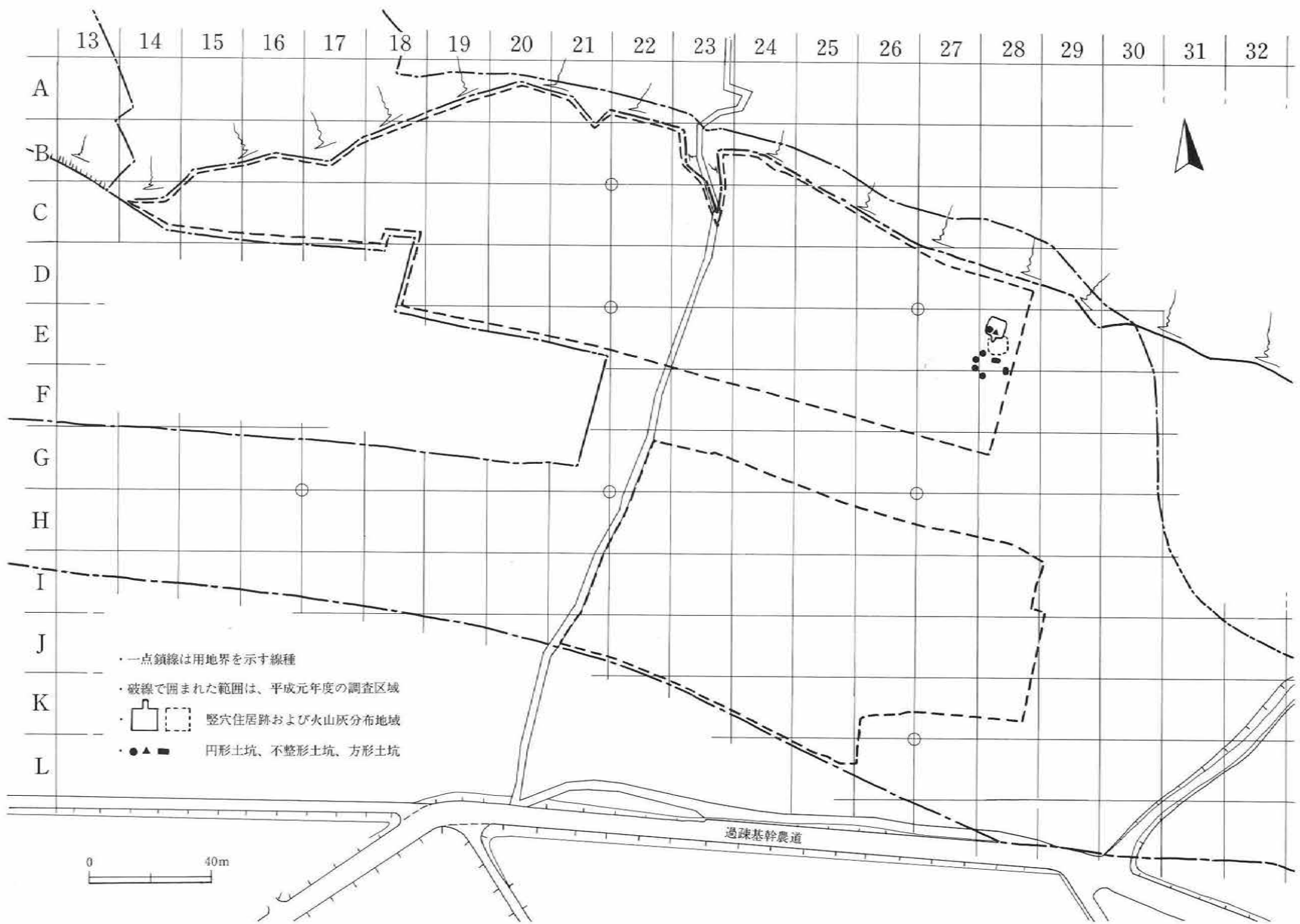
#### 〈出土遺物〉

遺構内、遺構外の遺物出土総量はコンテナ6箱である。所属する時代、時期は、縄文時代前期から晩期にかけての土器や石器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、砥石、刀子片、釘、そして中・近世の銭貨である。

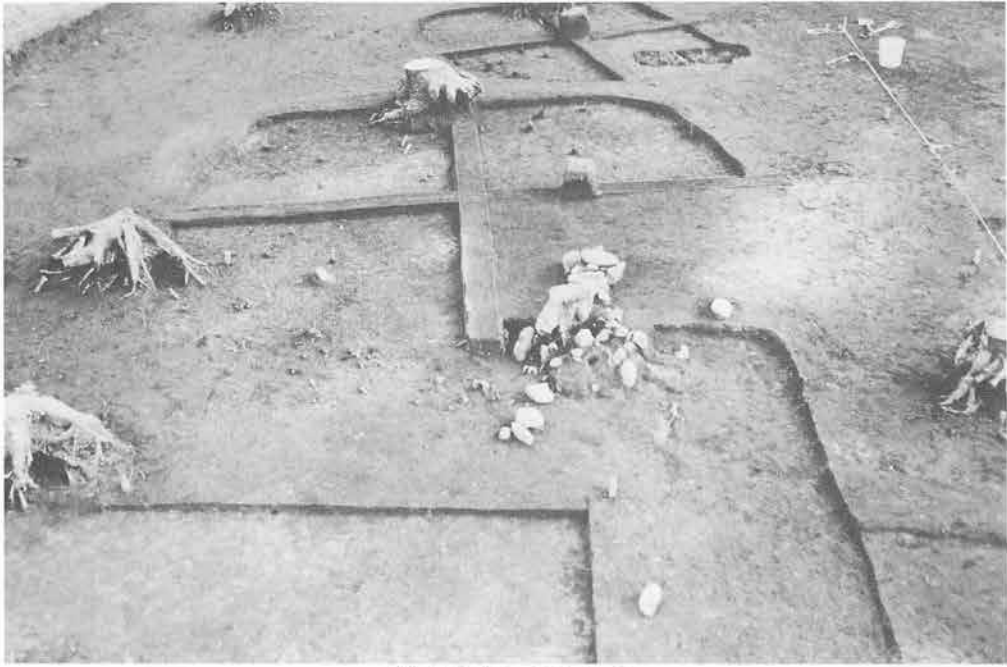
### 3. まとめ

今回の調査により、平安時代に小規模な集落が調査区域の東端に営まれていたことが判明した。また遺物の種類や出土状況から、調査区域全域が何らかの活動の場として利用されていたと考えられる。

八幡野II遺跡は、段丘縁に沿った東西580m、南北最大170mの範囲に広がる遺跡であり、調査対象となる総面積は56,440㎡である。しかし今回の調査はその45%ほどを調査したにすぎないことから、遺跡の全容を解明するには至っていない。



八幡野II遺跡遺構配置図



住居跡周辺の調査状況

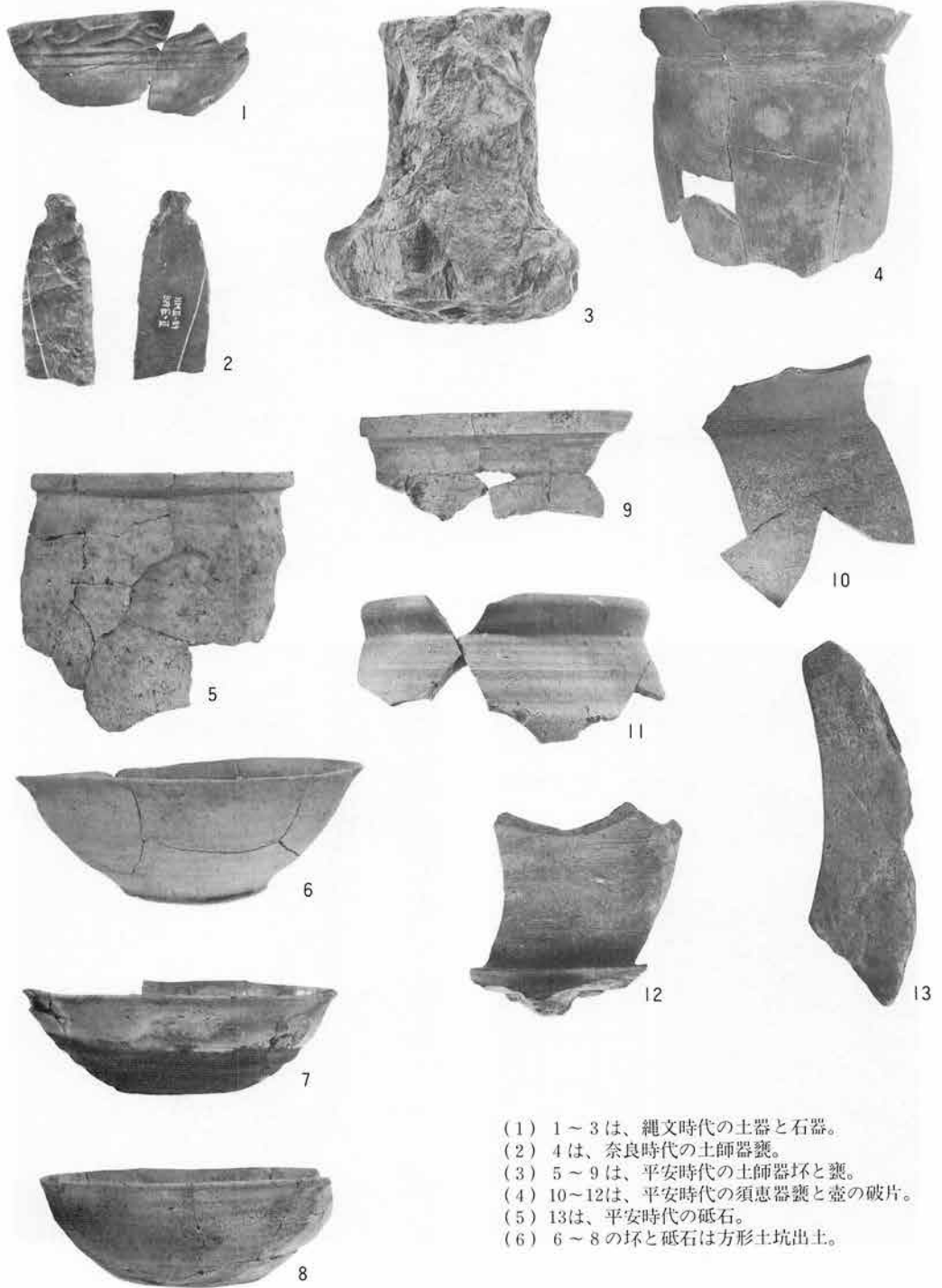


土坑(1)



土坑(2)

八幡野II遺跡 遺構

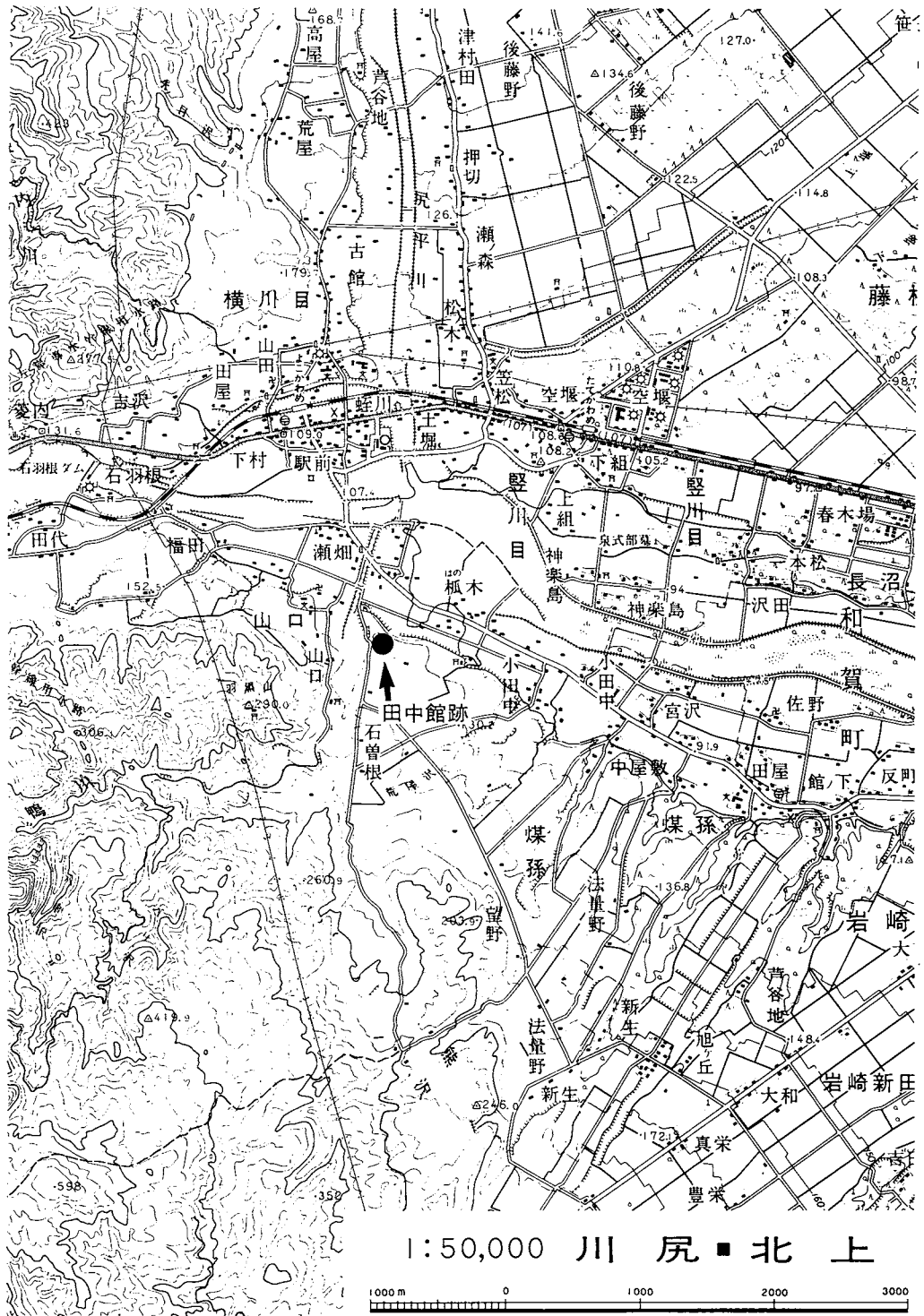


- (1) 1～3は、縄文時代の土器と石器。
- (2) 4は、奈良時代の土師器甕。
- (3) 5～9は、平安時代の土師器坏と甕。
- (4) 10～12は、平安時代の須恵器甕と壺の破片。
- (5) 13は、平安時代の砥石。
- (6) 6～8の坏と砥石は方形土坑出土。

八幡野II遺跡 遺物

(11) 田 中 館 跡

所 在 地 和賀郡和賀町山口40地割18ほか  
委 託 者 日本道路公団仙台建設局  
発掘調査期間 平成元年4月10日～5月15日  
調査対象面積 2,570m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 2,570m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME63—0068・TN—89  
調査担当者 工藤利幸・村上 修  
協力機関 和賀町教育委員会



田中館跡位置図

## 1. 遺跡の立地

田中館跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東約2km、和賀町役場の南約1.5km付近に位置し、和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地している。遺跡の標高は131～133mで、遺跡の西側を流れる和賀川支流の鈴鴨川との比高は約30mである。現状は山林である。

## 2. 調査の概要

調査は、東北横断自動車道秋田線の建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は、東西約50m、南北約50mの範囲である。

検出した遺構は、縄文時代晩期の土器埋設遺構1基、古代と考えられる土坑7基、近世以降の溝跡3条、柱穴状小穴53基である。

### 〈土器埋設遺構〉

調査区の北東部に位置し、口径19.1cm・器高24.8cmの深鉢形縄文土器を正立に埋設していたものである。掘り方は確認できなかった。

### 〈土 坑〉

調査区南側に分布し、平面の形状から方形の土坑5基、円形の土坑2基に分けられる。方形の土坑は1.2×1.3mから1.3×1.8m、深さ30～40cmである。円形の土坑のうち1基は直径50cm、深さ40cm、ほかは直径1m、深さ20cmである。方形の土坑3基には埋土の上半分に焼土や多量の炭化物が含まれ、うち2基からは土師器甕の破片が出土している。このなかには赤色顔料を塗布したものや、炭化物の付着したものが少量含まれている。

### 〈柱穴状小穴〉

直径15～25cmのものが大部分で規則的な配列は認められない。また、時期を特定できる遺物は出土していない。

### 〈溝 跡〉

南北方向に走る溝3条はいずれも幅20～40cm、深さ10～15cmで、断面形はU字状を呈し、底部には凹凸がみられる。遺物は出土していない。地境溝跡と推測される。

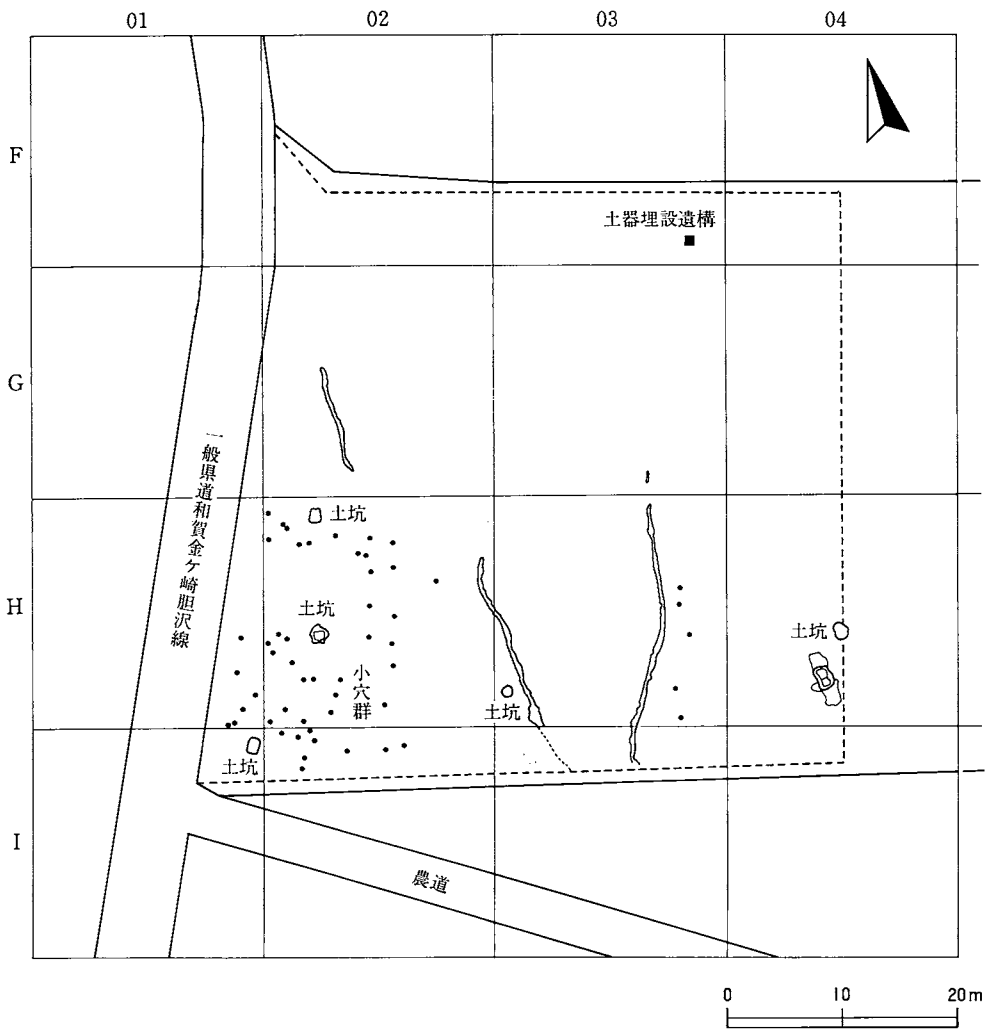
### 〈出土遺物〉

遺構に関連した遺物のほかに、縄文時代後期と晩期の深鉢形土器3個体分と若干の縄文土器、土師器の破片が出土している。石器は黒燧石などの剝片、磨石等11点が出土している。

## 3. まとめ

今回の調査では、中世の田中館に関連する遺構・遺物は確認されなかったが、縄文時代晩期

の埋設土器や若干の遺物が出土していることから、縄文時代後・晩期において何らかの生活の場として利用されていたことが明らかとなった。さらに、検出された土坑やその周辺からは、ロクロ不使用の土師器片が出土していることから、奈良時代においても生活の場として利用されていたものと考えられる。

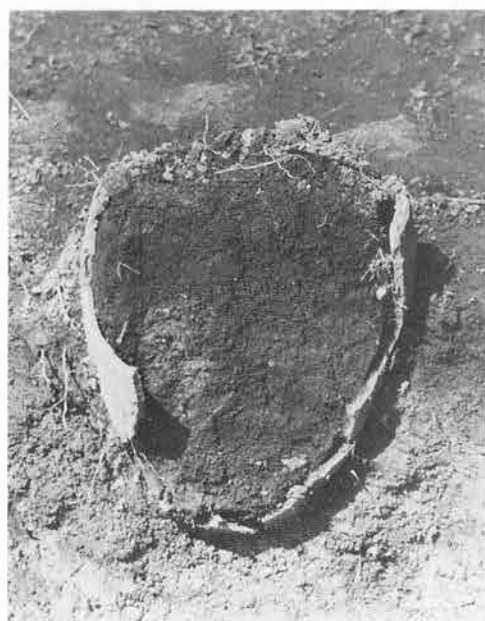


田中館跡遺構配置図

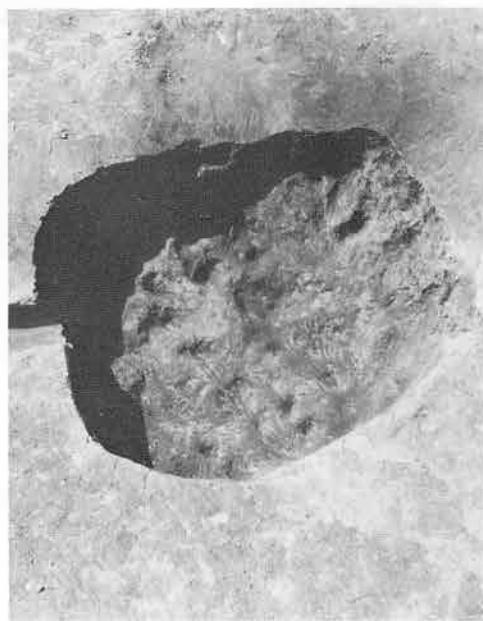




遺構分布状況と作業風景

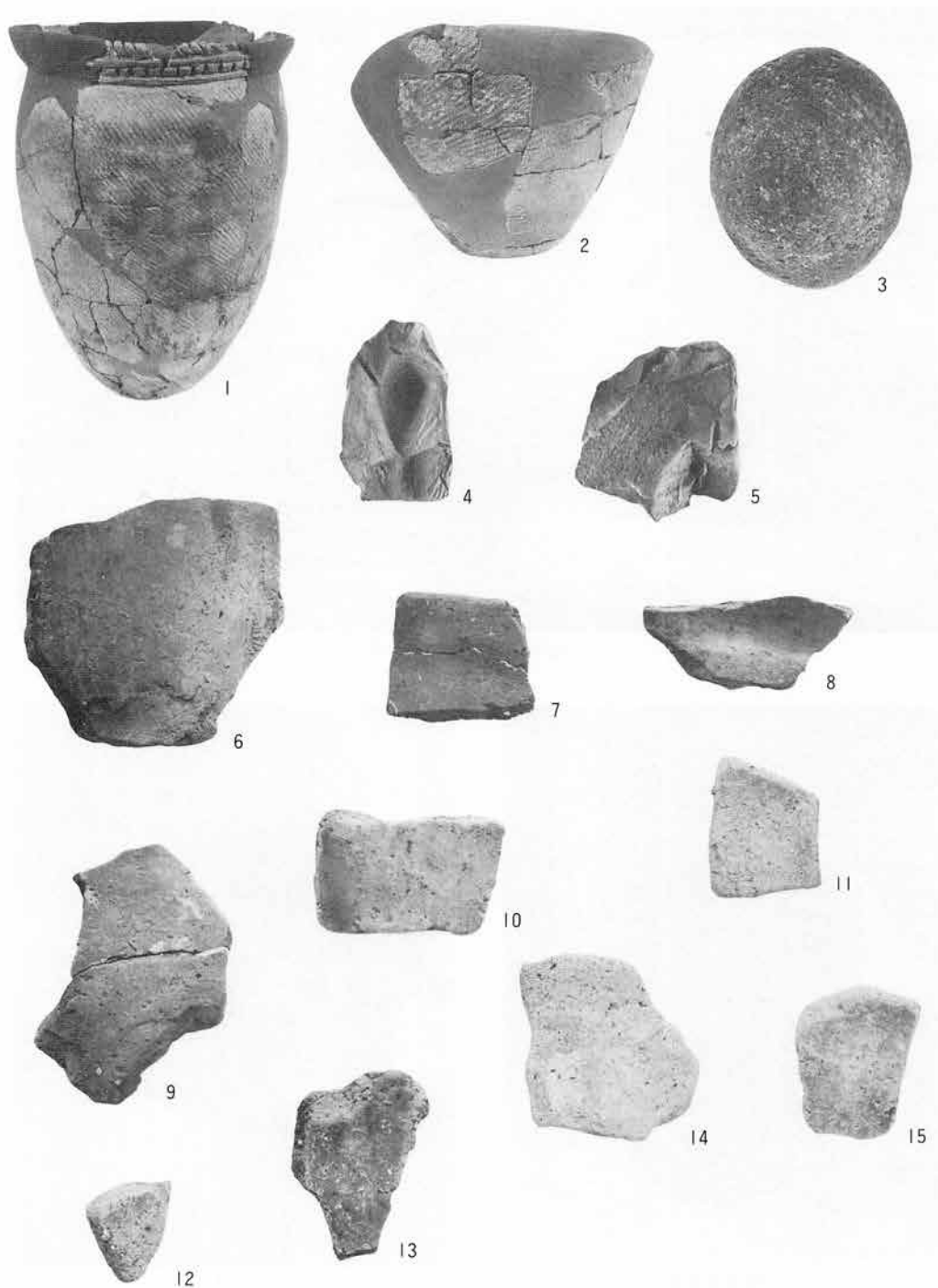


土器埋設遺構



土坑

田中館跡 遺構



1・2 縄文時代後・晩期の深鉢形土器  
 3 縄文時代の磨石  
 4・5 縄文時代の割片  
 6～15 古代の土師器 (11～15は、内外に赤色顔料を塗布したもの)

田中館跡 遺物

## II. 建設省關係

(1) 明<sup>みよう</sup>神<sup>じん</sup>遺跡

所在地 久慈市夏井町字大崎第3地割91-6ほか  
委託者 建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所  
発掘調査期間 平成元年6月1日～9月14日  
調査対象面積 8,300㎡  
発掘調査面積 8,300㎡  
遺跡番号・略号 JG20-0196・MG-89  
調査担当者 高橋義介・佐瀬 隆  
協力機関 久慈市教育委員会



## 1. 遺跡の立地

明神遺跡は、東日本旅客鉄道八戸線陸中夏井駅の南西約400m 付近に位置している。遺跡は、夏井川と久慈川の間形成された丘陵地の北側に張り出す標高15～35m の緩斜面に立地する。この緩斜面は、斜面崩壊により形成されたものである。斜面崩壊の時期は、砂礫堆積面上に累積するテフラ層より、約1万年前の完新世初頭と推定される。現況は山林と畑地である。

## 2. 調査の概要

今回の発掘調査は、国道45号久慈バイパス建設に伴う緊急発掘調査であり、東西約200m、南北約45m の範囲である。

検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡10棟、竪穴状遺構3棟、土坑6基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構2基、溝跡1条である。

### 〈竪穴住居跡〉

平面形は正方形を基調とするものの、長方形や台形状もあり多様である。規模は長辺が3.2～6.0m で、5 m 前後が主体を占めている。最大規模は6×5.5m である。

埋土中に白頭山一苦小牧火山灰や十和田a 降下火山灰を含むものは9棟あり、2棟の住居跡からは両方の火山灰が検出されている。

カマドの位置は北西壁側4棟、西壁側3棟、北東壁側2棟、南東壁側1棟で、半数は中央部に設置されている。カマドの本体部は凝灰岩等を芯材に逆U字状に組み、その上を粘土でおおっている。煙道は掘り込んで壁に石を据えたものは1棟で、他はくりぬき式である。

柱穴は4本柱を基本とするものの、比較的小規模な遺構には検出されていない。周溝はカマド部分を除いて巡るものが数棟にみられる。また、大部分は焼失家屋である。

### 〈竪穴状遺構〉

調査区域外に続く1棟を除き、平面形は2.8m の正方形と4.6×2.9m の長方形である。埋土中には火山灰の混入は認められない。遺物は出土していない。

### 〈土 坑〉

平面形は、円形3基、楕円形1基、不整形2基である。径は1.5～1.8m 前後のものが多い。時期決定資料となる遺物は出土していない。

### 〈陥し穴状遺構〉

1基だけ検出されている。平面形は細長い溝状で、開口部の規模は長さ3.8×幅0.55m である。横断面形は開口部が開いたU字形である。長軸の方向は東南東—西北西を示している。

### 〈焼土遺構〉

比較的良く焼けている。いずれも現地性のものである。

#### 〈溝 跡〉

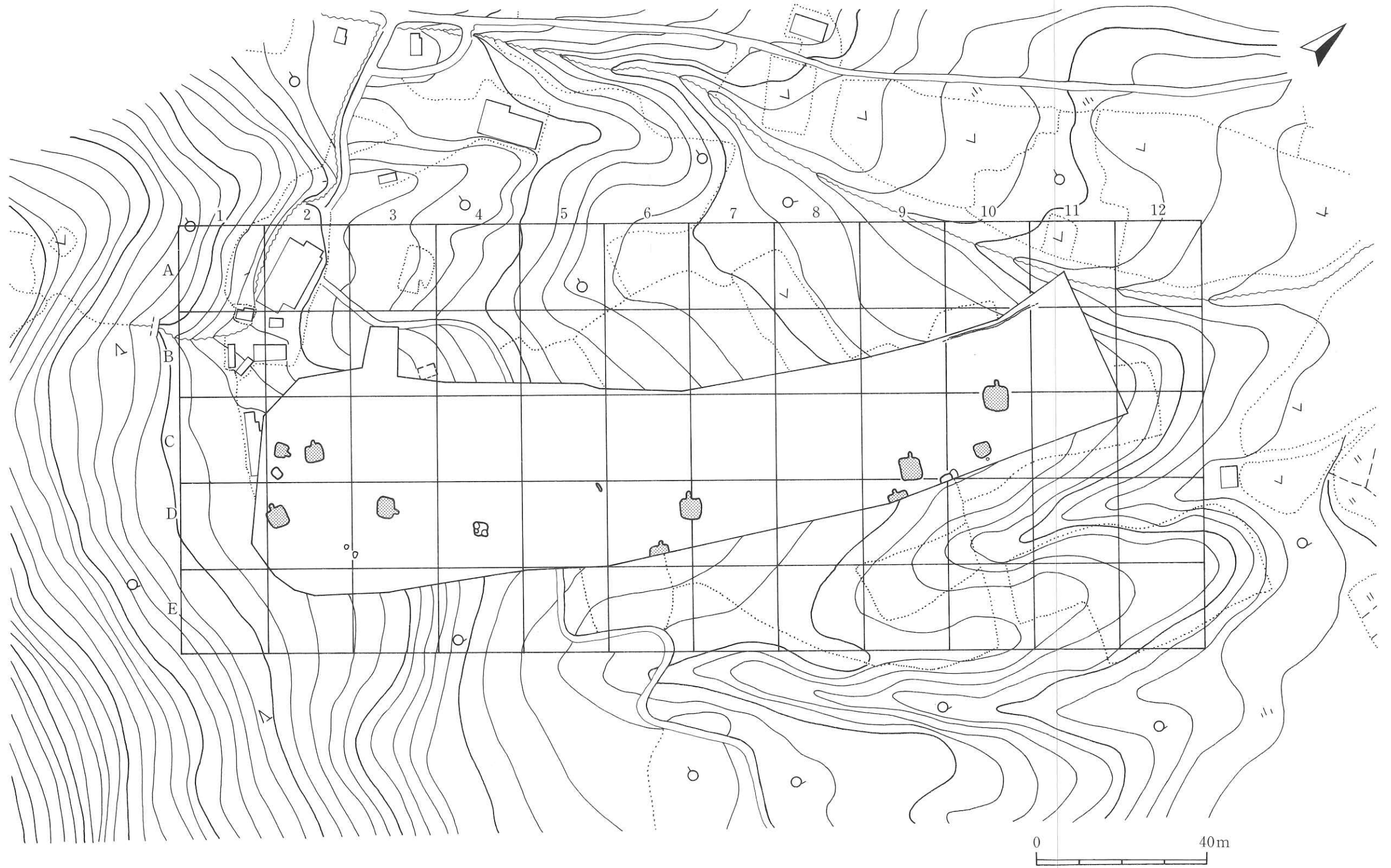
西側の半分が調査区域外に続くため、規模の詳細は不明である。長さは22mほどで、深さは6cmと比較的浅い。

#### 〈出土遺物〉

遺物の大部分は竪穴住居跡から出土している。平安時代の土師器の坏と甕、須恵器の長頸壺と甕の破片が主体を占めている。焼失した住居跡からは、炭化した木器類と櫛、鉄釘、刀子、鉄滓、琥珀、砥石、遺構外からは縄文土器片と石器が少量出土している。

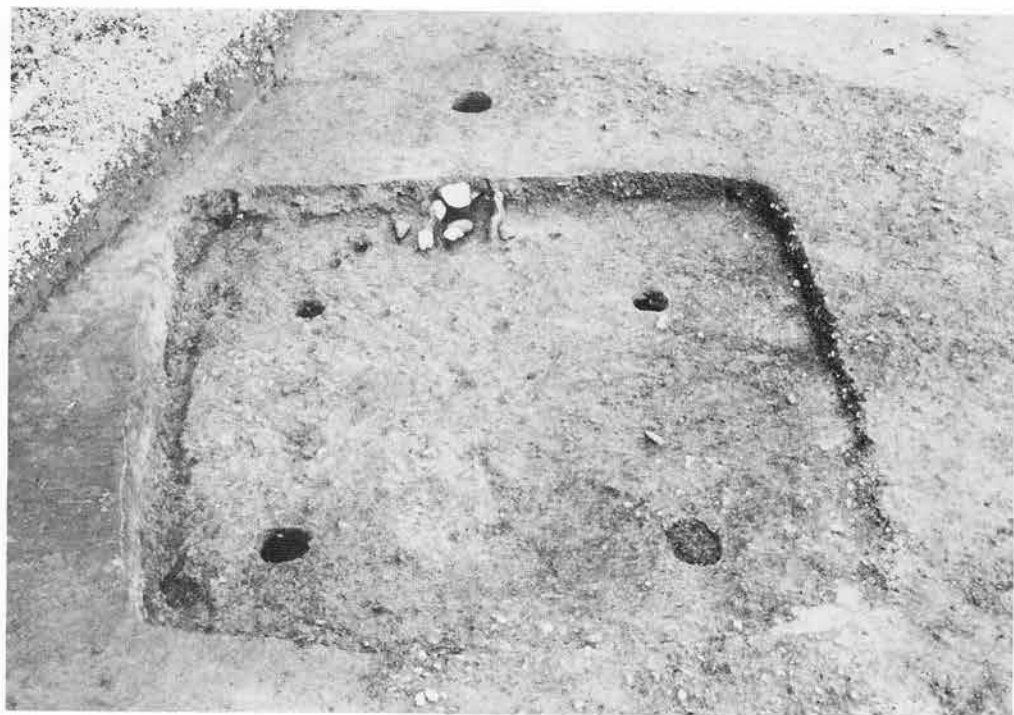
### 3. まとめ

今回の調査で、平安時代の集落跡が確認された。住居跡は占地、カマドの設置位置、火山灰混入の有無等から数時期の変遷があったと考えられる。隣接する源道遺跡からも同時期の遺構が発見されており、久慈地方における古代集落形成を知る上での貴重な資料が得られた。

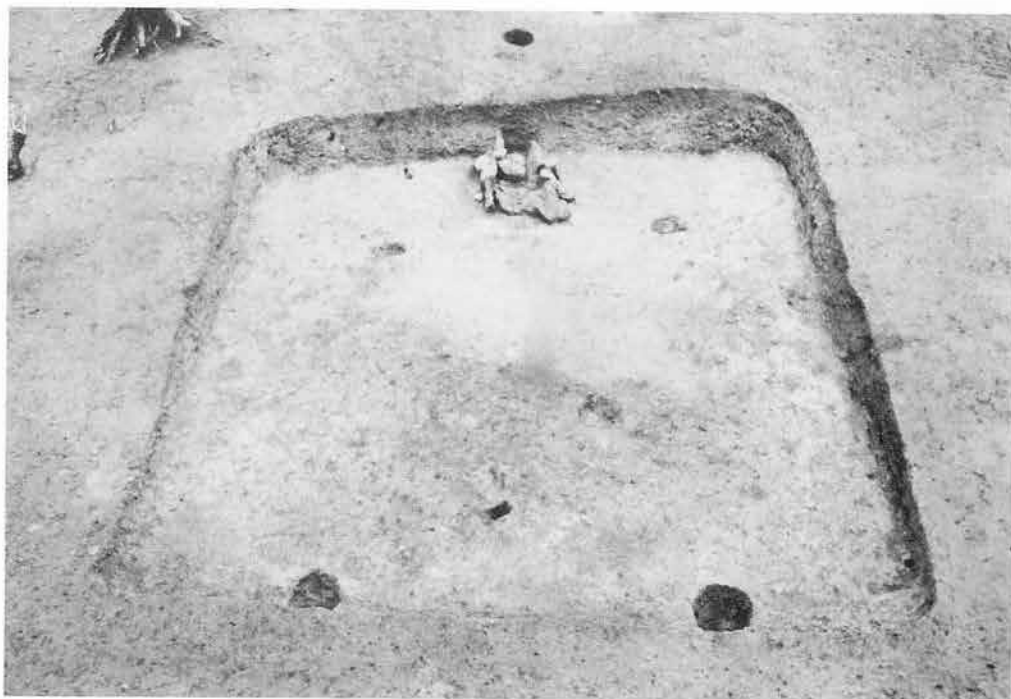


明神遺跡遺構配置図





3号住完掘



11号住完掘

明神遺跡 遺構



長頸壺 (須恵器)



坏 (土師器)



甕 (土師器)



砥石



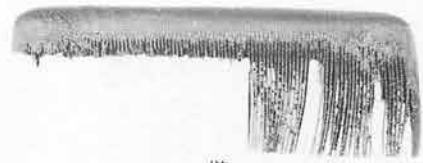
砥石



鉄滓



琥珀

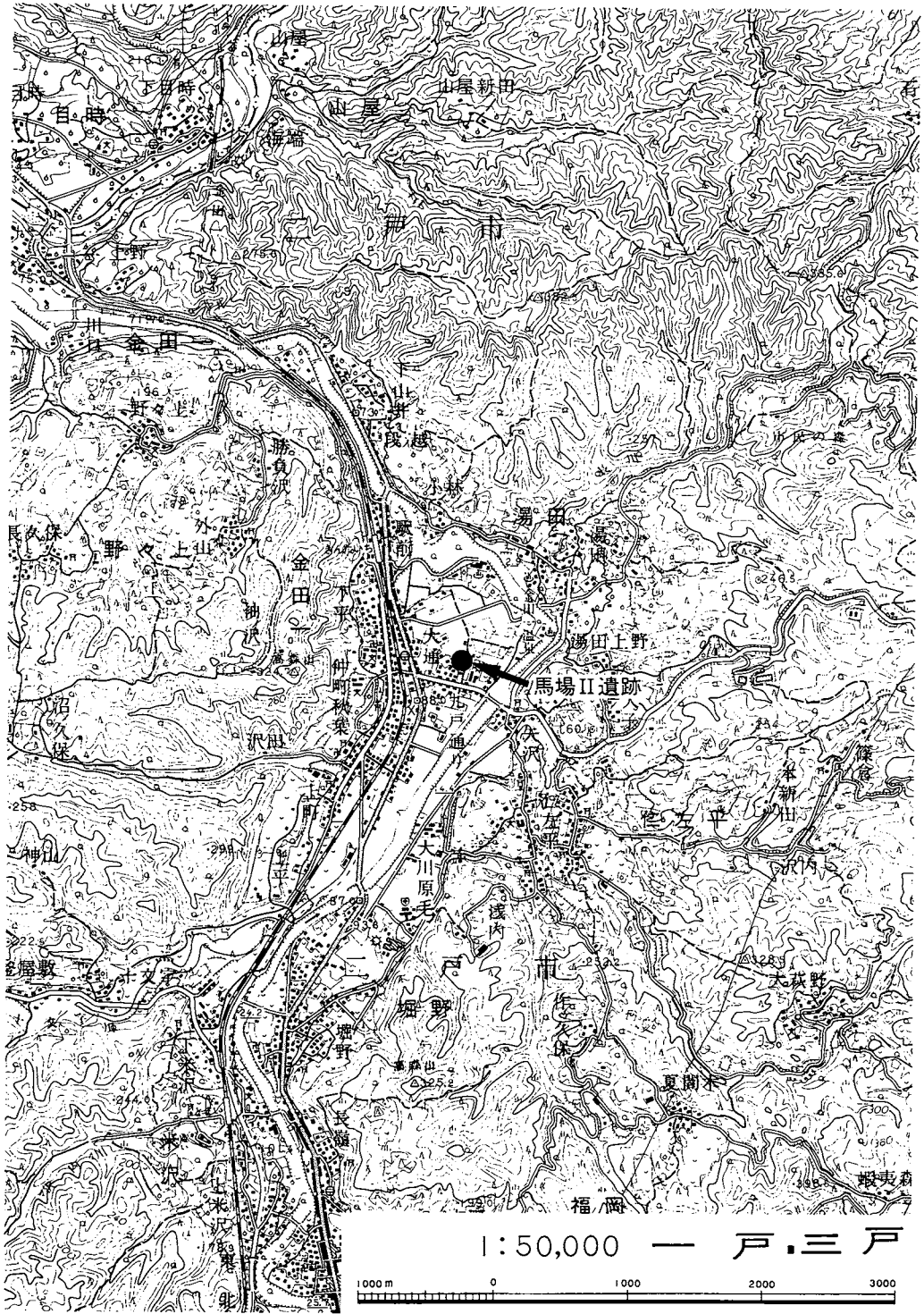


櫛

明神遺跡 遺物

## (2) 馬場 II 遺跡

所在地 二戸市金田一字沖 6-3 ほか  
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所  
発掘調査期間 平成元年 8 月 25 日～9 月 9 日  
調査対象面積 870m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 870m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 I F80-1007・B B II-89  
調査担当者 佐瀬 隆・高橋義介・平井 進・佐々木信一  
協力機関 二戸市教育委員会



馬場II遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

馬場II遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南東約1kmの河岸段丘上に位置している。調査区域は、段丘の北縁から300m、東縁から700mほど内部にあり、その標高は85～86m、河床面との比高は14～15mほどである。現況は宅地、畑地である。

## 2. 調査の概要

本調査は、国道4号金田一バイパスの建設に伴う、昨年からの継続の緊急発掘調査である。

調査区域の堆積物は、段丘構成層の砂礫層とその上に累積する十和田火山起源の完新世テフラ(下位より南部浮石層、中掬浮石層、十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層)、そして、それらに介在する黒色腐植層からなる。

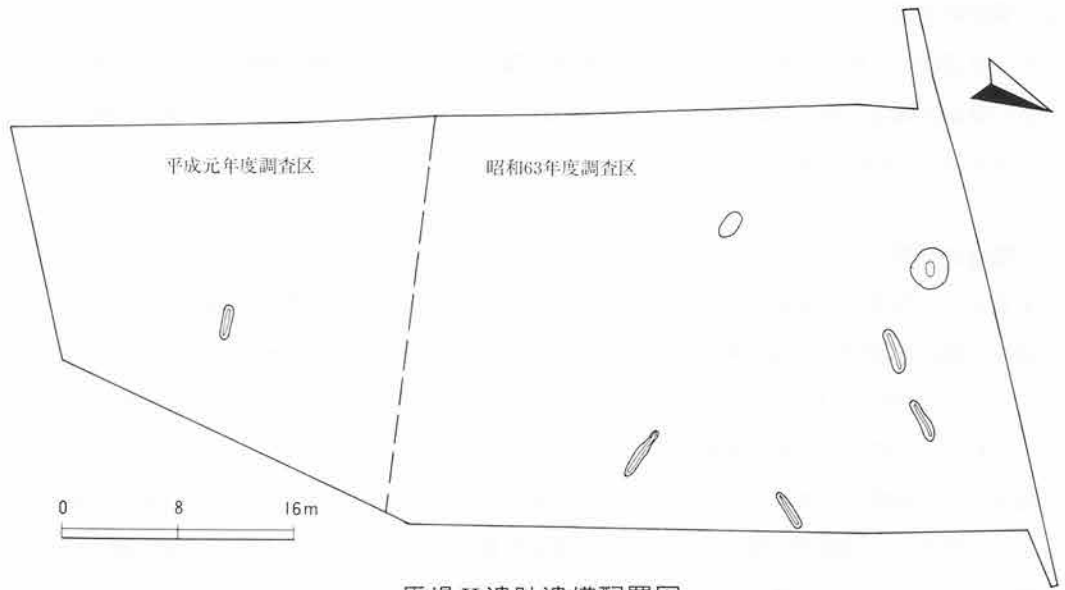
検出された遺構は、溝状の陥し穴状遺構が1基である。長さ3m、幅1m、深さ90cmの規模をもつ。埋土が、南部浮石層、中掬浮石層の崩落堆積物を主体とすることから、縄文時代中～後期につくられたものと推定される。

遺物は、発見されなかった。

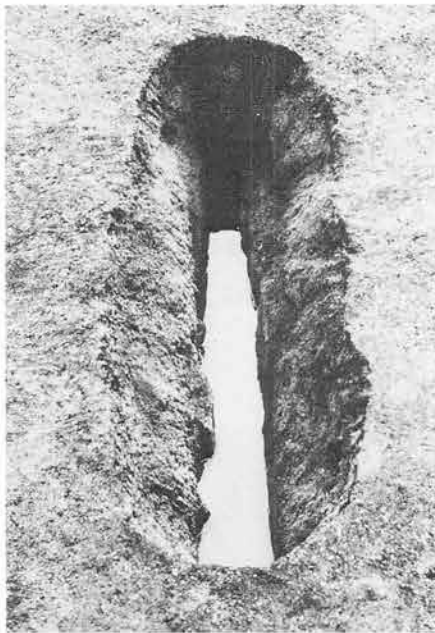
## 3. まとめ

昨年度の調査で発見されたものと合わせて、6基の陥し穴状遺構が検出された。このうち1基は、平面形が楕円状を呈し、中掬浮石層の1次堆積物を埋土の構成層の一つとするもので、他のものよりその構築時期は明らかに古い。約5000年前とされる中掬浮石層の堆積年代から縄文前期の遺構と推定される。残りの5基は溝状を呈するもので、いずれも南部浮石層、中掬浮石層の崩落堆積物を埋土の主体とし、約2000年前に降下堆積した十和田b降下火山灰層が埋土にかかわっていない。したがって、その構築時期は、縄文中～後期とするのが妥当であろう。

構築時期の異なる陥し穴状遺構が発見されたことにより、馬場II遺跡は、縄文時代の狩り場として少なくとも二時期に利用されたことが明らかとなった。



馬場II遺跡遺構配置図



陥り穴状遺構



埋土断面



検出状況

馬場II遺跡 遺構

(3) <sup>おき</sup>沖 I 遺 跡

所 在 地 二戸市金田一字沖42-31ほか  
委 託 者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所  
発掘調査期間 平成元年8月25日～10月27日  
調査対象面積 1,300㎡  
発掘調査面積 1,300㎡  
遺跡番号・略号 I F80-1018・O I-89  
調査担当者 佐瀬 隆・高橋義介・平井 進・佐々木信一  
協力機関 二戸市教育委員会





## 1. 遺跡の立地

沖 I 遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南東約1.2kmの河岸段丘上に位置している。段丘面は、東側を北流する馬淵川へ向かって緩かに傾斜している。調査区域の標高は85～86m、河床面との比高は約10mである。遺跡の現況は畑地と宅地である。

## 2. 調査の概要

本調査は、国道4号金田一バイパスの建設に伴う、昨年からの継続の緊急発掘調査である。

発見された遺構は、竪穴住居跡2棟、住居跡状遺構2棟、井戸跡1基、溝2条、土坑7基、出土遺物は、縄文土器片、弥生土器片、土師器片、鉄釘、鉄滓、貨幣である。

### 〈竪穴住居跡・竪穴住居跡状遺構〉

竪穴住居跡は一辺約4mの方形のもの2棟である。両者とも9個の柱穴をもち、南側に張出部を伴う。一棟には、炉跡と推定される炭と灰の集積部がある。いずれの住居跡も時代を決定できる遺物は出土していないが、その形態から中世の住居跡と推定される。

竪穴住居跡状遺構は直径約8mのほぼ円形のもの、長径約4m、短径約2mの不整楕円形のものである。前者の床面からは、鉄釘、炭化豆が検出された。

### 〈井戸跡〉

平面形が円形で直径約2.5m、深さ3m以上である。段丘礫層まで掘り下げられた素掘井戸と考えられる。

### 〈土坑〉

平面形が楕円状で深さ約60cmのもの1基、平面形がほぼ円形で浅いもの5基、調査区域外へ広がる竪穴住居跡の可能性も考えられるもの1基である。

### 〈溝跡〉

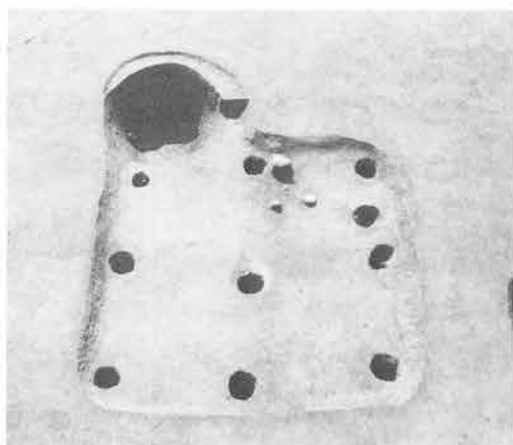
長さが約16mと約22mの互いに直交する2条である。いずれも、幅が約1m、深さが70cm程のものである。

### 〈遺物〉

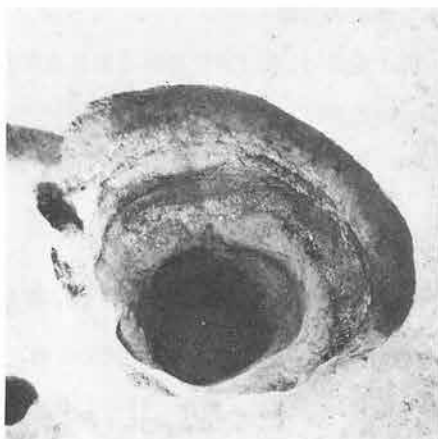
縄文土器片21点、弥生土器片2点、土師器片4点、鉄釘2本、鉄滓2個、永楽通宝1枚が出土した。

## 3. まとめ

昨年調査分を合わせて、4棟の中世の竪穴住居跡が発見されたことから、当遺跡は中世の集落跡であることが明らかとなった。また、昨年度の調査で縄文時代の陥し穴状遺構が2基発見されており、縄文時代の狩り場として利用されたことが明らかにされている。



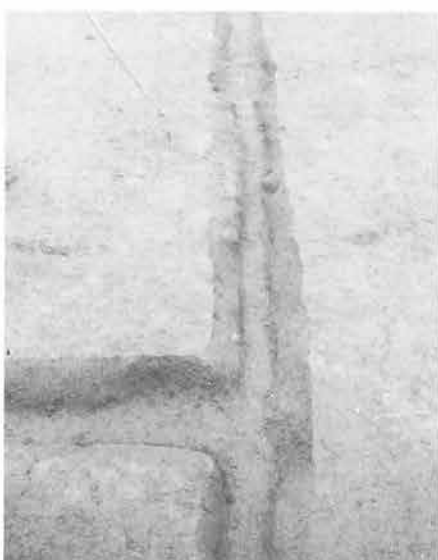
住居跡



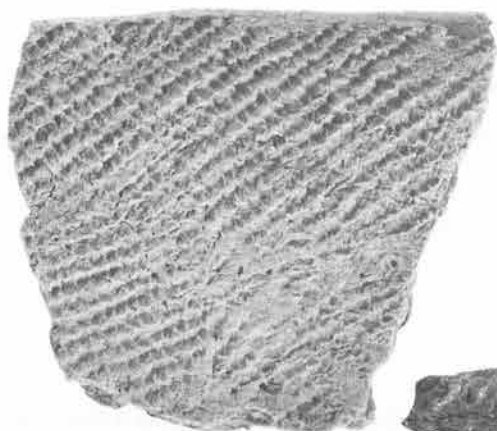
井戸跡



住居跡



溝跡



縄文時代



弥生土器

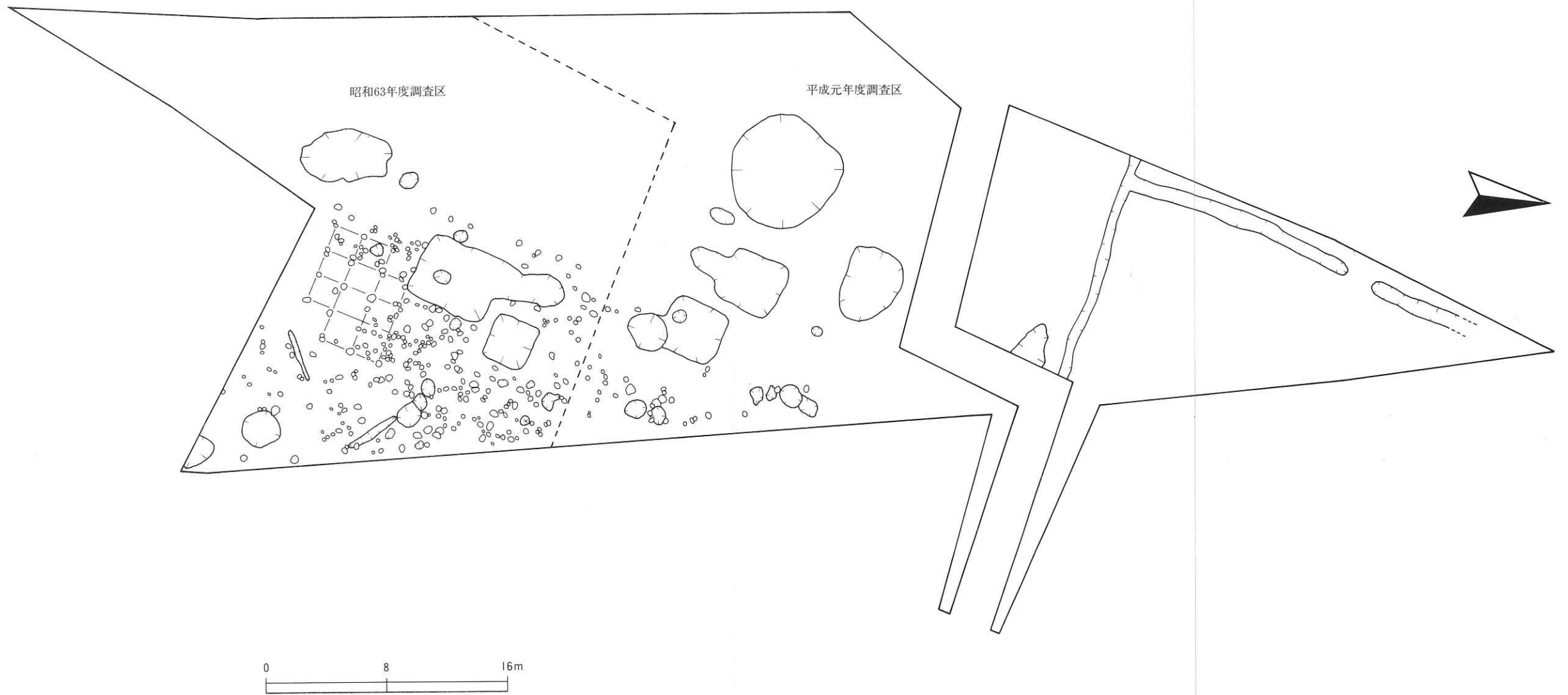


永樂通寶



鉄釘

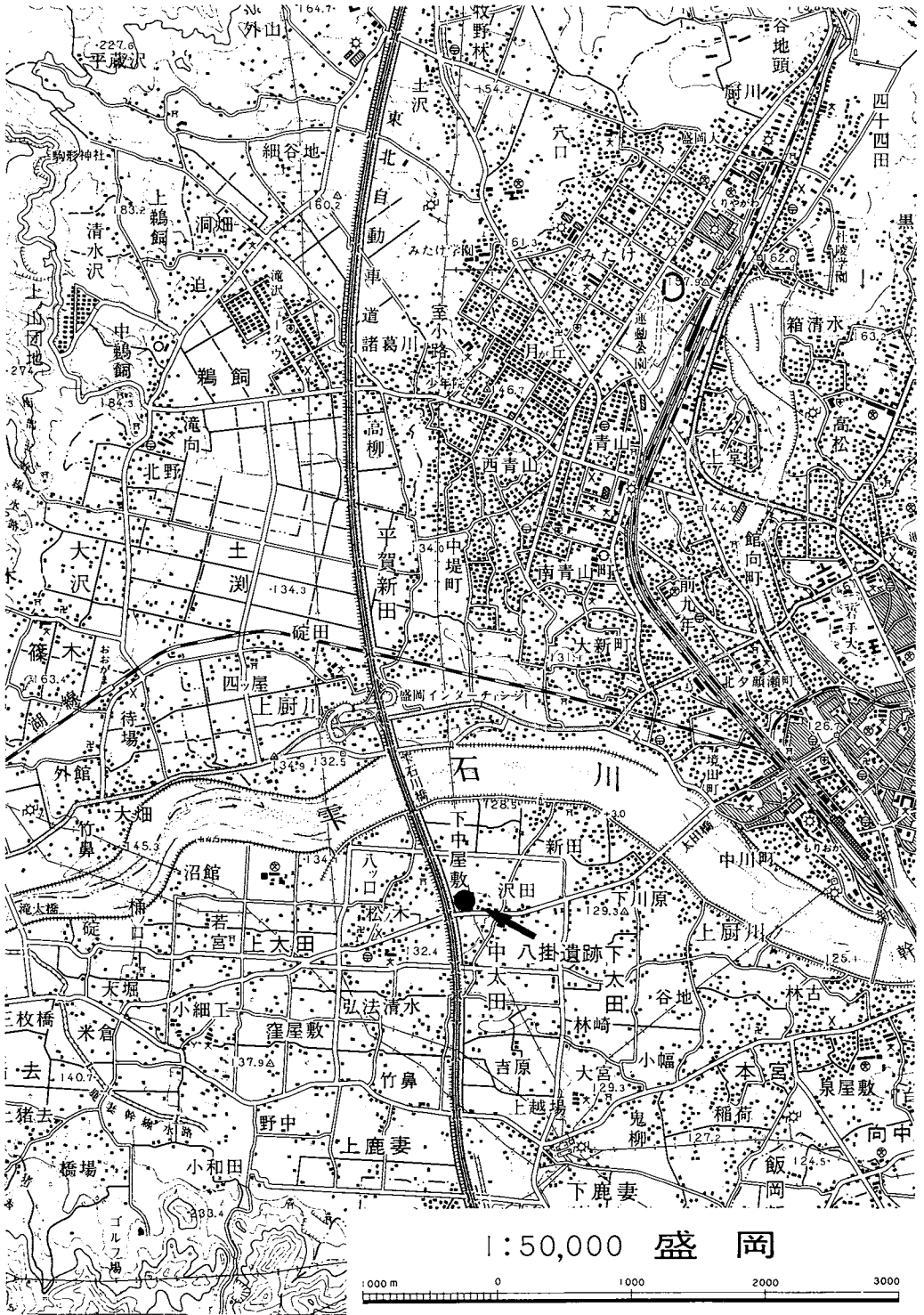
沖 I 遺跡 遺構・出土遺物



沖 I 遺跡遺構配置図

#### (4) 八 卦 遺 跡

所 在 地 盛岡市中太田八卦77ほか  
委 託 者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所  
発掘調査期間 平成元年4月8日～5月8日  
調査対象面積 3,800m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 3,800m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 LE15-0393・HK-89  
調査担当者 平井 進・佐々木信一  
協 力 機 関 盛岡市教育委員会



八掛遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

八卦遺跡は、盛岡市西方の市立太田東小学校の東約0.6km付近に位置し、遺跡の南約1kmには志波城跡が隣接する。

遺跡の北約0.9kmを雫石川が東流しており、遺跡はその下流域の東西に広がる砂礫段丘の自然堤防上に立地している。標高は130～131mであり、雫石川との比高差は5～6mである。

遺跡の現況は、田・畑地である。

## 2. 調査の概要

本調査は国道46号盛岡西バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は南北約110m、東西約40mの範囲である。調査は3×3mのグリッドを設定し、市松模様に掘り進めた。

基本層序は一部流失によって一定していないが、概ね次の4層に大別できる。I層の表土は暗褐色土で層厚は20～30cm、II層は褐色土で層厚30cm、III層は褐色の砂で層厚20cm、IV層は礫層である。

調査の結果、遺構は検出されず、I層とII層上面から縄文土器・石器・土師器・須恵器・あかやき土器が出土したのみである。

### 〈出土遺物〉

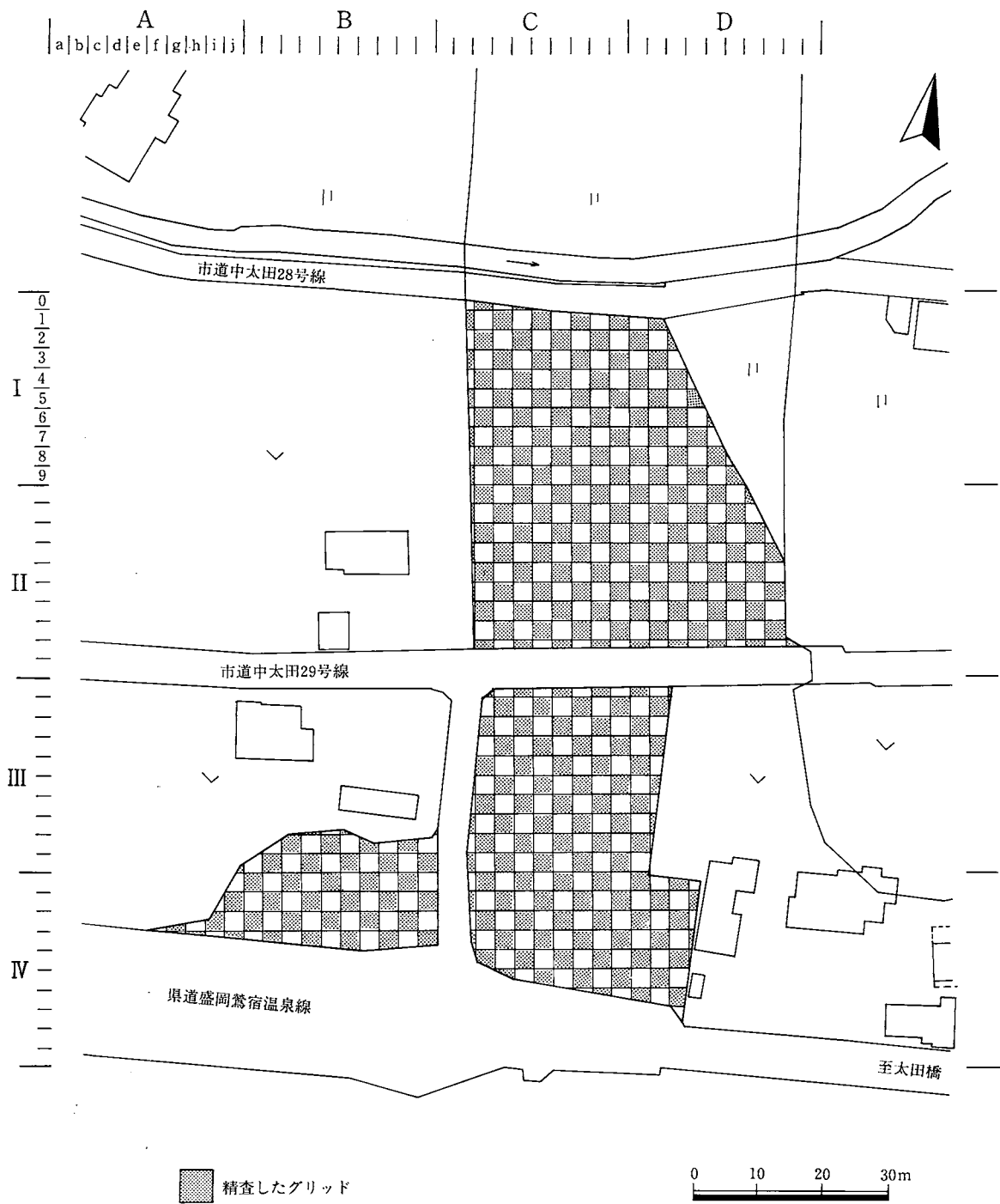
縄文土器1点、石器3点、土師器6点、須恵器1点、あかやき土器8点が出土した。土器はいずれも小片である。縄文土器は深鉢形の体部片で単節斜縄文が施文されている。石器は3点とも不定形石器で、石材は粘板岩である。土師器はロクロ未使用で内面黒色処理した坏の底部片と赤彩した甕の体部片各1点と、小片4点が出土している。須恵器は甕の体部片1点である。また、あかやき土器は坏の小片7点と甕の体部片と思われるもの1点である。

## 3. まとめ

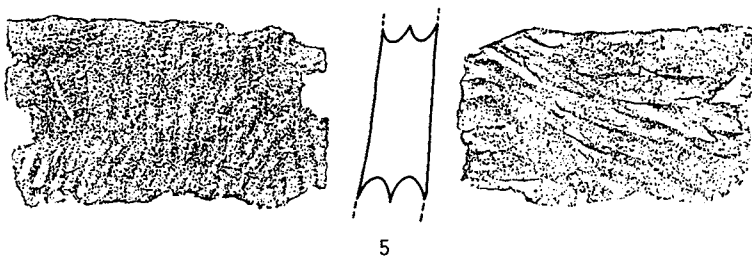
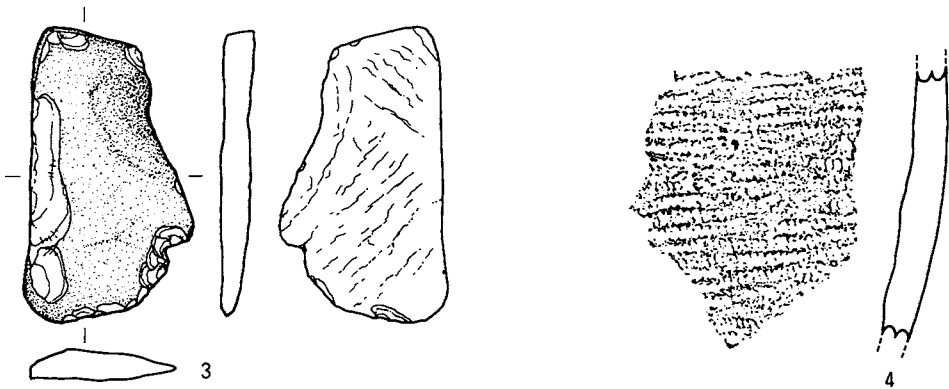
八卦遺跡に関する調査は、盛岡市教育委員会によってこれまで4回実施されており、昭和62年度の調査では竪穴住居跡等の遺構が検出され、土師器等の遺物が出土している。

今回の発掘調査では遺構は検出されず、縄文時代晩期の土器と石器、奈良時代の土師器、平安時代の須恵器、あかやき土器など若干の遺物が出土した。しかし、土器は小片であり、詳細は不明である。また、少量かつ摩耗した小片であること、旧氾濫原であること等から、上流から流入した遺物である可能性がある。

なお、八卦遺跡に関わる報告はこれをもって全ての報告とする。



八掛遺跡調査区域図



1~3. 不定形石器  
 4. 縄文土器  
 5. 須恵器  
 (1~5. S=2/3)

遺物実測図と拓影図

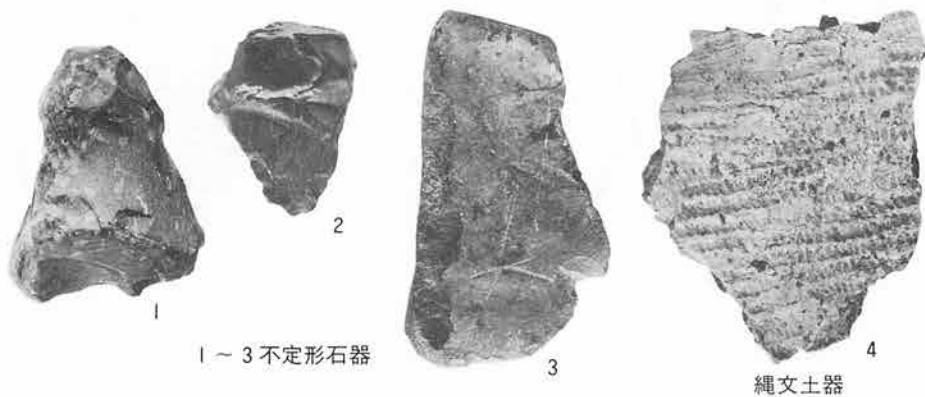




調査風景

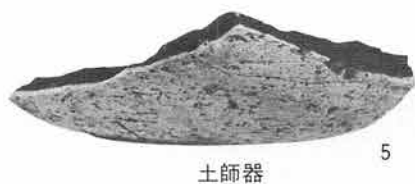


土層断面



1 ~ 3 不定形石器

繩文土器



土師器

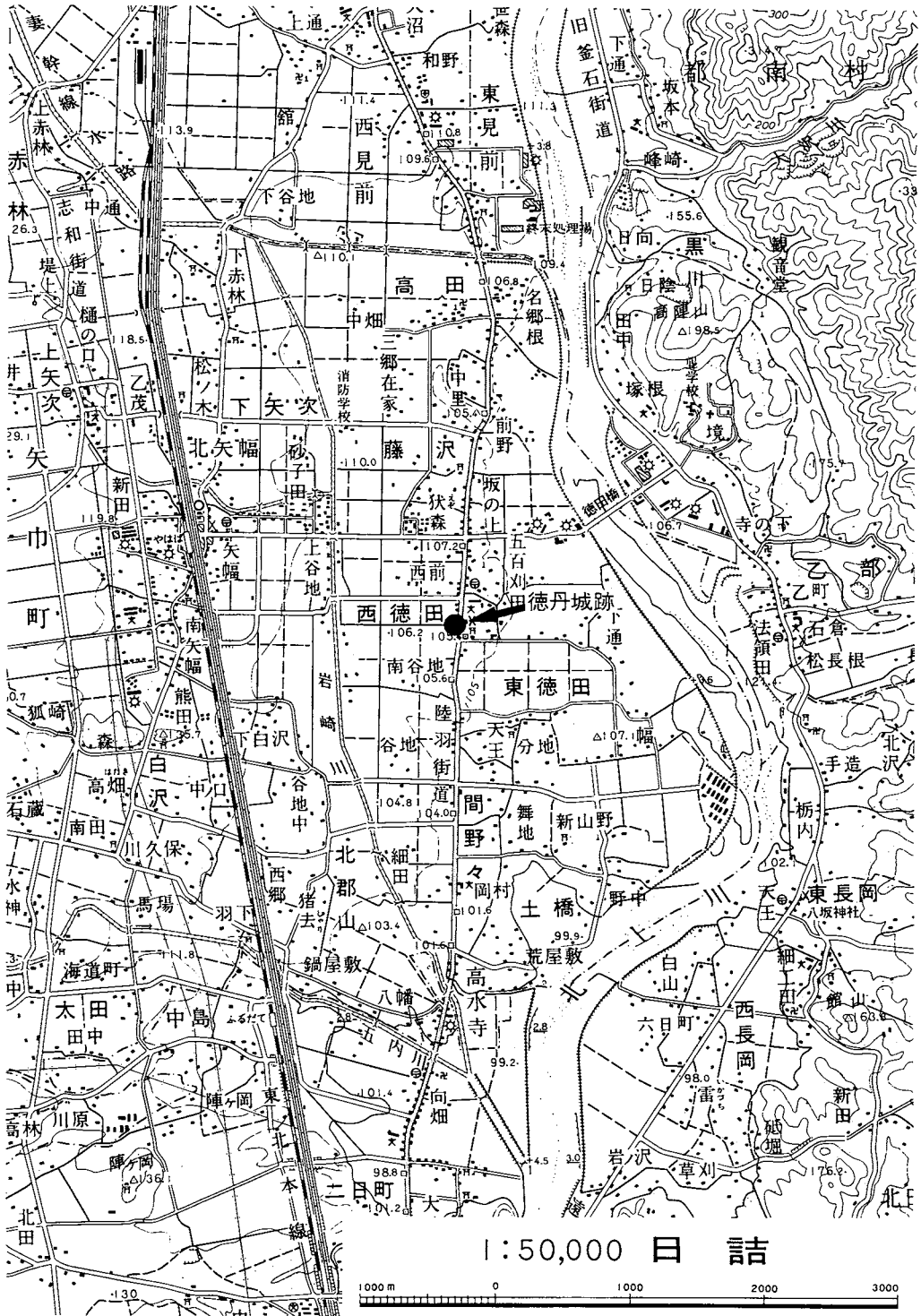


須恵器

出土遺物  
(縮尺不定)

(5) 徳<sup>とく</sup>丹<sup>たん</sup>城<sup>じょう</sup>跡

所在地 紫波郡矢巾町大字西徳田第3地割字西前60-1ほか  
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所  
発掘調査期間 平成元年4月8日～5月31日  
調査対象面積 1,300㎡  
発掘調査面積 1,300㎡  
遺跡番号・略号 LE47-1174・TT-89  
調査担当者 高橋義介・佐瀬 隆  
協力機関 矢巾町教育委員会



徳田城跡位置図

## 1. 遺跡の立地

徳丹城跡は、東日本旅客鉄道矢巾駅の南東2.1kmに位置している。遺跡は北上川が東側に大きく蛇行する砂礫段丘の張り出す基部に立地し、標高は106mほどである。現状は宅地の一部で、以前は水田であった。また、徳丹城の前身である志波城は北西約10kmの地点にある。

## 2. 調査の概要

今回の発掘調査は、国道4号の拡幅事業に伴う緊急発掘調査である。調査区域は政庁正殿跡の西側にあたり、国道4号に沿った西側部分である。

検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、柱穴列2条、溝跡4条、井戸跡1基、柱穴状土坑多数である。

### 〈掘立柱建物跡〉

4棟の建物跡のうち規模がわかるのはS B515建物跡で、桁行2間(2.5m)、梁行2間(2.3m)である。他の3棟は、一部が東側の国道下位に続くことから規模の詳細は不明である。

S B516建物跡は桁行5間(10.7m)、S B518建物跡は桁行6間(10.8m)で西側に廂をもっている。柱穴の掘り方は方形状のものが半数以上を占め、径0.8～1.0m、深さ70cm前後である。

S B513・516建物跡の柱痕は径15～30cmであり、径5～10cmの亜円礫が多く埋め込まれている。また、S B513・518建物跡には柱根のほか板状の廃材が残存するものがある。

### 〈柱穴列〉

柱穴列は、3棟の建物跡を囲むように北側と南側から検出されている。柱穴の掘り方は径0.8～1.0mの方形で、深さ50～80cmである。東側の国道下位と西側調査区域外に続いている。

### 〈溝跡〉

調査区を東西方向に横切るものが2条、南北方向が1条、北西～南東方向が1条検出されている。幅は0.4～1.2m、深さ10～30cmである。

### 〈井戸跡〉

北側の調査区で検出されたものの、西側半分が調査区域外にあるために詳細は不明である。埋土中位から動物の骨と歯が出土している。

### 〈出土遺物〉

平安時代の土師器と須恵器の破片が少量と、近代以降の鉄製品が数点出土したのみである。

## 3. まとめ

今回の調査で、正殿跡北西寄りから柱穴列に囲まれた官衙ブロックの存在が明らかになった。また、検出された掘立柱建物跡はいずれも南北棟と推測される。



南側調査区空中写真



SB515(建物跡)



SB516(建物跡)



柱根埋土断面



柱穴出土板材

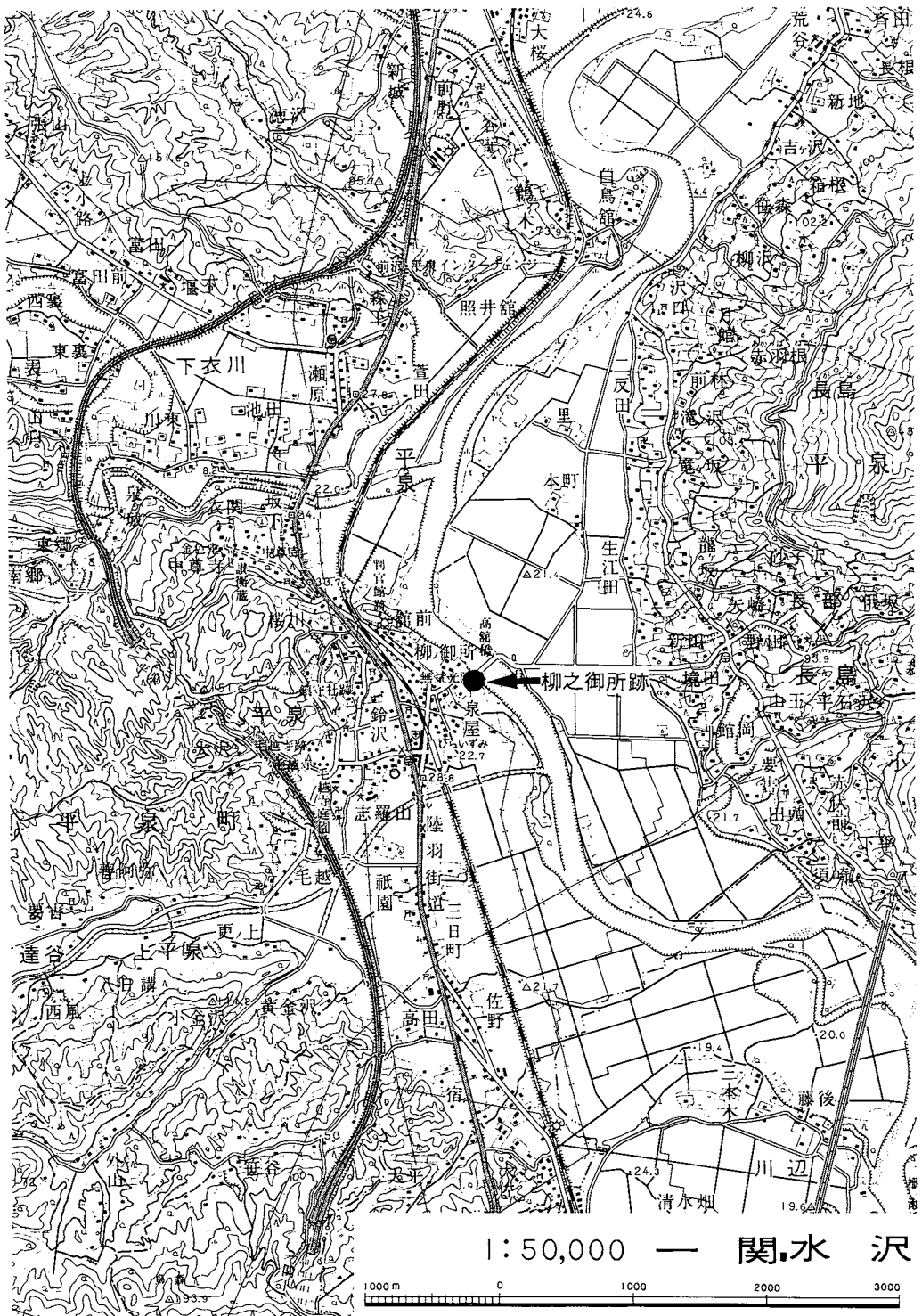
徳丹城跡 遺構・遺物



徳丹城跡遺構配置図

(6) 柳<sup>やなぎ</sup>之<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>所<sup>しよ</sup>跡

所在地 西磐井郡平泉町平泉字柳之御所130-2 ほか  
委託者 建設省東北地方建設局岩手工事事務所  
発掘調査期間 平成元年4月7日～11月17日  
調査対象面積 7,000m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 7,000m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 NE76-0088・YG89-23  
調査担当者 三浦謙一・田鎖寿夫・東海林隆幹・斎藤邦雄・星 雅之  
協力機関 平泉町教育委員会



柳之御所跡位置図



## 1. 遺跡の立地

遺跡は平泉町の市街地に近く、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の北約600mにその南端がある。北上川の西岸に接した低位河岸段丘に立地し、北は高館と呼ばれる丘陵、西は伽羅之御所跡や無量光院跡との境になる低地である猫間ガ淵、南と東は北上川とその沖積地に囲まれている。北西から南東に細長く、最大長・最大幅はそれぞれ725m・212mで、残存する面積は約10万㎡である。調査区の標高は22～27m、北上川の現河床との比高差は10～15m、沖積地との比高差は2～7mである。現状の土地利用は宅地と水田・畑地で、今回の調査区は大部分が宅地であったところである。

## 2. 調査の概要

調査は一関遊水地・一般国道4号平泉バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。全体の調査対象面積は4万㎡で、昭和63年度から調査を開始し、平成5年度までを予定している。昨年度の第21次調査は6,000㎡、今年度の第23次調査は約7,000㎡を調査している。

調査区は標高25～27mを中心にした高い面（H面）とその南や東に付着する幅の狭い標高22mの低い面（L面）とに分かれ、検出される遺構に違いがみられる。

遺構は、12世紀に属する掘立柱建物跡柱穴約800個・竪穴住居状遺構1棟・土坑105基・溝跡（溝状遺構）40条・焼土遺構2基がH面に、堀跡と橋跡がL面に検出され、その大部分が12世紀に属する。また堀跡と池跡がH面に検出されている。

### 〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡を構成する数多くの柱穴がH面に検出されている。大部分は12世紀に属するが、近世末以降のものが数棟ある。分布のあり方や重複からは数時期にわたる場の利用が考えられる。県道の北側には比較的規則的な配置を持つ柱穴群がまとまって検出され、建物跡の復元が可能である。

### 〈堀 跡〉

第21次からの継続調査である。L面に検出され、H面の縁に沿うように走っている。南側30m、東側87m、併せて117mを調査した。97ラインでの計測値は上幅13.7m・底幅1.8mを測り、H面との比高差は4.6m、L面とのそれは2.3mである。底面の縦断面は、南側がほぼ平坦であるのに対し、東側は段差や低い仕切りを作り出しているためにやや凹凸があるほか、わずかに北へ傾斜して下がっている。

95ラインから北では3時期の堀が重複している。12世紀の堀跡（21SD 1a）の埋土を掘り込んで21SD 1a 新期1（以下、新期1と記載）、さらにその埋土を掘り込んで21SD 1a 新期2（以下、新期2）がある。新期1は21SD 1aとともにH面の縁に沿って県道の下（調査区域外）へ

伸びているが、新期2はそれらとは別になり、北東へ伸びて沖積地へ消えている。2条とも上幅が約3mになる。それぞれが古い堀の埋土を掘り込んでいることから、ある程度長い時間差があることが推定できるものの、具体的な所属時期は現在のところ不明である。

#### 〈橋 跡〉

21SD 1aの94ラインと95ラインに挟まれた堀跡の法面に検出された。両法面に3個ずつ、底面近くに2個、併せて8個の掘り方で構成された桁行・梁間とも2間ずつ、八脚の木造橋である。橋脚の間隔は桁行8.6～8.9m、梁間4.1～4.2mを測る。その部分での堀幅は約11mになる。東法面の2個と西法面の1個の掘り方は橋脚の柱根を残し、東法面のそれは直径が45cm・40cmと太い。4個の掘り方は一回り大きな掘り方と重複しており、橋の作り替えが考えられる。残る4個は新期の橋のときには再利用されたものであろう。

#### 〈塀跡・柱列跡〉

塀跡(23SA 1)は南辺と東辺が検出された。南辺は西側が来年度以降の調査区域へ伸びていて、現存長は42m、東辺は北が調査区域外へ出ており、現存長は22mである。南辺と東辺は直接は交わらず、南辺の東端と東辺の南端との間が2mほど開いている。幅30～70cmの布掘りの掘り方と12～20cmの板あるいは柱の痕跡を伴い、深さは25～70cmである。間隔が不規則であるが、方形の柱穴が底部に残り、東辺の一部では連続して見られ、柱根が一部に残っている。付近には柱穴がほぼ等間隔で一直線に並ぶ柱列跡が2列検出され、塀跡と重複している。

#### 〈池 跡〉

池跡と推定される遺構(23SG 1)は40×38mの水田部分に検出された。水田は地山を深く削平して作られており、多くの遺構が消滅している。池跡は削平の度合いが小さな西隅に存在し、18×11mの範囲が検出されただけで、大半は来年度以降の調査区域に広がっている。池端は塀跡の南東隅から北西へ70mほど入った位置にあり、塀跡の内部に位置するものと推定され、園池になる可能性がある。今年度は東西方向のトレンチ1本を設定し、堆積物などを観察するにとどめているが、東端は別の遺構に切られてトレンチでは池汀が確認できないこと、深さは検出面から80cmで、池底はほぼ水平であること、堆積物は自然堆積の層相を主に示しているが、一部人為的な層相がみられることなどが明らかになった。出土遺物は土師質土器が量的に多く、少量の陶磁器や瓦・加工材がある。

#### 〈土 坑〉

各種の土坑のうち、12世紀に属し、直径や深度の大きい円筒形のもののは県道の北側の一部に集中して分布する。塀跡23SA 1東辺と重複して切られている79-89-P 2は直径約1m、深さ1.65mの円筒形の土坑である。長さ27cm、幅1～2cm前後の薄い板材2,000本以上とおびただしい量のメロン仲間の種子が埋土下部から出土している。類似の土坑は昨年度も一部地域に集

中して検出されている。

#### 〈遺物〉

12世紀以前の遺物は縄文時代前期・後期の土器・石器・天王山系の弥生土器・土師器と須恵器の甕と坏・石帯（巡方）があるが、分布が限られ、数量も少ない。

主体を占める12世紀の遺物は土師質土器（かわらけ）をはじめ、陶磁器・瓦・木製品・繊維製品・金属製品・石製品・土製品・ガラス・骨角製品・動植物遺体・その他がある。他には近世以降の陶磁器類がある。以下では2カ年分の遺物を取り上げる。

#### 土師質土器（かわらけ）

皿形とそれよりもやや深い坏形の土師質土器（かわらけ）は数量で他の遺物を圧倒し、重量は概算で8トンほどになる。その量を次に述べる大型のもの（平均215g）の個体数に換算すると、32,700点、小型のそれ（平均67g）では119,400点になる。その80%は堀跡からの出土である。

土師質土器は成形技法からロクロ使用のもの（I類）と手づくねのもの（II類）に分類でき、それぞれは法量に大きくは大小の2型がある。口径は、I類・II類とも小型は8～10cm、大型は12.5～14.5cmが主体を占めるが、II類大型はその前後に分布する例がI類に比べると多くみられる。I類では小型としたものよりも一回り小さな一群、II類ではより口径の大きな一群があり、細分が可能である。器高は大型の例にI類とII類の違いが現れ、I類はほとんどが3cm以上になるのに対し、II類はそれ以下のものも多い。調査中の観察や井戸21SE3の分析では両者が混在する傾向を見ることができ、21SE3は総重量435kgにのぼる大量の土師質土器が廃棄され、I類とII類の比率は48%：52%とほぼ同量である。完形品に限定してみれば、I類では大型と小型の比が4.4：1、II類ではその比が2.1：1と大型が小型を上回る。そのほか特殊で数の少ないものにII類小型の内折れ型・底部に穿孔したII類土器・墨書を伴うものがある。

皿形と坏形以外には、土師質の鍋の口縁部や底部破片・内耳鍋（横耳）の口縁部破片があるが、前者が5点、後者は1点と少ない。

#### 陶磁器

渥美・常滑・在地産の陶器は破片数は多いものの、一部を復元できる個体は少ない。渥美には草花文ほかの刻画文をもつ壺の破片がある。在地産の陶器は須恵系のもので、秋田県茂谷沢窯跡のもの1点以外は現段階では窯跡が不明である。

#### 中国陶磁器

遺構内外から出土し、遺構内183点、遺構外45点、合計228点がある。ほとんど破片で、器形の全体を知ることができるものは碗と皿に3点があるにすぎない。出土地点・遺構別では堀跡からの出土がもっとも多く52%を占め、次いで遺構外が20%、それ以外が28%になる。白磁198

点に対し、青白磁は19点、青磁は11点と少ない。青白磁を含む白磁と青磁の比率は19.7：1となる。白磁の器種には壺・四耳壺・水注・碗・皿がある。同一個体かどうかの問題があるものの、壺・四耳壺・水注が118点と多く、碗・皿の72点を上回っている。青白磁は皿・合子・梅瓶、青磁は碗と盤がある。そのほかには黄釉褐彩四耳壺が堀から出土している。

白磁壺・四耳壺は、縦方向に櫛で沈線をいれる胴部破片、肩部や下部に横位の沈線が巡る例があり、12世紀でも初期のものを含む。白磁碗のうち、大宰府S K976土坑出土のものに類似する玉縁口縁をもつ3点は11世紀末に属する。その他の碗の口縁部の形態は、玉縁のもの・端反りのもの・直口あるいは内湾気味のものがある。内面に櫛目文をもつものもある。白磁皿は9点の底部破片がある。青白磁は皿13点・合子5点・梅瓶1点がある。青磁は10点が碗で、9点は内面、1点は内外面に櫛目文をもつ、他の1点は大型の盤の破片である。

## 瓦

すべて破片であり、数も少ない。軒丸瓦には複弁八葉蓮華文・三巴文・剣巴文、軒平瓦には剣巴文の文様がある。軒平瓦には折り曲げ技法によるものがある。

## 木製品・繊維製品

大量の木製品類が堀跡を中心に井戸・各種土坑ほかから出土し、全体の95%近くを堀跡からの出土品が占める。以下のように分類される。

1. 工具（刀子ほか各種の柄・篋状木製品・漆刷毛）、2. 紡織具（糸巻）、3. 漁猟具（網針）、4. 服飾具（扇・縦櫛・横櫛・留針・下駄・草履状木製品）、5. 容器（挽物・曲物・折敷・蓋あるいは底板・栓）、6. 籠編物、7. 食事具（匙形木製品・杓子形木製品・箸）、8. 遊戯具（毬打遊びの毬）、9. 祭祀具（人形・刀子形・鏃形・筭形・笹塔婆）、10. 文房具（物差）、11. 雑具（自在鉤・火鑽板）、12. 部材（支脚・各種部材・建築部材）、13. その他（飾り具・蜜柑玉状木製品＝朱漆塗り・墨書木片・布＝漆の漉し布・用途不明品）

物差は堀跡の木製品を多量に含む層から出土した。完形で、長さ47.7cm・幅2.4cm・厚さ1.1cmを測る。目盛りは1寸刻みで、中央に×印を入れて7寸と5寸を両側へ刻み、7寸の側では5寸のところの刻線を修正して細い線で×印を刻む。1寸の長さはややばらつきがあり、2.88～3.01cmになる。1尺2寸は35.27cmになり、1寸平均は2.939cmである。

## 金属製品

鉄製品には内耳鉄鍋・斧・釘・毛抜き形鉄製品・柄を残した刀子・紡錘車の紡軸がある。また椀形滓1点を含む鉄滓も出土している。内耳鉄鍋は堀跡の最下部層から出土し、地点・層位から12世紀に位置づけることができる。完形品で、口径33.6cm・器高16.5cmの2耳式である。銅製品には掛金と飾り具・鈴・北宋銭などがある。掛金と飾り具はともに鍍金されていた痕跡を残す。飾り具には魚々子地の毛彫りが施されている。

### 石製品

滑石製の石鍋の口縁部の小破片1点・温石2点・硯1点ほかがある。温石の1点は木箱に入った状態で土坑の底部から出土している。

### 土製品

フイゴの羽口・土師質土器の底部を利用した土製円板ほかがある。

### 骨角製品・動植物遺体

骨角製品としては黒漆塗りの弭がある。現段階では種名の大部分が不明であるが、獣骨や鹿の角・カラス貝・モモの種子・クルミ・メロン仲間の種子・ヒョウタン・ヒョウタン仲間の種子ほかがある。

### ガラス・その他

極めて小さなガラスの破片と赤色顔料（ベンガラ）各1点が出土している。

## 3. まとめ

(1)平泉藤原氏の初代清衡は11世紀末から12世紀初めにかけての時期に平泉に進出し、本拠とした。それ以降、4代泰衡が源頼朝によって滅ぼされる文治5年（1189）年までの90年を前後する時間が藤原氏の平泉時代である。柳之御所跡は初代清衡、2代基衡の居館跡と言いつたられているが、その説は近世中期になって現れたもので（斎藤，1989）、重要な文献史料である『吾妻鏡』には宿館平泉館（ひらいずみのたち）と3代秀衡の常居所としての加羅御所の記述はあるが、柳之御所の呼称は現れない。加羅御所は猫間ガ淵を挟んで柳之御所跡の南にある伽羅之御所跡が擬定地になっている。平泉館は政庁的な機能を併せもったことが考えられ、柳之御所跡がそれに相当するものかどうかを明らかにすることは調査の課題の一つである。

(2)北上川に近い低位段丘の縁辺部に館を構えること、低い面に堀を巡らせ、一段高い面に居住のための様々な施設—掘立柱建物・井戸・土坑・溝・塀・池ほか—を作ることが遺跡の構造上の特徴である。堀との関連で問題にされる土塁は痕跡としても確認されていない。現段階では12世紀に限定された居館として位置づけることができるが、11世紀代の安倍氏・清原氏に関連する城柵遺跡と推定される鳥海遺跡・大鳥井山遺跡の例を取り上げ、「古代末期の俘囚城柵が中世城館の構造に類似」しているという指摘（八木，1989）があるように、上述の2遺跡と構造上の共通点をもつ柳之御所跡がそれらと系譜的にどのようなつながりがあるのかということと同時に中世城館との関連も研究課題の一つである。また居館跡として単独で取り上げるだけでなく、中尊寺や毛越寺・観自在王院・無量光院等の寺院、さらには『吾妻鏡』に現れる「倉町」等の地域とどのような関連をもちながら「都市平泉」を構成していたのか、という都市機能における柳之御所跡の役割を考察していくことも必要であろう。

(3)いくつかの重要な遺構が検出されている。橋跡は第21次調査で見つかった南端のものに加え、第23次調査では東側にも確認できた。塀跡とその内部に位置すると推定される池跡がある。塀跡は上部の構造を知ることができないが、多賀城跡ほかで見ついている材木列跡と呼ばれるものに類似する点があり、用語も含めて今後の検討が必要である。今年度は調査区の関係から部分的にしか調査できず、時期やそれらの関係・具体的な位置づけは来年度以降の調査結果をまつことになるが、清衡・基衡の居館説、あるいは平泉館説を考えるうえでの鍵を握る遺構になる。

(4)遺物は質・量とも豊富であり、柳之御所跡の研究がさまざまな角度からおこなわれることを可能にしている。

皿形あるいは坏形の土師質土器（かわらけ）はそれ以前の土師器や「赤焼き土器」ほかと呼ばれる一群の土器と消費形態・消費量ともまったく異なるものである。かわらけは「都市型とでもいうべき消費形態を反映」（藤原，1988）するということのように、消費の場としての柳之御所跡ひいては平泉の性格を強く反映している。また「京都系土師器皿」（百瀬ほか，1988）とされる手づくねの皿は瓦にみられる折り曲げ技法とともに、12世紀の平安京との関係を知ることができる資料である。

破片ではあるが、まとまった量の中国陶磁器は、出土する12世紀の遺跡が全国的にも限られており、流通や消費地における動向を知る良好な資料である。また刻画文をもつ渥美は「11世紀の藤原時代から12世紀の院政期にかけての貴族・富裕階層に享受されたもの」（檜崎，1988）といわれ、中国陶磁器とともに受容層を反映するものである。

椀や皿ほかの漆器は2カ年の調査で小破片も含めると46点が出土しているほか、漆製品には黒漆塗りの弭や朱漆塗りの蜜柑玉状木製品・部材などがある。漆製品に関連する遺物は濾し布と漆塗りの刷毛・篋状木製品、内面に漆膜が付着した陶器の破片・ベンガラが出土し、それらは塗師の存在を推定させる。また椀形滓を含む鉄滓が溝跡に一括して廃棄されていることやフイゴの羽口が出土することから、鍛冶に係わる職人の存在も推定できるなど、手工業が居館内部でおこなわれていることを知ることでできる資料がある。また内耳鉄鍋や物差のように、12世紀としては例の極めて少ない遺物の完形品は貴重である。

#### 引用文献

- 斎藤利男（1989）：都市平泉、その謎を解く「上」。月刊百科，No323，14—24。平凡社。  
檜崎彰一（1988）：中世陶器にみる刻画文の系譜とその展開。『日本陶磁絵巻—やきものに刻まれた絵画』，184—191，愛知県陶磁資料館・（勸）五島美術館。  
藤原良章（1988）：中世の食器考—〈かわらけ〉ノート—。列島の文化史5，60—94。  
百瀬正恒・橋本久和（1988）：中世平安京の土器様相と各地への展開。考古学ジャーナル，No299，15—25。  
八木光則（1989）：安倍・清原氏の城柵遺跡。岩手考古学第1号，1—27。



柳之御所跡 遺構配置図



遺跡遠景（東から）

（矢印間が本遺跡）



調査区遠景（北から）

柳之御所跡 空中写真





堀跡断面



堀跡全景(1)



堀跡全景(2)



橋跡



堀跡南辺

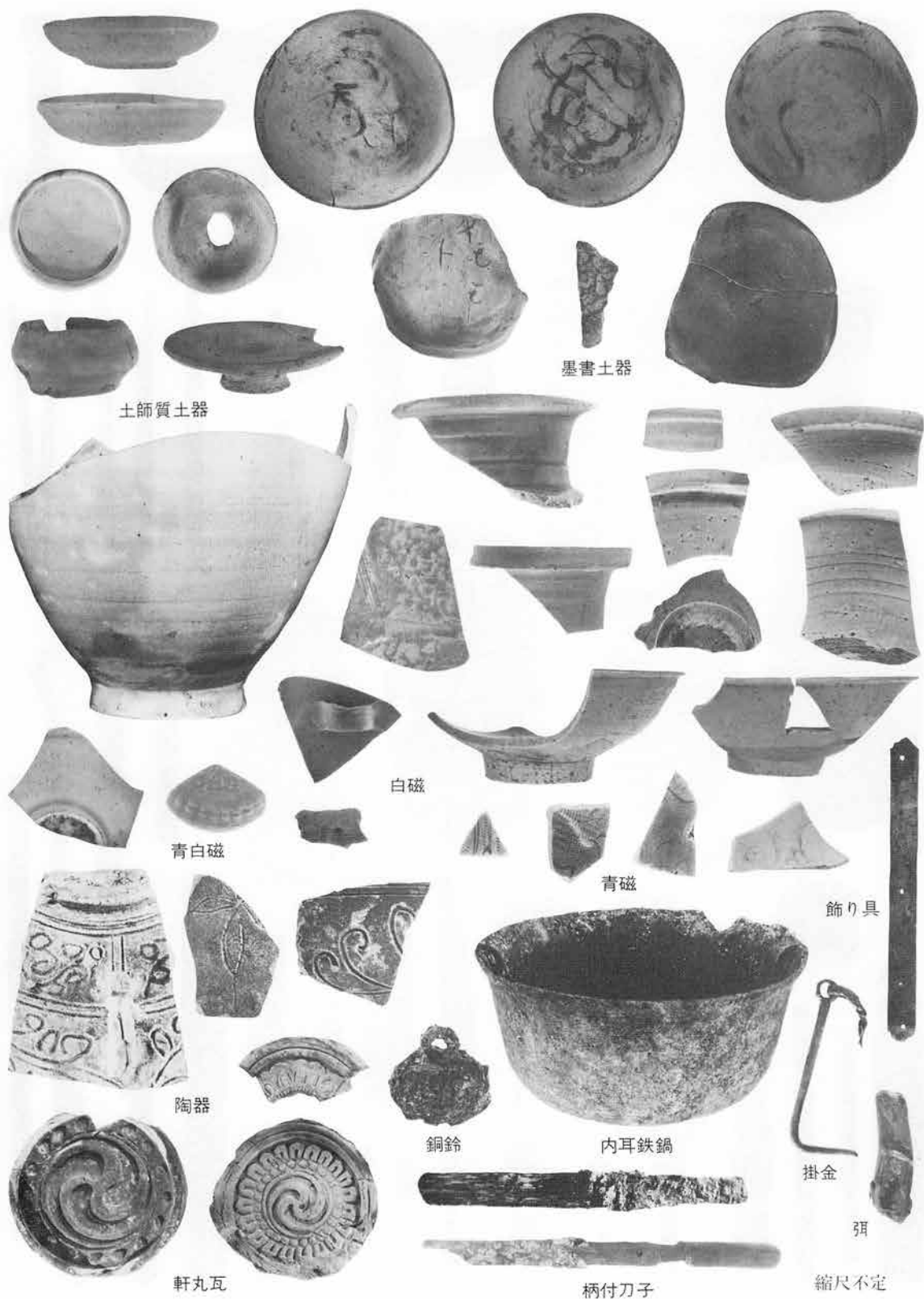


堀跡東辺



柱列跡

柳之御所跡 遺構



柳ノ御所跡 遺物(1)



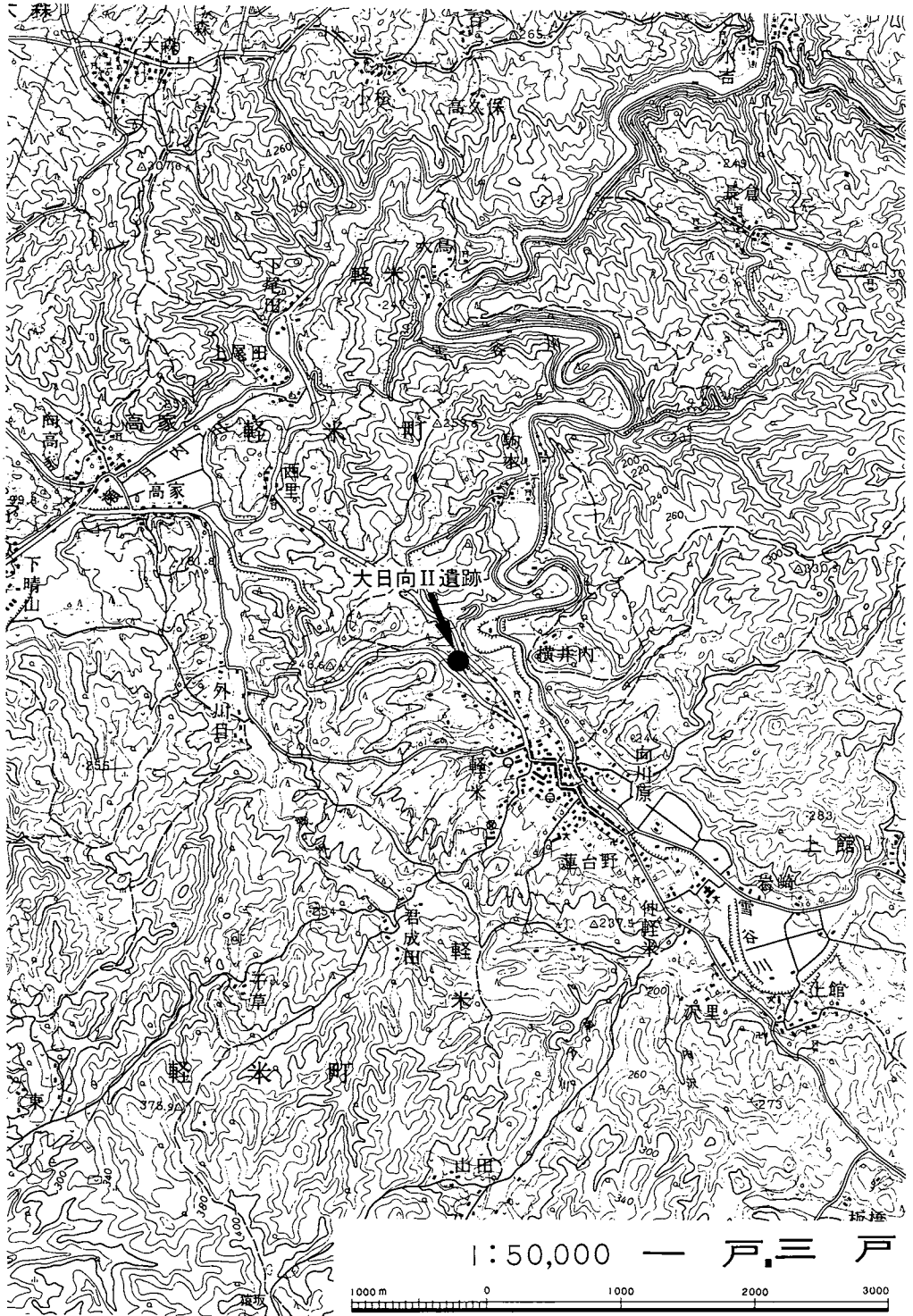
縮尺不定

柳之御所跡 遺物(2) 木製品

### III. 岩手県関係

(1) <sup>おお ひなた</sup>大日向 II 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字軽米第13地割1-2ほか  
委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所  
発掘調査期間 平成元年4月7日～6月30日  
調査対象面積 950㎡  
発掘調査面積 950㎡  
遺跡番号・略号 I F73-2112・OHII-89  
調査担当者 藤村敏男・斎藤邦雄  
協力機関 軽米町教育委員会



大日向II遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

大日向II遺跡は八戸自動車軽米インターチェンジの北側にあり、軽米町の中心部から北西約1.3km付近に位置している。遺跡は、東側を流れる雪谷川と西側を流れる郷坂川に挟まれた丘陵地から東へ緩やかに張り出した標高約170mの緩斜面上に立地している。現況は果樹園である。周辺には、叭屋敷I a・I b遺跡などがある。

## 2. 調査の概要

本遺跡の発掘調査は、国道340号県単道路改良に伴う緊急発掘調査である。昨年度からの継続調査であり、本年度は西側の部分が対象区域である。検出した遺構は、すべて縄文時代の遺構である。竪穴住居跡16棟・竪穴状遺構2棟(中期3・後期12・晩期1・時期不明2)、土坑60基、土壇墓10基、集石遺構2カ所、配石遺構4基、土器埋設遺構16基、焼土遺構5基である。

### 〈竪穴住居跡・竪穴状遺構〉

縄文時代中期の竪穴住居跡のうち、1棟は後期の竪穴住居跡の下位から検出された。直径約7mの円形を呈し、一方の壁に寄って複式炉が設けられている。他の2棟は重複関係にあり、規模・形状は不明である。両者とも円形の石囲い炉を持つ住居跡である。

後期の竪穴住居跡はすべて円形のプランで、直径5m前後の規模を持つものが主体を占める。炉の形態には、石囲い炉と地床炉の2種類がある。支柱穴を持つほかに壁際に無数の壁柱穴を巡らせた例も数例ある。

晩期の竪穴状遺構は一辺5m四方の規模を持ち、隅丸方形のプランを呈している。炉は検出されなかった。

### 〈土坑・柱穴状土坑群〉

平面形には円形・不整円形があり、規模についてもかなりのばらつきがある。これらのなかには、土坑の上面に石を配しているものが複数検出されている。

調査区の北西区域に集中して、明瞭に柱痕跡を残す土坑が複数検出された。直径1m前後、深さ1～1.3mの規模を持つものが多い。これらがいくつか組み合わさり建物跡を構成していたものと思われる。遺構の新旧関係から縄文時代後期後半から晩期中葉の間に位置付けられる。

### 〈土壇墓〉

調査区の北西と南東区域の2カ所に分布している。長さ1.5m前後、幅0.7～1.0m、深さ0.3～0.5mで、平面形は長楕円形・隅丸長方形を呈している。1基の土壇墓からは、屈葬状態の完全な人骨が1体分検出された。また、底面に赤色顔料が敷かれた土壇墓が3基検出された。

### 〈土器埋設遺構〉

調査区全域にわたり検出された。倒立で埋設された2例を除き、他はすべて正立の状態で埋

設されたものである。片口の深鉢形土器が1例あり、他は粗製の深鉢形土器である。縄文時代晩期初頭前後の時期が考えられる。

#### 〈集石遺構・配石遺構〉

集石遺構2カ所・配石遺構4基が検出された。配石遺構のなかには、隅丸長方形に石を配し長軸方向の一端に立石を伴った例もみられる。

#### 〈出土遺物〉

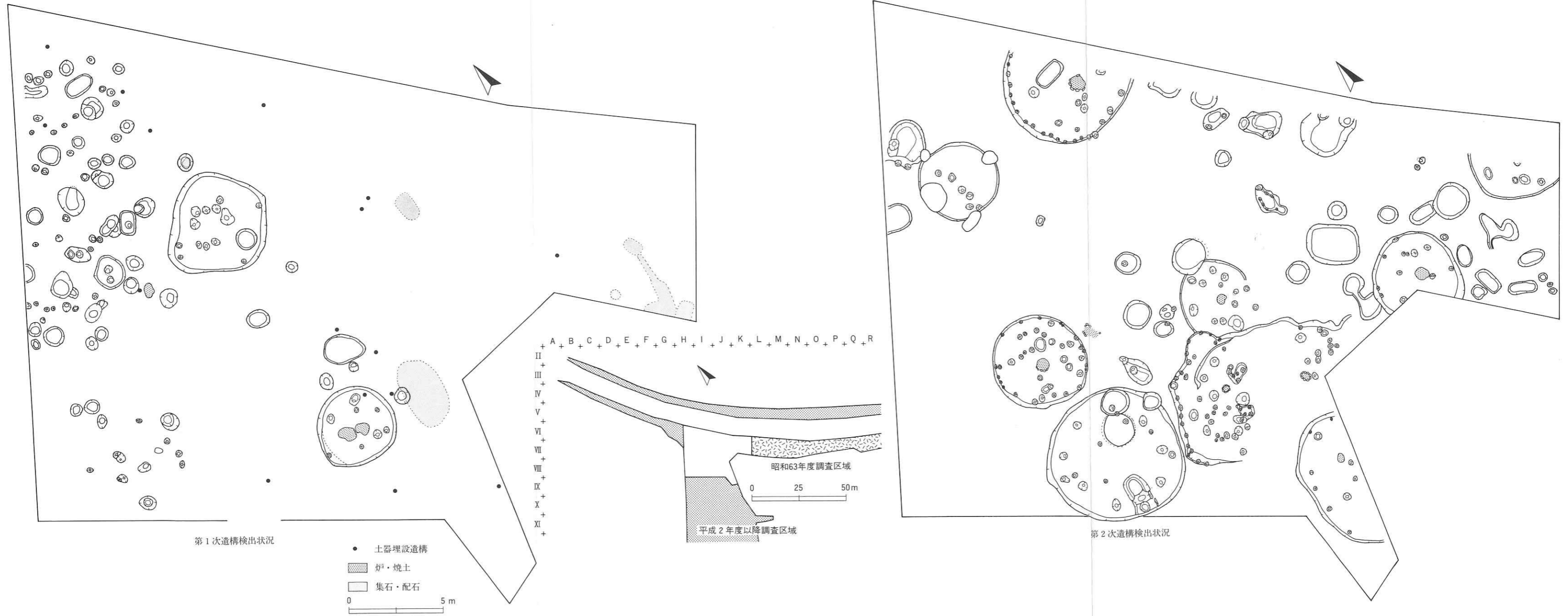
縄文時代前期、中期、後期、晩期の土器と石器・土製品・石製品が出土した。土器は、後期・晩期の土器が主体である。土製品では、数十点の土偶をはじめ土版・玉・耳飾・垂飾品・動物形土製品・スタンプ形土製品が出土している。石器・石製品には、石鏃などの各種定形石器・石棒・両頭石斧・垂飾品、硬玉製の玉・勾玉類がある。

そのほか多数の獣骨があり、なかには解体時に加えられたと思われる擦痕を残すものも認められる。また、小型の壺形土器のなかからヘビ目の肋骨・椎骨がまとまって出土している。少量であるが、複数の土坑から炭化した堅果類も出土している。

### 3. まとめ

- ・大日向II遺跡は、縄文時代前期から晩期にかけて営まれた集落跡である。
- ・2カ年の調査から、弥生時代・縄文時代前期の遺構は斜面の下位、縄文時代中期・後期・晩期の遺構は斜面上方に立地する傾向がうかがわれ、時代により占地に特徴があることが認められる。
- ・特に多く発見された縄文時代後期の竪穴住居跡は、炉の形態・住居構造の違い・土器型式の在り方などから数時期に分類されるようである。また、同時期の重複した竪穴住居跡があり頻繁に移動が繰り返されたものと考えられる。
- ・墓域が2カ所で検出され、集落のなかでも空間の使い分けがあったものと思われる。
- ・埋葬人骨を含む土壙墓は、縄文時代の葬制を知るうえで貴重な資料となる。
- ・ヘビ目の骨が土器に収納された例は、同時期の野田村根井貝塚にもあり、この時期にこのような風習が普遍的に存在した可能性がある。
- ・多種多様な土製品・石製品が出土したことは、遺跡の性格を反映していると考えられる。

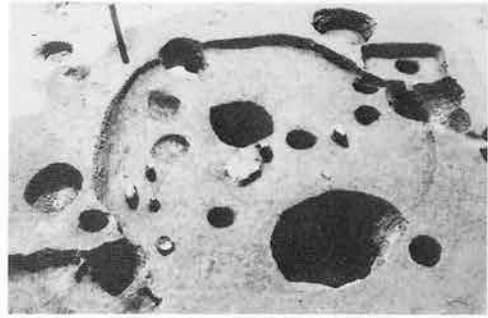




大日向II遺跡遺構配置図



縄文時代の住居跡（中期）



縄文時代の住居跡（後期）



複式炉



石囲炉



土坑基群



土坑墓



埋設土器



埋設土器

大日向II遺跡 遺構



1



3



2



4



6



9



8



10



5



7



11

1 ~ 4 縄文土器 (後期)

5 ~ 11 土偶

大日向II遺跡 遺物

## (2) 葉ノ木沢遺跡

所在地 九戸郡九戸村大字江刺家第18地割葉ノ木沢76ほか  
委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所  
発掘調査期間 平成元年6月20日～7月14日  
調査対象面積 2,300㎡  
発掘調査面積 2,300㎡  
遺跡番号・略号 I F92-2182・HK-89  
調査担当者 斎藤 實・斎藤博司  
協力機関 九戸村教育委員会



葉ノ木沢遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

葉ノ木沢遺跡は、八戸自動車道九戸インターチェンジの北約3km、国道340号の東側に位置する。遺跡の西方約2.5kmには折爪岳(852.2m)があり、遺跡は折爪岳山麓崖錐性扇状地の先端部にあたり、北流する瀬月内川によって形成された低位段丘上に立地する。調査対象地域の標高は238～240m、現況は畑地と果樹園である。

## 2. 調査の概要

調査は、国道340号の改良工事に伴う緊急発掘調査である。調査は昨年度からの継続調査であり、今年度は対象面積のほぼ半分について実施した。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構9基、土坑3基である。いずれも瀬月内川に面した調査区南端の緩斜面上に集中して検出された。

### 〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、中楸浮石の褐色土層上面から検出された。そのうち3基は一部が調査区外に延びている。形状はすべて溝状であり、規模は開口部の長さ230～350cm、幅50～60cmから100～120cm、深さ60cmから180cmとばらつきがある。遺構の時期については、遺構内やその周辺から遺物は出土していないが、検出面からいずれも縄文時代後期以降に位置づけられる。

### 〈土 坑〉

土坑は、南部浮石の黄褐色土層上面から検出された。そのうち1基は一部分が調査区外に延びている。形状はほぼ円形であり、断面形はフラスコ形を呈するもの1基、円筒形を呈するもの2基である。規模はフラスコ形の土坑が開口部径60～80cm、底面径80～90cm、深さ100cm、円筒形の土坑が開口部径1.6～1.8m、底面径60～70cm、深さ1.0～1.2mである。遺構の時期については、遺構内やその周辺から遺物は全く出土していないが、検出面からいずれも縄文時代前期以前に位置づけられる。

### 〈出土遺物〉

調査区南端の緩斜面の黒色土層から、磨石1点と縄文時代後期～晩期の土器片1点が出土している。

## 3. まとめ

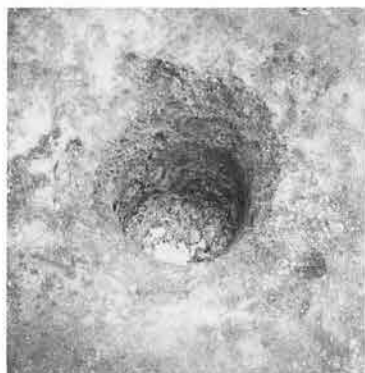
調査の結果、検出された遺構から、葉ノ木沢遺跡は縄文時代の狩り場跡であったと考えられる。遺跡全域は開田などのため改変しており、削平・破壊された遺構が相当数あるものと思われる。また、遺跡の北側の斜面からは、縄文時代前期・後期の土器が採集できることから、これらと関連する遺跡の存在が予想される。



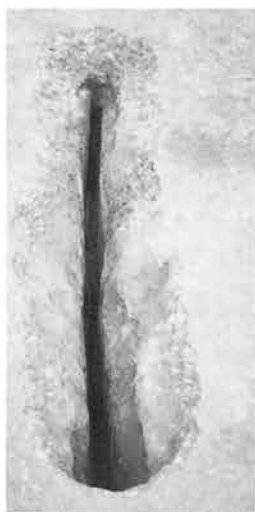
遺跡近景



陥し穴状遺構(1)



土坑(1)



陥し穴状遺構(2)



陥し穴状遺構(3)



土坑(2)

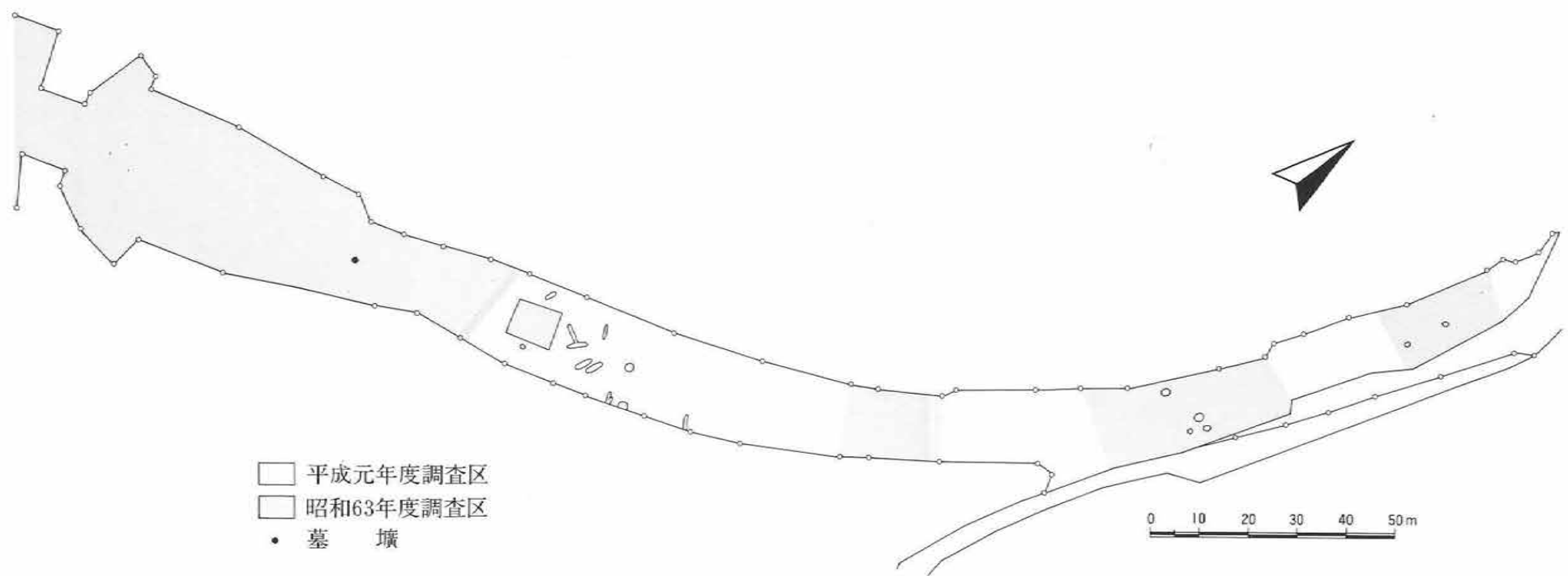


縄文土器片



礫石器

葉ノ木沢遺跡 遺構・遺物

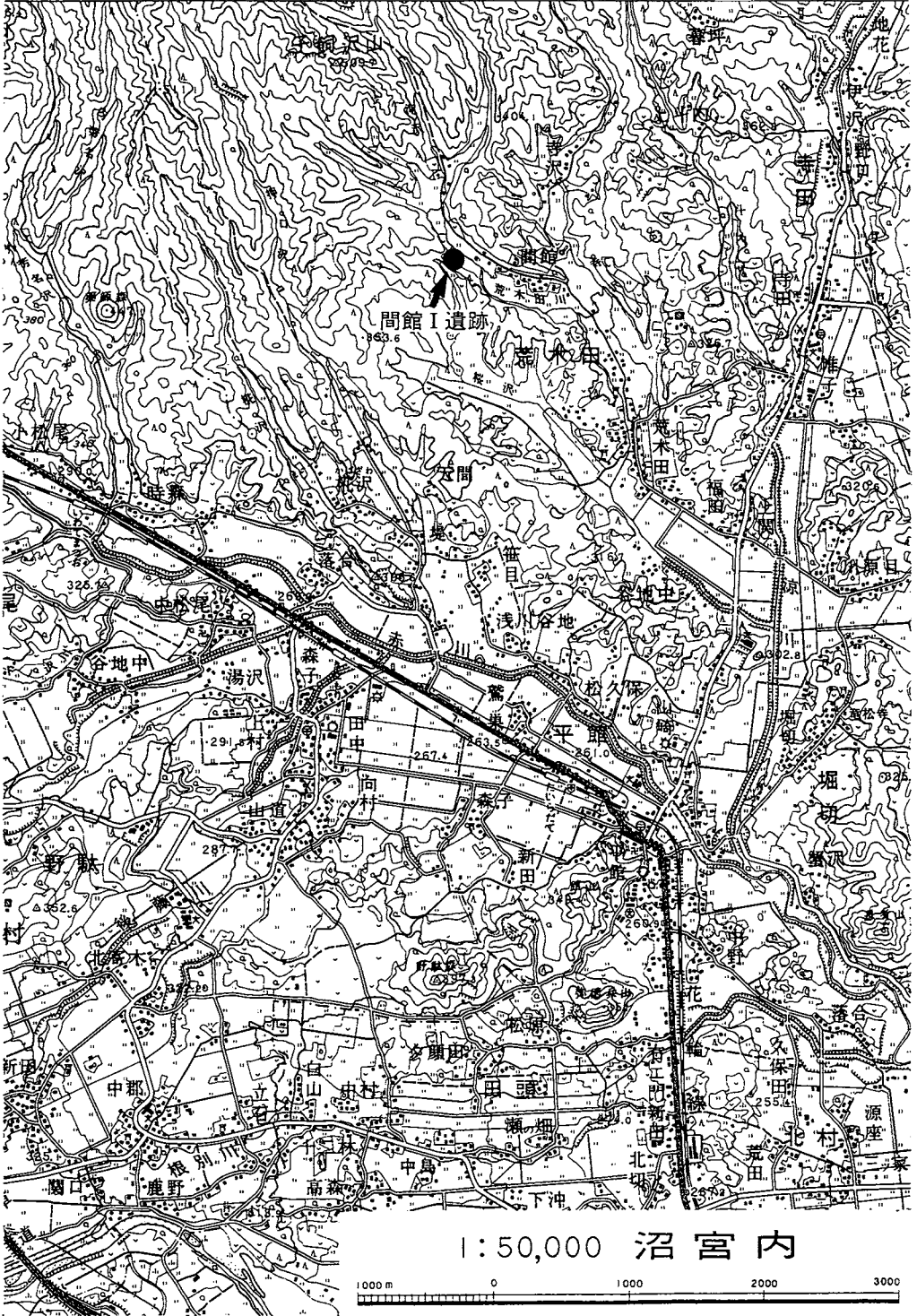


葉ノ木沢遺跡遺構配置図



### (3) 間<sup>ま</sup>館<sup>だて</sup> I 遺跡

所在地 岩手郡西根町荒木田第3地割28ほか  
委託者 盛岡地方振興局 岩手北部土地改良事業所  
発掘調査期間 平成元年7月3日～9月26日  
調査対象面積 3,935m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 3,935m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 KE05-2101・MD I-89  
調査担当者 藤村敏男・斎藤邦雄  
協力機関 西根町教育委員会



間館 I 遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

間館 I 遺跡は、東日本旅客鉄道花輪線平館駅の北約 4 km 付近に位置する。荒木田川の南岸の丘陵地に立地し、北部斜面の南西には湧水がある。調査区域の標高は320～343m、河床面との比高は 6 m 前後である。現況は、畑地・山林・道路である。周辺の遺跡には間館 II・寺沢・上斗斗内遺跡等がある。

## 2. 調査の概要

間館遺跡の発掘調査は、土地改良総合整備事業に伴う緊急発掘調査である。

調査区内は起伏に富んでおり、東南部の急斜面から北西部の緩斜面に続く鰻の寝床状の範囲で、土層も様でない。特に斜面においては再堆積層が認められる。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡19棟、土坑23基、時期不明の溝跡 2 条、焼土遺構 3 基である。

### 〈竪穴住居跡〉

縄文時代中期に属する 6 棟の住居跡は、調査区北部の斜面に位置し、直径4.3～6 m の円形であり、3 棟は石囲炉を有する。炉の 2 基は円形をなすが、他の 1 基は複式炉でその一角に石棒状の砥石が出土している。また 2 棟の床面下からフラスコ状土坑が検山された。それぞれの住居の埋土からは、多数の土器が出土している。他の住居跡は、前期 1 棟、前期末～中期初頭 9 棟、不明 3 棟である。

### 〈土 坑〉

断面形がフラスコ状を呈するものが大半で、そのうち 9 基は竪穴住居によって切られている。大半は調査区北端斜面の縁辺部に集中し、そのうち 9 基は切り合いの関係にある。規模は底部直径1.8m 前後、検出面からの深さは70cm前後のものが多い。大半の土坑の埋土に、石器や中期の土器が見られる。4 個体分の土器を出土しているものもあり、これらのうち 1 個体は伏せた状態で、空洞の内底部に炭化物を伴っている。

### 〈溝〉

溝は途中 2 カ所で切れているが、その方向等から調査区の両端まで続く一連のものである。総延長240m、深さ最大1.10m である。埋土から縄文土器片・石器等が出土しているが、溝の年代を直接示す遺物は出土していない。

### 〈焼土遺構〉

焼土遺構は、径50cm以下の広がり最大層厚 5 cm内外の小規模な焼成変化を受けている。遺構の時期や性格については不明である。

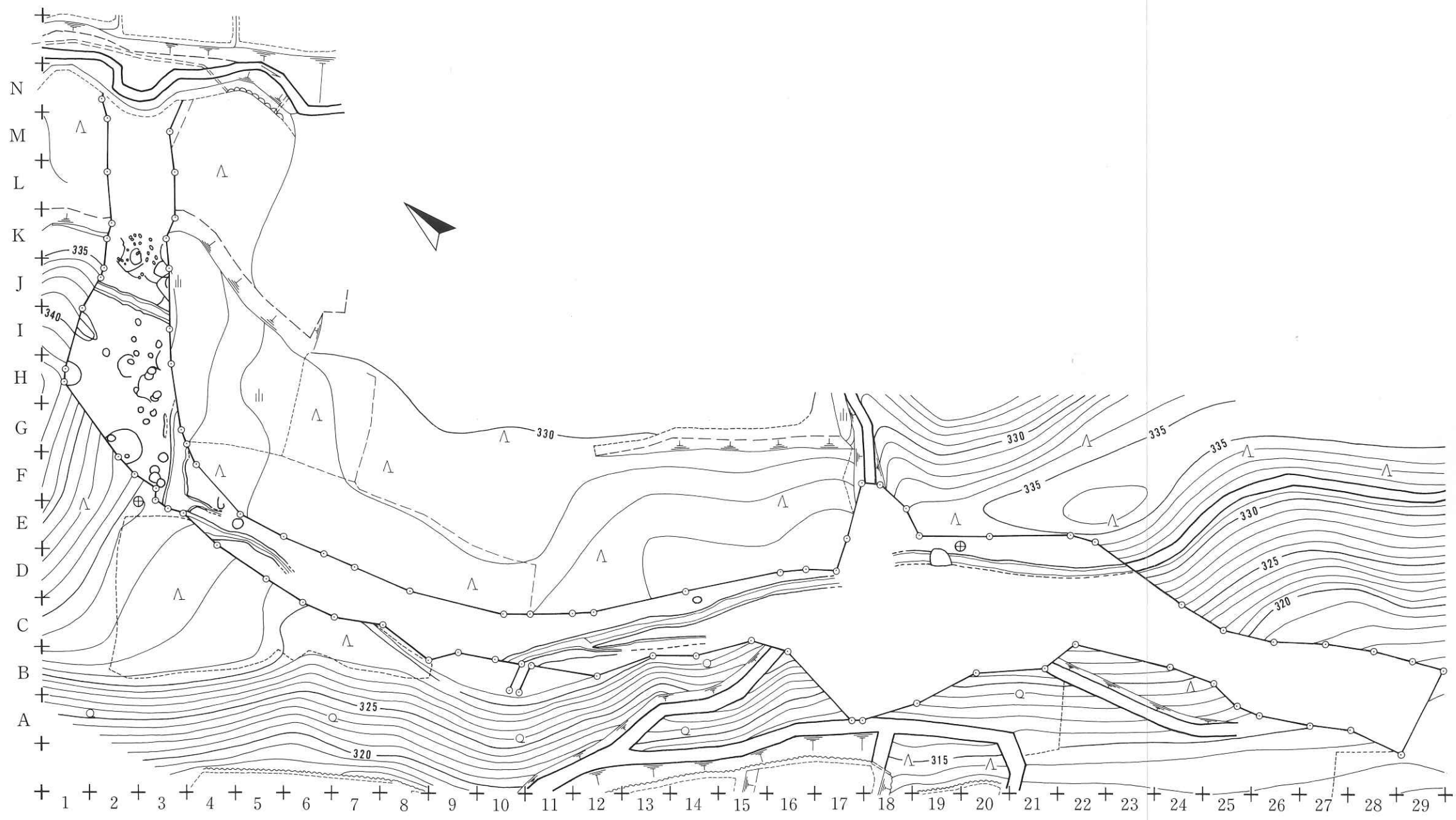
### 〈出土遺物〉

出土遺物の総量は、大コンテナで80箱ほどである。種類としては、土器・石器・石製品・土製品である。縄文土器が大部分であるが、接合できる土器は半分にも満たない。

土器は、縄文時代前期末～中期が大半で、若干の後期・弥生土器と極く少量の土師器・須恵器片が出土している。石器には、石鏃・石斧・石匙・石篋・凹石・磨石・大量の不定形石器があり、少量であるが、石槍・ヒスイ製垂飾品・砥石・半円状偏平打製石器・石皿・石棒がある。土製品では、土偶の破片4点・土器片転用の有孔円盤数点・ミニチュア土器等がある。

### 3. まとめ

今回の調査の結果、調査区域の北端部に集中して竪穴住居跡や多くの土坑が検出され、縄文時代中期の集落の一部であることが判明した。また近世以前と見られる溝跡が区域内に延びている。この溝の年代等は不明であるが、この地には古来より「土樋」の地名の伝承があり、それとの関連を考慮する必要があると思われる。



間館 I 遺構配置図



1. 北端平坦面の住居跡の重複・切り合い状況



2. 縄文時代の住居跡



3. 複式炉をもつ縄文時代住居跡



4. 溝跡（遺跡東半部）



5. フラスコ状土坑

### 間館 I 遺跡 遺構

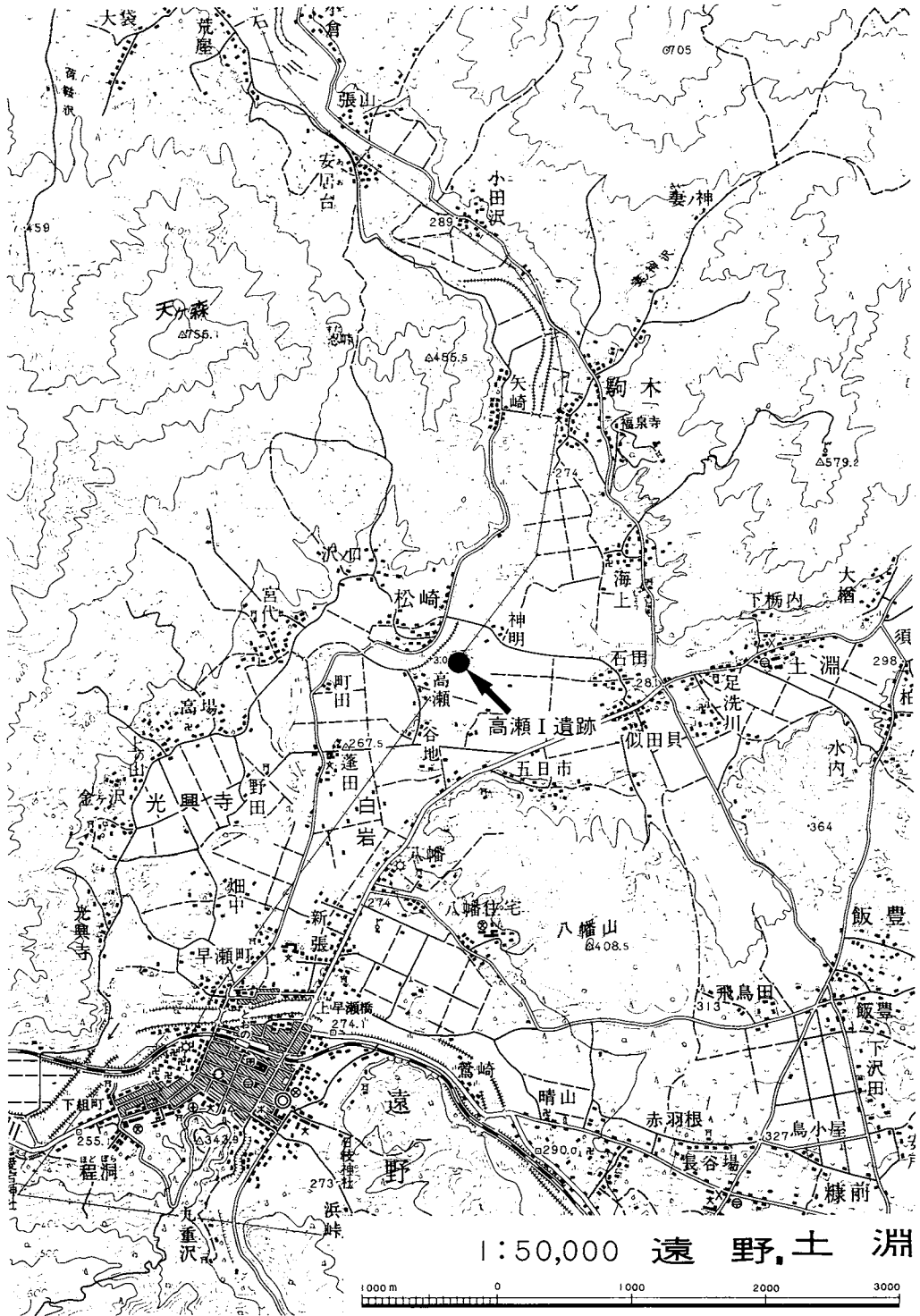


間館 I 遺跡 遺物

#### (4) 高瀬 I 遺跡

所在地 遠野市松崎町駒木第21地割字谷地28-1ほか  
委託者 岩手県土木部 遠野土木事務所  
発掘調査期間 平成元年7月14日～10月13日  
調査対象面積 2,700㎡  
発掘調査面積 2,700㎡  
遺跡番号・略号 MF35-2230・TSI-89  
調査担当者 斎藤博司・斎藤 實・平井 進  
協力機関 遠野市教育委員会





高瀬I遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

高瀬 I 遺跡は、東日本旅客鉄道釜石線遠野駅の北東3.3km付近の遠野盆地の中央部に位置し、猿ヶ石川が南西に蛇行する沖積高位段丘面の舌状台地の基部に立地している。標高は269～273 m、猿ヶ石川との比高は約5 mである。現況は畑地である。

## 2. 調査の概要

調査は、猿ヶ石川中小河川改修に伴う緊急発掘調査である。調査区域は猿ヶ石川左岸の緩斜面にあたり東西約20m、南北約150mの範囲である。

検出された遺構は縄文時代の陥し穴状遺構22基、平安時代の竪穴住居跡14棟、住居跡状遺構1棟、掘立柱建物跡2棟、土坑25基、不定形ピット14個、焼土遺構1基、溝3条、古代以降の溝2条、近代の墓壇3基である。

### 〈竪穴住居跡・住居跡状遺構〉

竪穴住居跡は、平面形態から方形・長方形・隅丸方形に大別され、一辺3 m未満のもの5棟、3 m以上5 m未満のもの8棟、5 m以上7 m未満のもの2棟である。カマドは9棟に検出され、いずれも東壁南寄りに付設されている。南壁にカマドをもつ住居跡のうち、1棟は拡張されたものであり、1棟はカマドの作り替えが行われている。煙道は9棟のうち4基が削り抜き式である。周溝は調査区中央部の住居跡1棟から検出されており、貯蔵穴をもつものが多い。柱穴が確認された住居跡は5棟である。焼失した住居跡1棟、埋土に火山灰を含むものが2棟である。

住居跡状遺構1棟は平面形が1辺217×172cmの隅丸方形で外側に4本の柱穴を伴う。

### 〈掘立柱建物跡〉

北東—南西方向の同一軸上に検出された2間×2間の総柱建物跡2棟である。北側の建物の規模は北西—南東方向310～325cm、北東—南西方向310cm、他方は北西—南東方向280cm、北東—南西方向200～210cmである。ともに、柱穴の平面形は円形であり、柱痕が認められる。出土遺物からともに平安時代の建物跡と推定される。

### 〈土坑及び不定形ピット〉

土坑の平面形は、円形5基、楕円形8基、長方形7基、その他5基である。用途は不明であり、遺物が少ないことから時期決定は困難であるが、埋土状況から平安時代に属するものが多いと推定される。

### 〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、調査区中央部から西側に分布している。平面形が溝状を呈し両端が円形にやや膨らむもの14基、円形を呈し副穴を1～2個もつもの4基、隅丸長方形を呈し副穴を2～

4個もつもの3基、副穴をもたないもの1基がある。

1基から縄文時代後期前葉の土器片と石鏃が出土している。また、埋土上部に約5,000年前降下した安家火山灰を含むもの2基がある。

#### 〈墓 墳〉

墓墳は平面形が径1 m前後の円形を呈し、いずれも座棺を埋納したものと推定される。副葬品には寛永通寶、キセル、櫛などがあり、人骨の保存状況は良好である。

#### 〈溝〉

西側の2条は、一方が長さ17m、上幅80～200cm、底部幅30～120cm、他方が長さ17m、上幅30～40cm、底部幅20～25cmである。ともに北西方向に走り、前者には流水の痕跡がある。北側の3条のうち1条は長さ32m、上幅60～200cm、底部幅30～110cmである。土師器が流れ込み、平安時代に属するものと推定される。他の2条はほぼ平行し、それぞれ長さ12m、9 m、上幅45～120cm、50～90cm、底部幅20～45cm、20～50cmである。埋土から「聖宋元寶」、「洪武通寶」が出土している。

#### 〈焼土遺構〉

焼土は検出面で42×55cmの範囲に焼成をうけ、埋土状況から現地性のものと考えられる。

#### 〈出土遺物〉

縄文時代の遺物は、後期前葉の土器片とそれに伴う石器数点である。

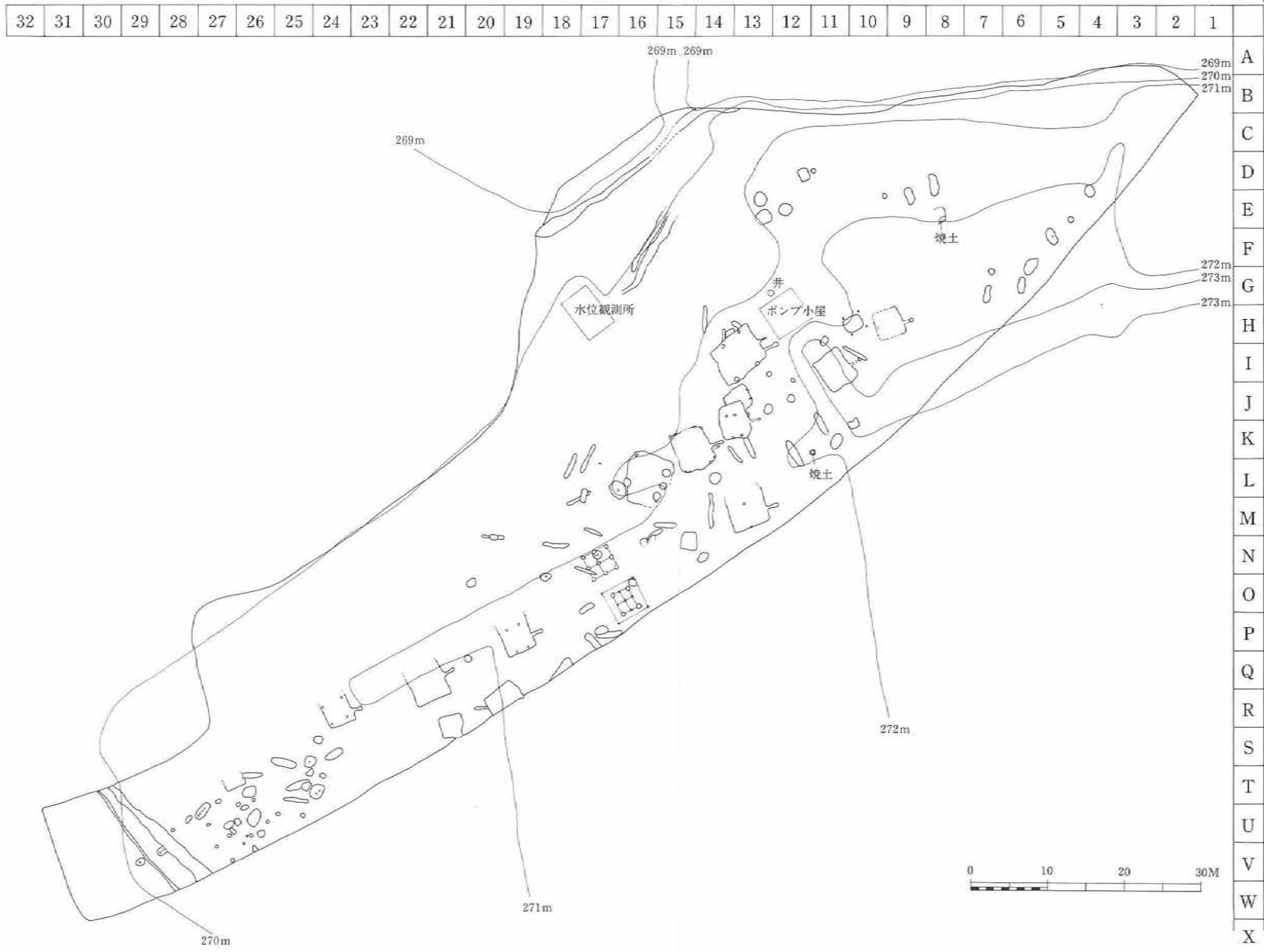
平安時代の遺物は、土師器・須恵器の坏・壺・甕が主体であるが、甕・坏が多く壺が少ない。坏はすべてロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切りであり、なかには再調整のものがある。また、内面黒色処理したものが多い。土師器・須恵器の坏には「林」、「天」、「出」、「内」、「物部」などの墨書が残されているものがある。その他、刀子、鉄鏃、鉄滓、石鏃、砥石、果実の種子などが少量出土している。

### 3. まとめ

今回の調査によって、高瀬I遺跡は縄文時代の陥し穴状遺構群と平安時代の集落、古代以降の溝、近代の墓域で構成されていることが明らかになった。

縄文時代では段丘全体に陥し穴状遺構が点在し、猿ヶ石川沿いに密度が高くなり、狩りの方法も様々推定される。

奈良時代の住居跡、墓域が北東部に存在するが、平安時代には北西部から南側にかけて大小の竪穴住居跡が多く、中央部に掘立柱建物跡が並ぶ集落が発達している。また、平安時代の遺構は大溝の東側に限られており、占地上の特徴が認められる。



高瀬 I 遺跡遺構配置図



平安時代の住居跡



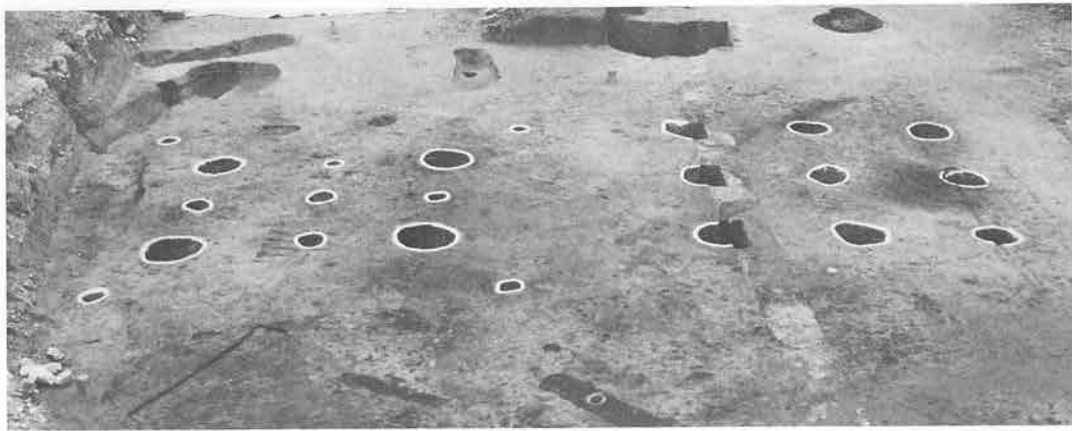
平安時代の住居跡



平安時代の住居状遺構



平安時代の平行する溝跡



平安時代の並ぶ掘立柱建物跡（左は庇をもつ）

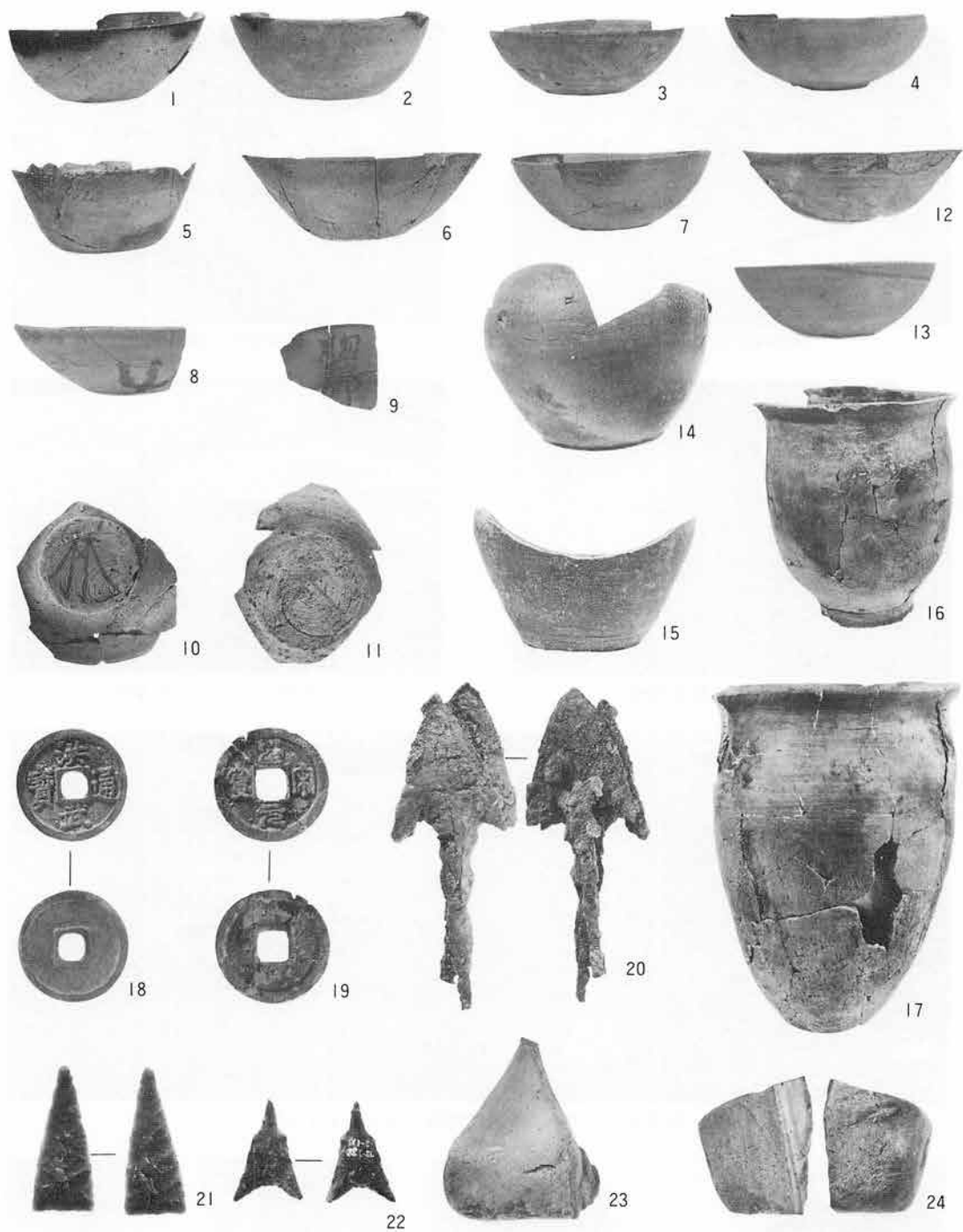


フラスコビット



円形状・楕円形状・溝状の陥し穴状遺構

高瀬I遺跡 遺構



1 ~ 9 土師器坏  
8 ~ 11 墨書土器  
10 ~ 13 須恵器坏

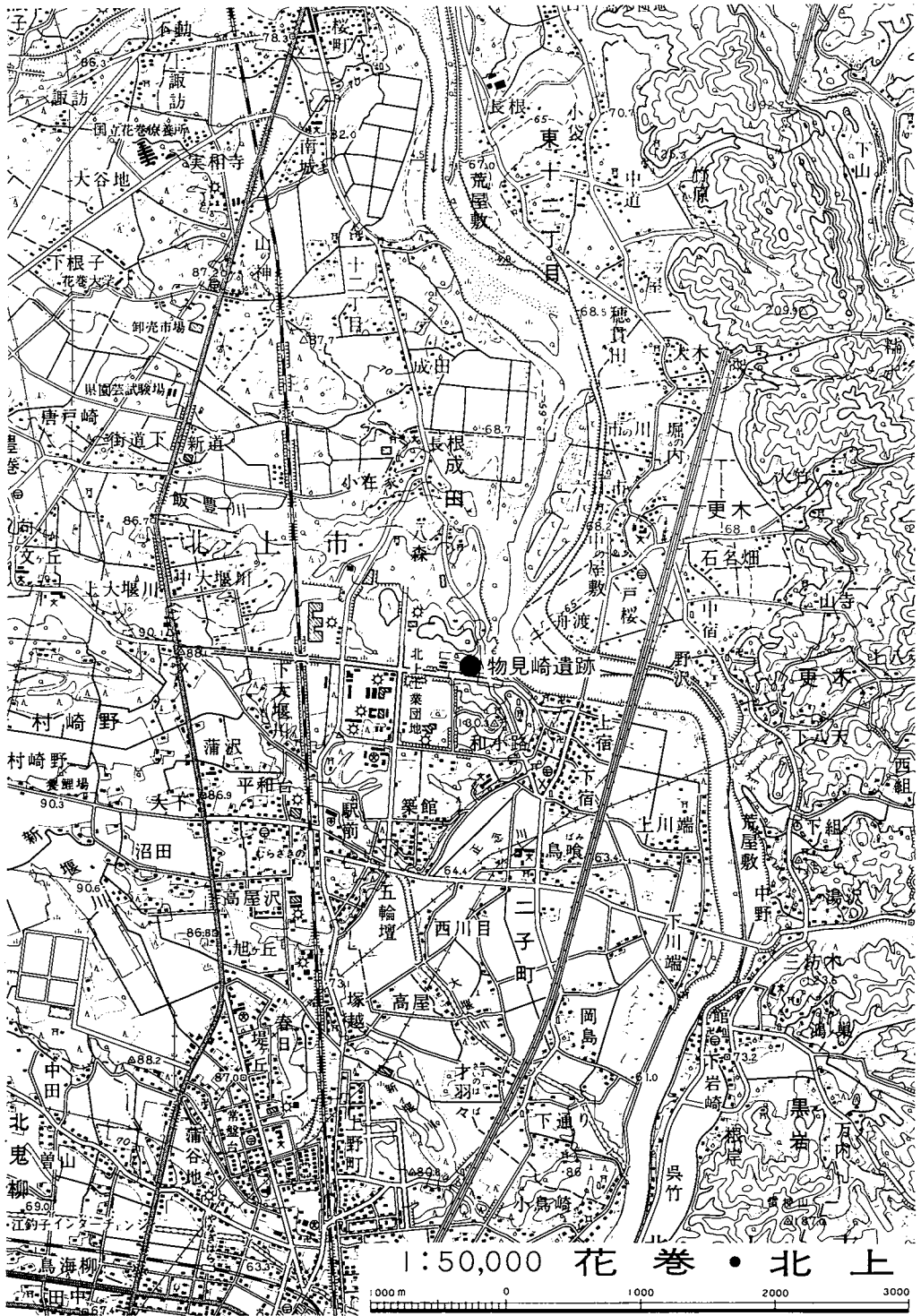
14 · 15 須恵器甕  
16 · 17 土師器甕  
18 · 19 渡来銭「洪武通寶」「聖宋元寶」(中世)

20 鉄鍬  
21 · 22 石鍬(縄文)  
23 · 24 砥石

### 高瀬 I 遺跡 遺物

(5) 物見崎遺跡

所在地 北上市北上工業団地120-1 ほか  
委託者 岩手県企業局  
発掘調査期間 平成元年4月7日～6月20日  
調査対象面積 1,945m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 1,945m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME46-2214・MM-89  
調査担当者 斎藤 實・斎藤博司  
協力機関 北上市教育委員会



物見崎遺跡位置図



## 1. 遺跡の立地

物見崎遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線村崎野駅の北東約2kmに位置し、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。遺跡は二子城跡の一部で北側に位置し、東に坊館跡、南に加賀館跡がある。東側の坊館跡より眼下に臨む北上川の南東下流には船着場跡がある。南側約40mには監物館跡が沢を挟んで隣接している。調査区域は、二子城跡の北側にある館跡であり、県道成田飛勢線に沿った西側にある。調査対象地域の標高は78～86m、現況は山林である。

## 2. 調査の概要

調査は、第三北上中部工業用水道事業に伴う緊急発掘調査である。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡17棟（前期14・後期2・晩期1）・土坑1基、弥生時代の竪穴住居跡1棟、古代以降の炭窯跡5基、中世の溝跡3条、時期不明の溝跡1条である。

### 〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、標高78～80m付近に10棟と同一等高線上の南東から南向きの斜面上に並列して検出された。

縄文時代の竪穴住居跡は、いずれも径3～4mの不整の円形または楕円形を呈する。全体を確認できたものは2棟であり、他は斜面上に構築されているため流失して、壁や床面の一部を残すだけである。炉は地床炉・石囲炉・埋設炉である。壁は、斜面上のものはその大半が流失し、平坦部のものは以前に畑地として開削された際に削平されたため、壁高はいずれも低く10～30cmである。後期の竪穴住居跡は2棟が重複関係にあり、そのうち1棟は埋設炉を有する。

弥生時代の竪穴住居跡は、径3.6mのほぼ円形を呈し、炉は石囲炉である。壁高は10cmと低く、壁に沿って8個の柱穴があり、南西側には出入口と思われる施設がある。

### 〈土 坑〉

平面の形状は楕円形を呈し、断面形は浅いしU字形を呈する。規模は開口部が約180cm、深さが約40cmである。埋土中より縄文時代の土器と石器が出土している。

### 〈炭 窯 跡〉

調査区の北東側から1基、南西側から4基検出された。北東側の1基は隅丸の長方形を呈し、規模は340×160cm、深さが約20cmであり、南西側の4基は隅丸の方形を呈し、規模は約110×120cmから130×140cm、深さが約20から45cmである。南西側の炭窯跡4基は、埋土に焼土とともに多量の木炭が推積し、壁面や底面に焼土の残るものがある。埋土中から土師器・須恵器の破片が出土している。

### 〈溝 跡〉

4条のうち3条は、調査区の北側中央部から南西方向へほぼ平行に延びている。これらの溝

跡は、土塁状の盛土の両側に沿って東北―南西方向に延びており、中世の二子城跡の館跡に伴う遺構と思われる。東北端は調査区外に続いている。長さ13mから25m、幅10～20cmから20～30cm、深さ10～25cmから20～30cm、断面形は浅いU字形を呈し、底面のみが浅く残っている部分がある。調査区南東側の1条は北西―南東方向に延び、長さ15m、幅30～120cm、深さ10～20cm、断面形は皿形を呈する。遺構の時期は不明である。

#### 〈出土遺物〉

遺物は、縄文時代の前期、晩期から弥生時代の土器が主体である。他に縄文時代各時期の土器、石器、古代の土師器・須恵器、中・近世の陶磁器などが出土している。遺物の殆どは遺構外から出土しており、遺構に伴うものは極めて少量である。南側中央部には畑地として開削された際の石の捨て場と思われる集石があり、そこから縄文時代晩期から弥生時代を主体とした土器が投げ込まれた状態で出土している。

### 3. まとめ

調査の結果、当初予想された二子城跡の館跡に関わる遺構・遺物は、溝跡と少量の陶磁器片のみであった。検出された遺構と遺物の種類から、物見崎遺跡は縄文・弥生時代の集落跡であり、古代以降の一時期には製炭の場所に利用された各時代にまたがる複合遺跡であることが明らかになった。



物見崎遺跡遺構配置図



遺跡全景



溝跡



縄文時代竪穴住居跡



弥生時代竪穴住居跡

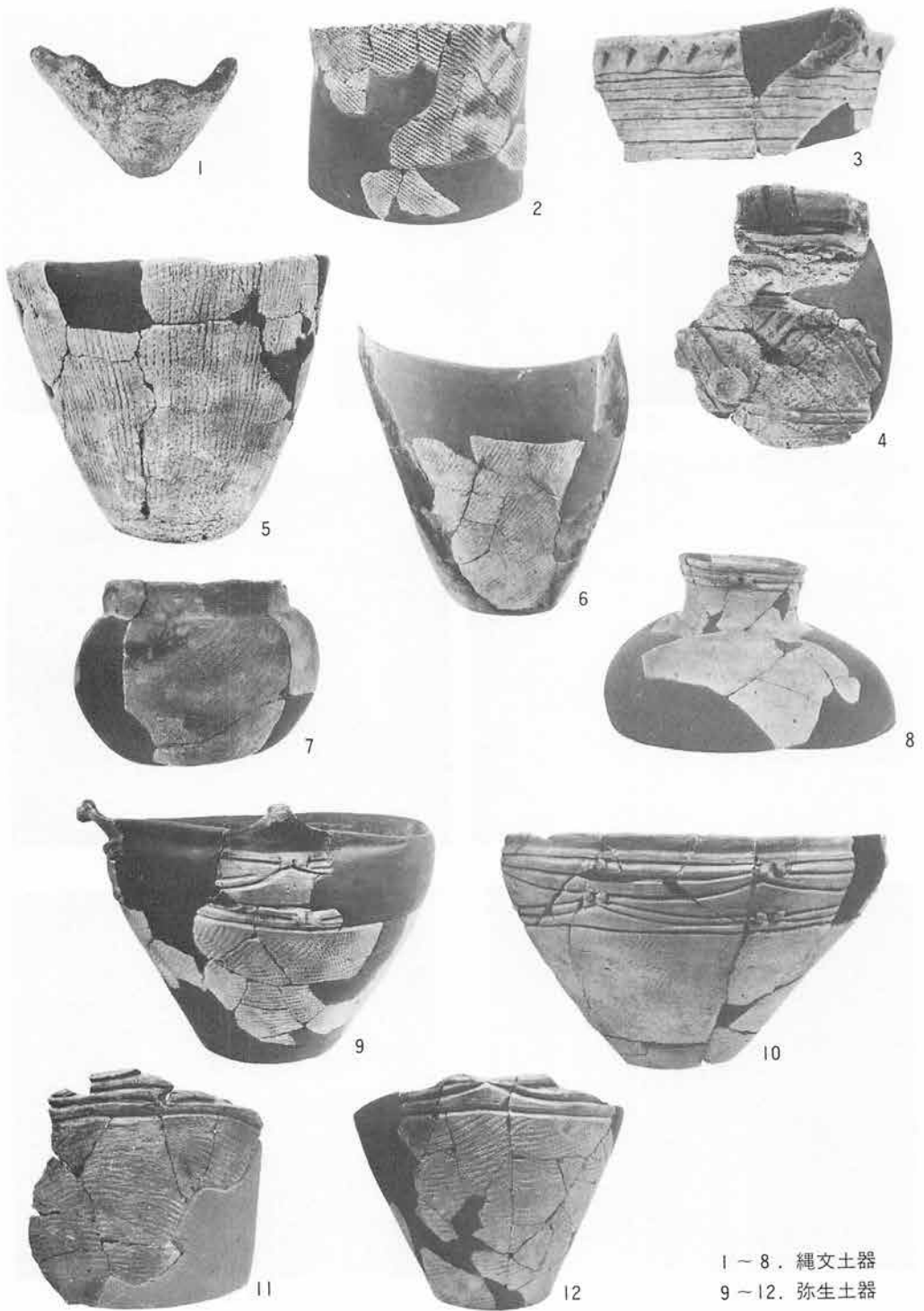


土坑



炭窯跡

物見崎遺跡 遺構



1 ~ 8 . 縄文土器  
9 ~ 12 . 弥生土器

物見崎遺跡 遺物

(6) 監<sup>けん</sup>物<sup>もつ</sup>館<sup>だて</sup>跡

所在地 北上市北上工業団地301-13ほか

委託者 岩手県企業局

発掘調査期間 平成元年4月7日～6月20日

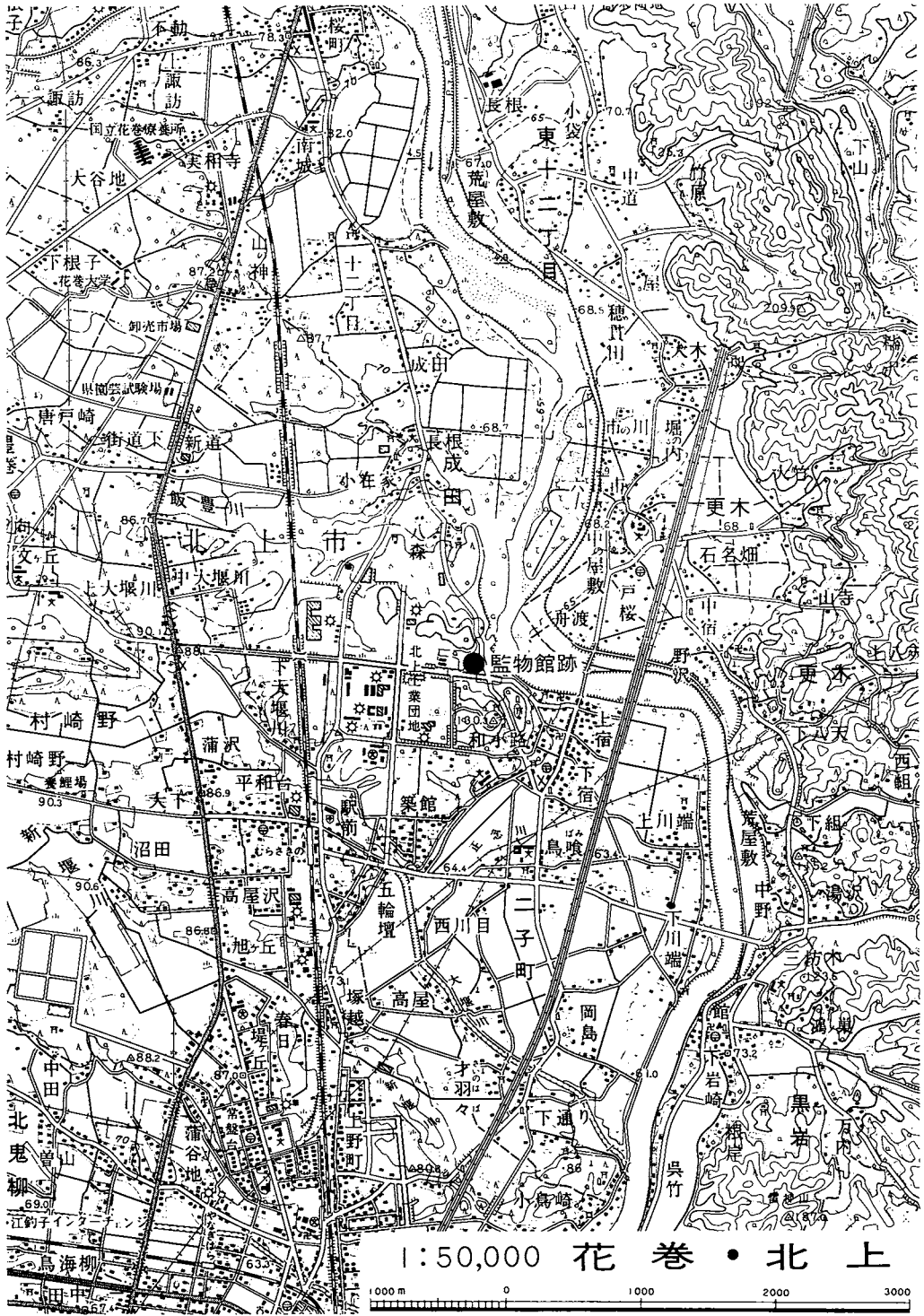
調査対象面積 300m<sup>2</sup>

発掘調査面積 300m<sup>2</sup>

遺跡番号・略号 ME46-2214・KM-89

調査担当者 齋藤 實・齋藤博司

協力機関 北上市教育委員会



監物館跡位置図

### 1. 遺跡の立地

監物館跡は、東日本旅客鉄道東北本線村崎野駅の北東約2kmに位置し、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。調査区域は二子城跡の北側にあたる館跡であり、物見崎遺跡と隣接する。調査対象地域の標高は83～85m、現況は山林である。

### 2. 調査の概要

調査は、第三北上中部工業用水道事業に伴う緊急発掘調査であり、調査対象地域は、南北約23m、東西約36mの三角形をした範囲である。

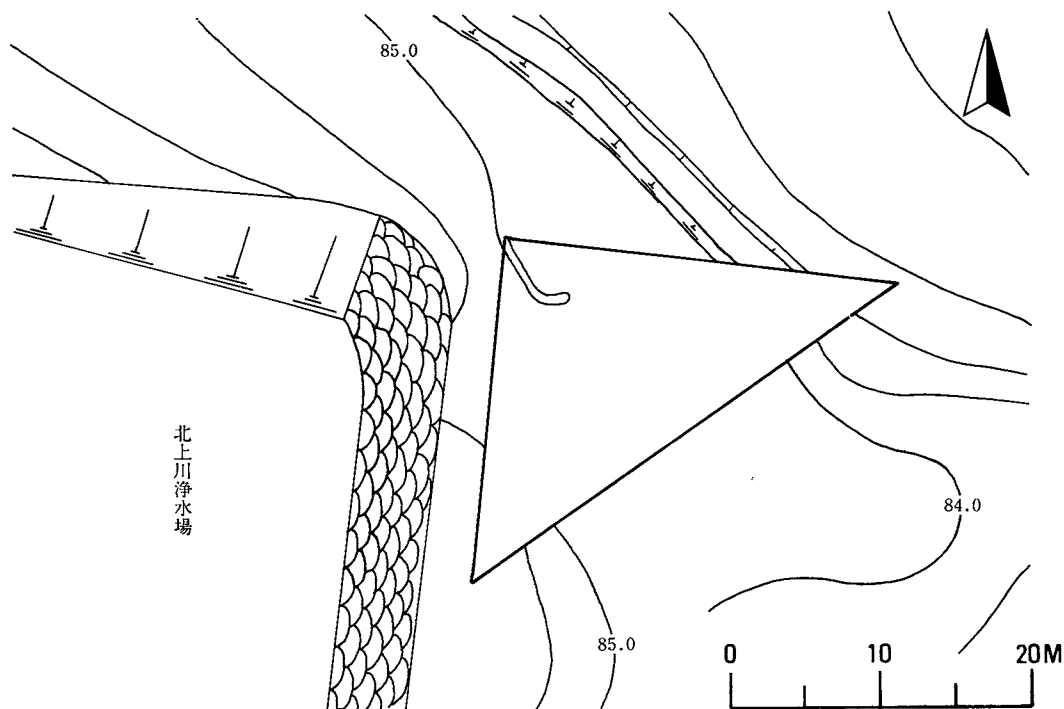
検出された遺構は時期不明の溝跡1条であり、遺物は出土していない。

#### 〈溝 跡〉

溝跡は、北西方向から南側に延びてやや湾曲し、東端は浅くなって消滅する。規模は、長さ約6.6m、幅40～60cm、深さ10～20cm、断面形はU字形を呈する。時期は不明である。

### 3. まとめ

調査の結果、遺跡の調査区域は西から東へ走る沢の南側斜面にあることから、遺跡の主体は調査区域外の高位丘陵地に存在するものと推定される。



監物館跡遺構配置図

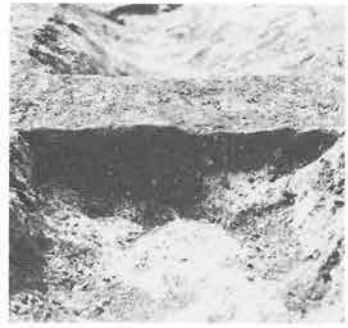




遺跡全景（西から）



溝跡全景



断面 1

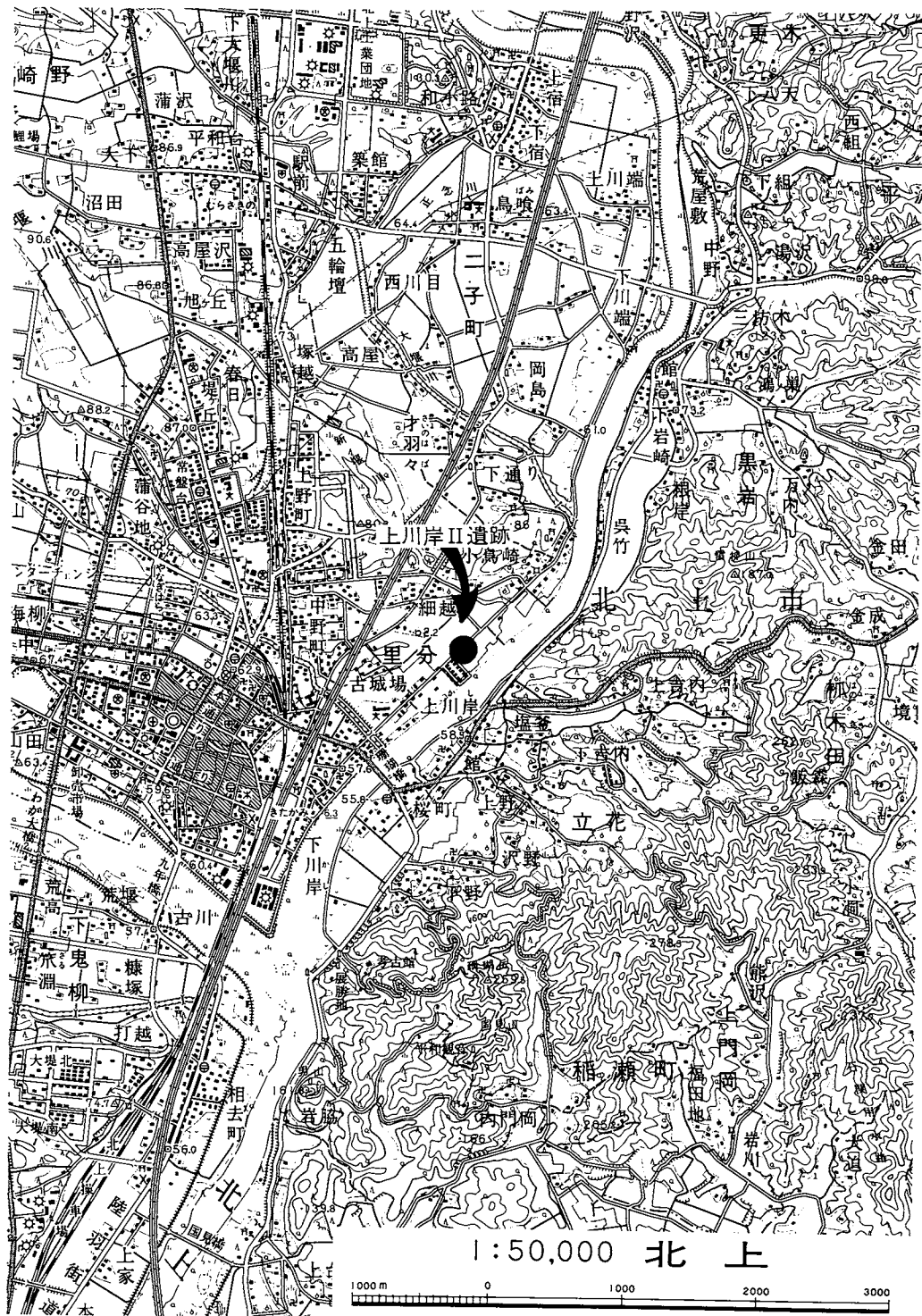


断面 2

監物館跡 遺構

(7) 上川岸 II 遺跡

所在地 北上市黒沢尻町字里分第7地割87-1ほか  
委託者 岩手県土木部 北上土木事務所  
発掘調査期間 平成元年4月7日～6月30日、9月1日～9月14日  
調査対象面積 5,300㎡  
発掘調査面積 5,300㎡  
遺跡番号・略号 ME66-0296・KK-89  
調査担当者 光井文行・佐々木弘・及川靖世  
協力機関 北上市教育委員会



上川岸II遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

上川岸II遺跡は東日本旅客鉄道東北本線北上駅の北東約2kmに位置し、標高約57～59mの新时期沖積段丘面に立地している。遺跡の東側約30mには北上川が北東から南西方向に流れており、比高は2～3mである。発掘調査前の現況は水田、畑地である。周辺の遺跡には、ぼたん畑遺跡、藤沢遺跡、尻引遺跡などがある。

## 2. 調査の概要

昨年度に引き続き、国道107号新珊瑚橋整備に伴う緊急発掘調査であり、調査区域は東西幅約170m、南北幅約120mである。

検出された遺構は、縄文時代の土坑5基、平安時代の竪穴住居跡9棟、溝跡4条、そのほか時期は不明であるが、溝跡9条、焼土遺構2基である。

出土遺物は縄文時代後期前葉の土器、土偶、土製品、石器、石製品、平安時代の土師器、須恵器、鉄器、土錘、鞆の羽口である。

### 〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡9棟のうち、形状・規模が把握できたものは6棟である。形状は長方形をなすもの1棟、ほぼ正方形をなすもの5棟である。長方形の住居跡は長辺5.2m、短辺4.6mで短辺の北壁中央部にカマドが設けられている。煙道は掘り込み式である。ほぼ正方形の住居跡は一辺が5m前後のもの4棟、3m前後のもの1棟である。カマドの位置は一辺5mの住居跡1棟が北壁中央部、他の4棟が東壁で中央部より南北のどちらかに寄る。煙道は半地下式のもの掘り込み式のものがある。柱穴は3棟で確認されている。4本柱でカマドのある壁に向かって右に寄る配置をなしている。カマドのつくり替えは1棟で南壁から北壁に移動している。床は砂礫層を掘り込んだ面に黒褐色粘土質土を全面に張ってつくられているもの、掘り方をもつものがある。北壁中央部に設けられている住居跡が古く位置づけられる。竪穴住居跡全体は9世紀から10世紀前半を中心とした平安時代前期のものである。

### 〈土 坑〉

縄文時代後期のもと思われる土坑は、直径1.2m前後で浅い小型の土坑と直径1.8mで深い大型の土坑とがある。ピーカー状を呈し、副穴をもたない。

### 〈溝 跡〉

平安時代と思われる溝跡4条は、3条が幅50～70cmの細い溝跡で、1条が幅1.7mの広い溝跡で、両者とも直線状にのびている。断面形はいずれも逆台形をしている。広い溝跡は細い溝跡に切られている。埋土の観察から、細い溝跡には水が流れていたと思われる。

### 〈焼 土〉

VIE区とVF区に1カ所づつ検出されている。焼土の層厚は2～4cmである。時期不明である。焼土の近くには竪穴住居跡がある。

### 〈出土遺物〉

縄文時代の土器は後期前葉が中心である。土器の大半はII層である黒褐色粘土質土層から出土している。地文の縄文に入組状や曲線状の沈線文が施されている。復元可能なものは少ない。土坑の埋土から出土した大型の深鉢形土器は口径37cm、器高46.5cmを測る。甕棺として利用されている大型の土器と似ている。

土偶は5点出土している。胴体2点、左脚部2点、頭部1点である。顔は三角状を呈し眉毛の位置にV字状の隆帯がつけられている。無文の鐸型土製品1点、耳飾1点、円盤状土製品10点も出土している。

石器は有茎の石鏃、石匙、切削器、石錐、磨石、凹石、台石などである。扁平な自然礫に孔を穿った有孔石製品や円盤状石製品も出土している。

平安時代の出土遺物は土師器の坏・甕形土器、須恵器の甕・壺形土器、刀子、手鎌、雁股の鉄鏃、土錘、砥石、韃の羽口である。土師器坏には回転糸切り後、無調整のものと、ヘラケズリによる再調整のものがある。土師器甕には少量であるがロクロ不使用のものがある。内面黒色処理されていない酸化炎焼成の坏が住居跡からも出土している。須恵器壺形土器には広口と長頸とがあり、広口壺の方が多く出土している。

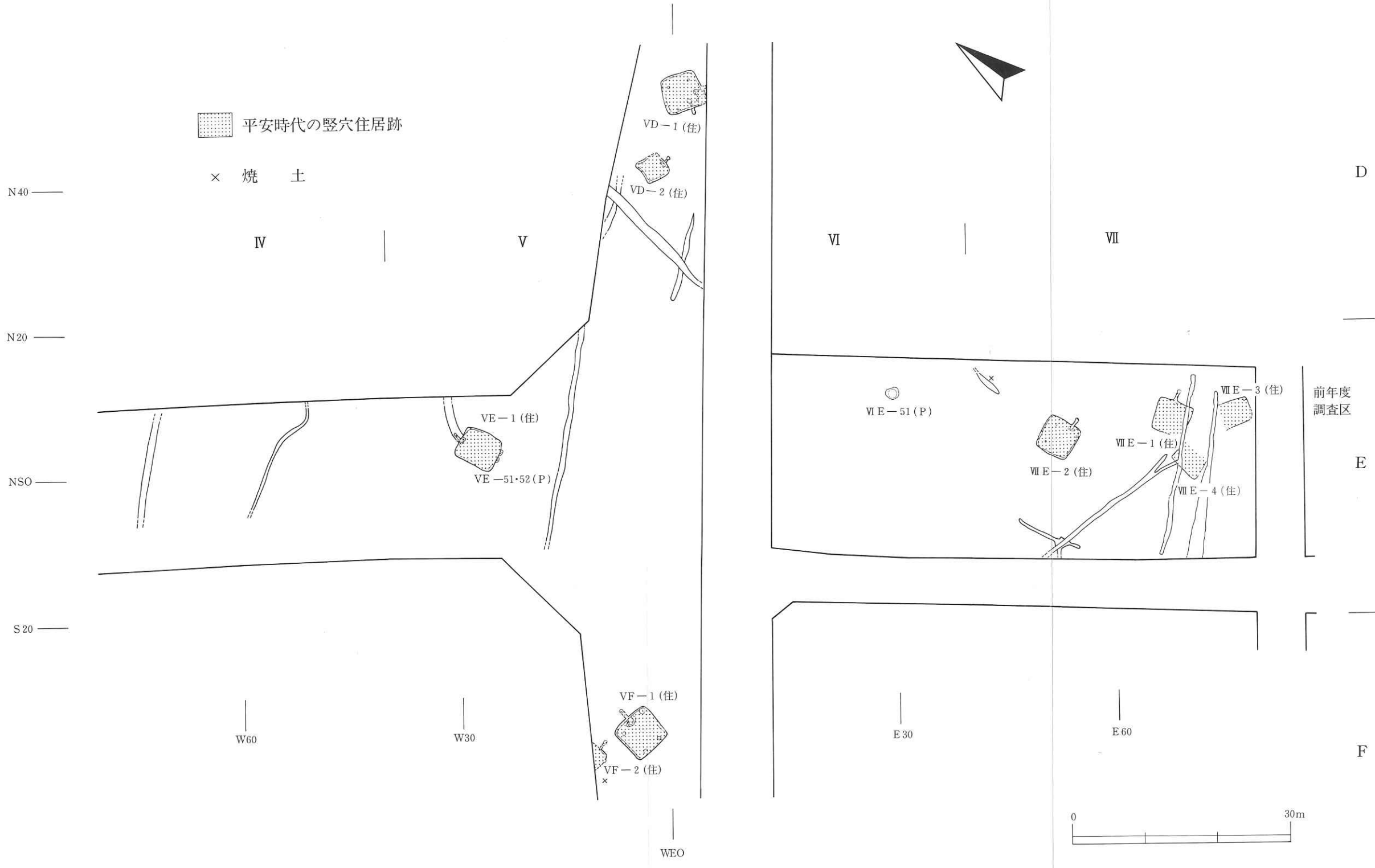
## 3. まとめ

今回調査した遺跡の西側は縄文時代後期前葉の遺物が多く、昨年度調査した東側は縄文時代後期中葉、最東端の北上川寄りには縄文時代晩期の遺物が中心であることから、時代によって人々の生活の場が移動していることが明らかにできた。土偶、その他の土製品、大型深鉢形土器など多くの縄文後期の遺物が発見され、当時の人々の生活を復元する資料が得られた。

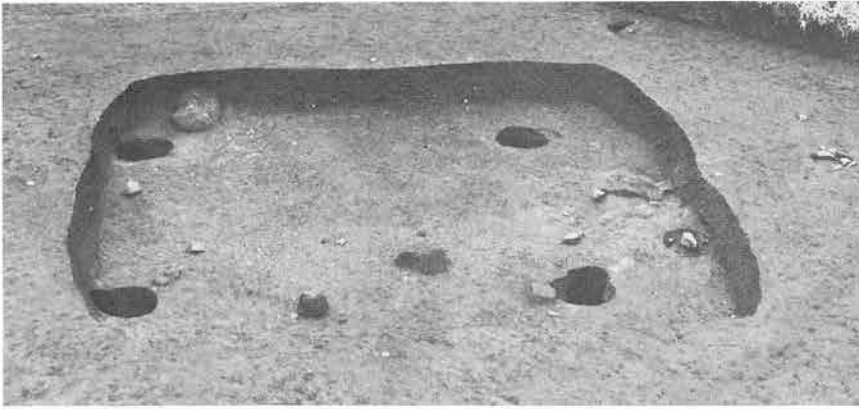
平安時代前期に沖積平野の微高地上に集落がつくられ始めたことがわかった。胆沢城のある水沢市や周辺の江刺市同様、北上市においてもこの時期に集落の拡大したことが裏付けられた。

手鎌、鋤先などの鉄製農具のほか、武器である雁股鏃といわれる鉄鏃が出土していることから、農業に従事しながら兵士の役割もしていたのではないかと推定される。

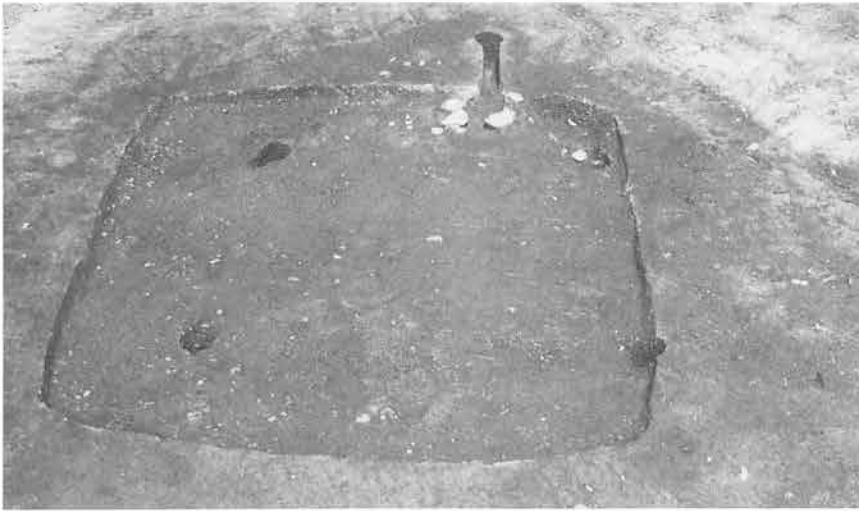
住居跡は調査区域外の南北にも分布していると思われる。また、VE-1住居跡より西には住居跡が検出されていないことから、この住居跡が集落の西端であったと思われる。昨年度分と合わせて25棟の竪穴住居跡が検出され、古代を理解する上での良好な資料が得られた。



上川岸II遺跡遺構配置図



平安時代の竪穴住居跡（東から）



平安時代の竪穴住居跡（西から）



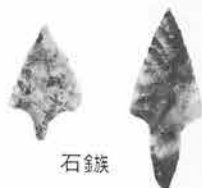
平安時代の溝跡



縄文時代後期の土坑埋土断面

上川岸II遺跡 遺構

繩文時代



石鏃



石匙



円盤状石製品



磨石



土偶右脚

土偶右脚



繩文後期深鉢

平安時代



土師器坏



須恵器坏



土師器坏



土師器高台坏



土錘



土師器高台坏



須恵器壺



土師器甕



砥石



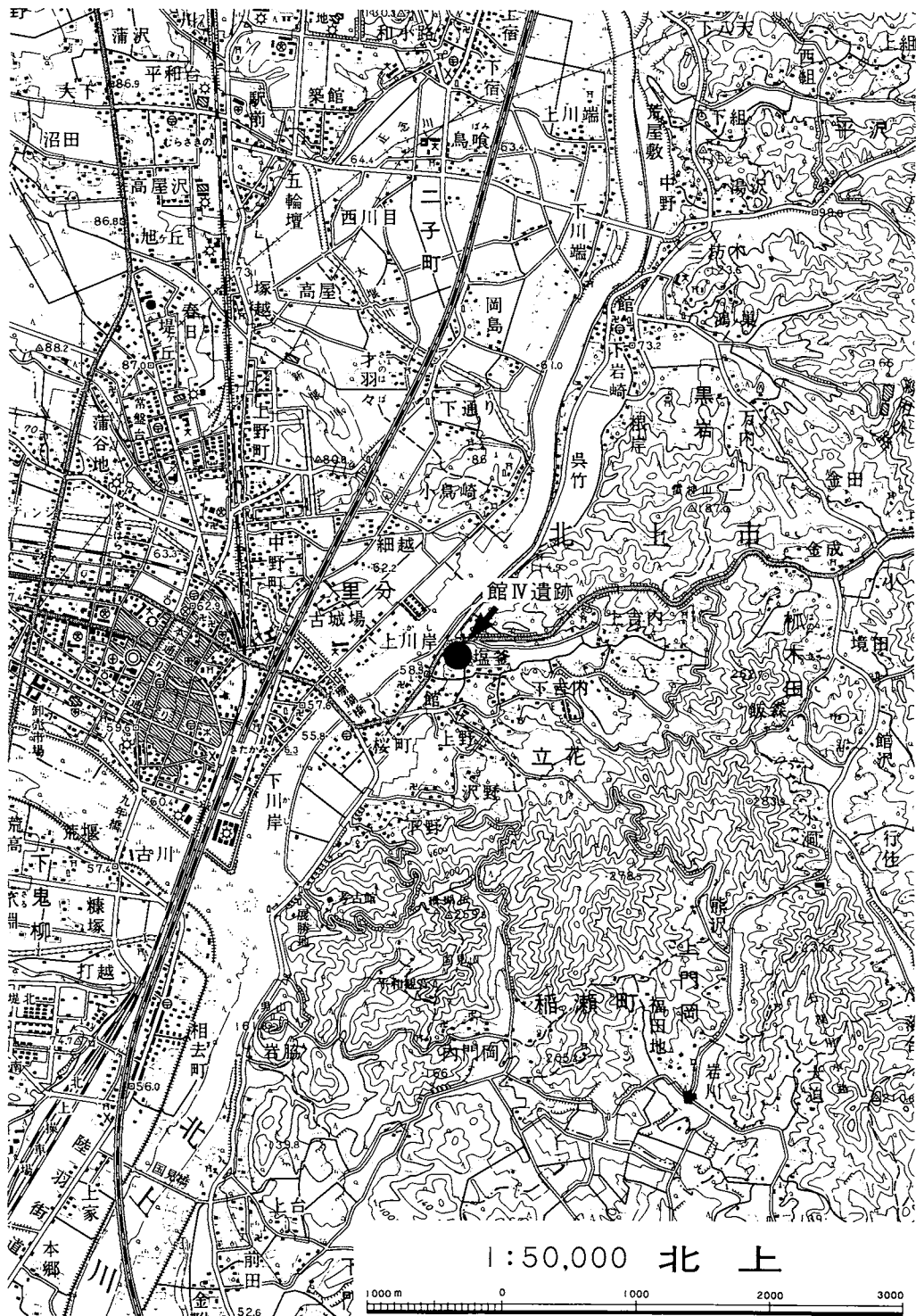
須恵器壺

上川岸Ⅱ遺跡 遺物



(8) <sup>たて</sup>館 IV 遺 跡

所 在 地 北上市黒沢尻町字立花第3地割38-1ほか  
委 託 者 岩手県土木部 北上土木事務所  
発掘調査期間 平成元年7月1日～11月10日  
調査対象面積 6,500m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 6,500m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME66-1267・TTIV-89  
調査担当者 光井文行・佐々木弘  
協力機関 北上市教育委員会



館IV遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

館IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の東北東約2kmに位置し、北上川東岸の標高60～61m、北上川との比高6～7mの河岸低地に立地している。発掘調査前の現況は水田と畑地である。周辺の遺跡には、ぼたん畑遺跡、八天遺跡、上川岸II遺跡などがある。

## 2. 調査の概要

国道107号新珊瑚橋の整備に伴う緊急発掘調査である。調査区域は国道107号の南側取付道路予定地部分を中心に、主な遺構は、調査区域の西端から南北幅約16m、東西約130mの範囲から検出された。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡16棟、土坑100基、配石遺構2基、陥し穴状遺構2基、平安時代の竪穴住居跡4棟、時期は不明であるが柱穴状ピット約40個である。

出土遺物は、縄文時代中期中葉～末葉の土器、土製品、石器、石製品、平安時代の土師器、須恵器、土製品、鉄製品である。

### 〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡は中期中葉～末葉のもので、住居跡から検出された炉10基はすべて複式炉である。平面形は、多角形状を呈するもの8棟、隅丸方形2棟、楕円形1棟、不明5棟である。多角形状を呈するものは直線的な辺をなす六角形～八角形が多い。規模は、長径6～7mのもの5棟、5～6mのもの3棟、5m未満のもの2棟、不明6棟である。住居跡の重複やたて替え、炉のみの造り替えもみられる。石組炉の前や石組の一端に土器を埋設しているもの4棟、住居跡中央に埋甕を伴うものが2棟ある。

平安時代の住居跡は前期に位置づけられ、ほぼ方形を呈しているもの3棟、不明1棟である。規模は一辺が4m未満のもの3棟、不明1棟である。カマドの位置は、北壁中央部1棟、北東壁1棟、東壁2棟である。このうち2棟は煙道がくりぬき式である。柱穴が検出されているものは1棟で、柱穴4個は東壁に寄った配置である。

### 〈土 坑〉

土坑の平面形は、円形・楕円形・長方形で、調査区の西側は円形のもの大半を占め、東側は長方形のもの大半を占めている。外径は0.9～1.2mで深さ20～40cmの浅いものと、深さ50～80cmの比較的深いものがある。形態はビーカー状のものが多く、フラスコ状のものもある。土坑の大半は底部中央に直径30cmの副穴をもち貯蔵穴と思われる。副穴を2～4個もつものもある。遺構の重複関係、出土遺物から縄文時代中期に位置づけられると思われる。

### 〈配石遺構〉

調査区西端の住居跡に近接して2基並んで検出された。長径5～20cmの川原石を使って楕円

形に配置され、規模は長径1 mのものと80cmのもので、ともに深さ30cmの土坑を伴っている。後者は川原石が土坑の下部まで埋置されている。

#### 〈陥し穴状遺構〉

調査区中央南側から2基検出された。いずれも細長い溝状をなしており、長さは東端部が調査区外にあるため不明であるが、幅20～30cm、深さ50～60cmである。

#### 〈柱穴状ピット〉

中央部北西側住居跡周辺と東端部住居跡東側から検出されている。掘り方は円形で、径30～50cm、深さ20～40cmと小さい。直線上に並ぶ部分もあるが、大半は不規則で建物跡が不明である。埋土から縄文土器片が出土しているものもあるが時期は特定できない。

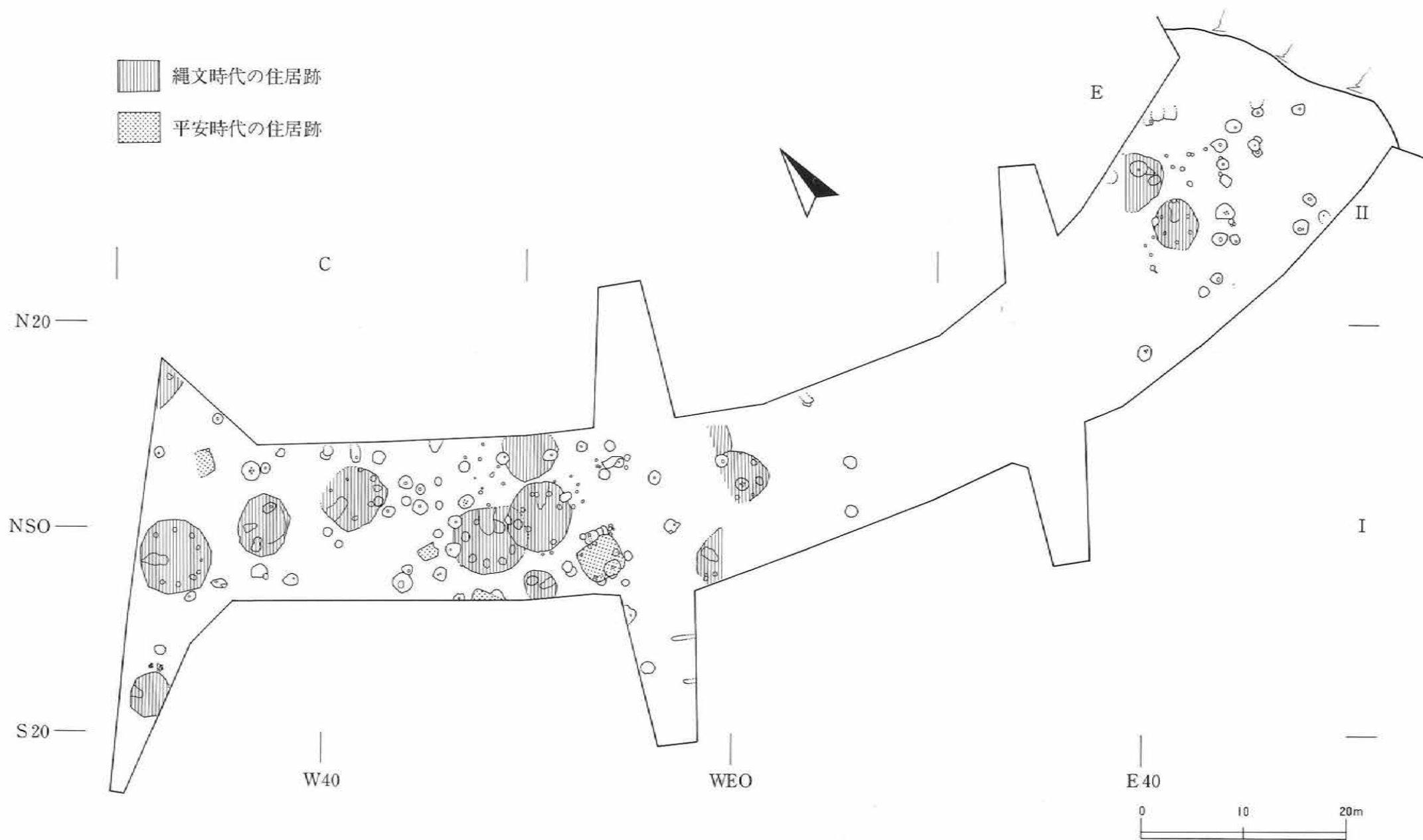
#### 〈出土遺物〉

縄文時代の遺物は、縄文土器、石鏃、石錐、石匙、削器、石棒、磨石、凹石、石皿、台石、有溝砥石、磨製石斧、垂飾品である。土器は縄文時代（大木8・9・10式）が大半で、調査区西端部～中央部の住居跡埋土から多く出土している。文様は沈線による楕円形を区画するものやC字形や渦巻文の描かれているものが多い。また、隆帯を中心とした文様を描いたり、刺突文、ヒレ状の突起をもつものもある。口縁部は平縁と山形口縁のものがある。石器約280点のうち石鏃が半数以上を占めている。

平安時代の遺物は、土師器、須恵器、鉄製紡錘車、土錘、砥石である。土師器は坏形土器、甕形土器、小型甕形土器などが出土している。坏形土器は内面をヘラミガキした後、黒色処理をしている。ロクロからの切り離しは回転糸切りであり、切り離した後、底部、体部下端をヘラケズリで再調整しているものがある。甕形土器は粘土紐を積み上げてつくり、口縁部、体部上半をロクロで再調整している。小型甕形土器はロクロを使用してつくり、底部に回転糸切り痕がある。須恵器は、壺形土器、甕形土器が出土している。甕形土器は体部外面に平行叩き目文をもつ。口縁部に青海波文をもつものもある。

### 3. まとめ

調査の結果、縄文時代の遺構は調査区外にも及んでいることが認められ、縄文時代中期の大規模な集落遺跡であることが判明した。全体を把握できた住居跡や床面からの遺物が多いことから、住居跡の形態・構造・炉の変遷土器の編年を明らかにする重要な資料が得られた。また、平安時代前期の集落が北上川東岸に形成されたことが分かり、この時期の集落の拡大が裏付けられた。



館Ⅳ遺跡遺構配置図



遺跡全景（南西から）



縄文時代中期の住居跡建替え・重複



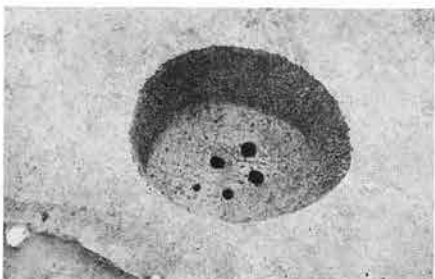
縄文時代中期の住居跡



複式炉



埋設土器断面



縄文時代の土坑



縄文時代の土坑

館Ⅳ遺跡 遺跡

繩文時代



石鏃



石錘



石棒



磨石



円盤状土製品



垂飾



磨製石斧



有溝砥石



繩文土器



土師器



鐵製紡錘車



土錘

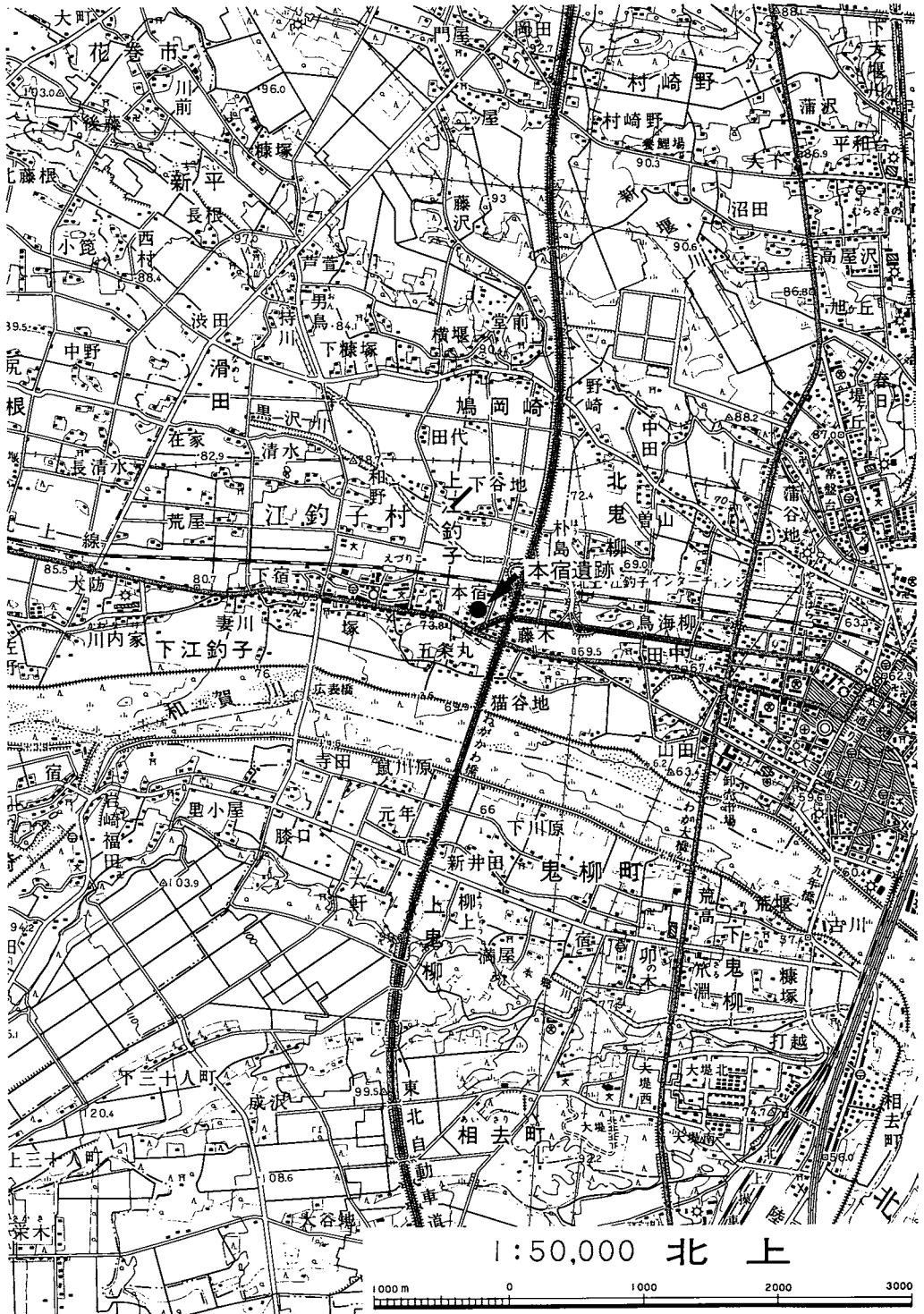
平安時代

館IV遺跡 遺物

## (9) 本<sup>もと</sup>宿<sup>じゆく</sup>遺跡

所在地 和賀郡江釣子村上江釣子第19地割121-4ほか  
委託者 岩手県土木部 北上土木事務所  
発掘調査期間 平成元年9月11日～10月23日  
調査対象面積 2,400㎡  
発掘調査面積 2,400㎡  
遺跡番号・略号 ME65-0169・MJ-89  
調査担当者 藤村敏男・斎藤邦雄  
協力機関 江釣子村教育委員会





本宿遺跡位置図

## 1. 遺跡の立地

本宿遺跡は東日本旅客鉄道北上線江釣子駅の東南東約0.8kmに位置し、和賀川によって形成された中位段丘相当の低位面上に立地している。遺跡の北側約700mには黒沢川が東流している。遺跡の標高は72m前後である。現況は水田である。

本遺跡の周辺には、南側に五条丸、猫谷地古墳をはじめとする江釣子古墳群、南西側に本宿羽場遺跡、北側には下谷地A・B遺跡などがある。

## 2. 調査の概要

検出した遺構は、弥生時代の土坑1基、時期不明の土坑2基、溝跡2条、掘立柱建物跡1棟である。出土遺物は遺構外から縄文時代の土器片数点と、土坑から弥生土器が出土している。

### 〈土 坑〉

3基の土坑が検出されており、そのなかの2基は調査区外に延びているため全容については不明である。1基の土坑は直径約80cmの円形を呈し、深さは15cmで非常に浅い。土坑からは3個体分の弥生時代の土器片が出土している。他の2基の土坑からは、遺物は出土しておらず時期は不明である。

### 〈掘立柱建物跡〉

調査区の北側に東西6間10.2～10.4m、南北4間6.3～6.4mの規模で四方に庇を持つ掘立柱建物跡が検出されている。掘り方の規模は小さく、直径約20～30cm、深さ10～45cmを測り、埋土は一様で非常に軟らかい。遺物は出土しておらず時期は不明である。

### 〈溝 跡〉

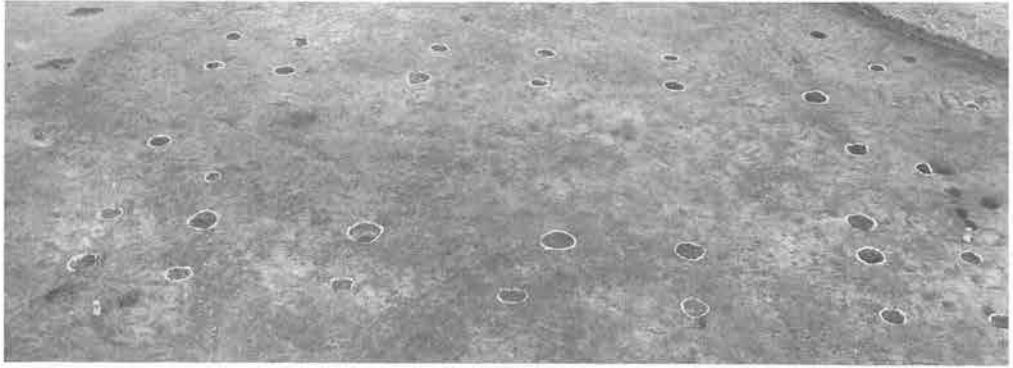
東西に直線的に走る溝跡1条と、緩やかに蛇行しながら南北に走る溝跡1条を検出した。前者は幅1m、深さ20cm、長さ約40mにわたって検出され、両端は調査区外に延びている。後者は幅50～70cm、深さ20～30cm、長さ約16mにわたり検出され、北端部分は調査区外に延びている。遺物は全く出土しておらず時期は不明である。

### 〈出土遺物〉

遺構外から縄文時代の土器片が数点出土しているが、摩滅が著しく時期は不明である。土坑から、弥生時代の天王山式の土器が出土している。

## 3. まとめ

今回の調査により、土坑・掘立柱建物跡・溝跡を検出した。弥生時代の1基の土坑を除き他の遺構については時期を特定することはできなかった。天王山式の土器が遺構に伴って発見されたことは、当該期の貴重な資料になるものと思われる。



掘立柱建物跡



第1号溝跡



第2号溝跡

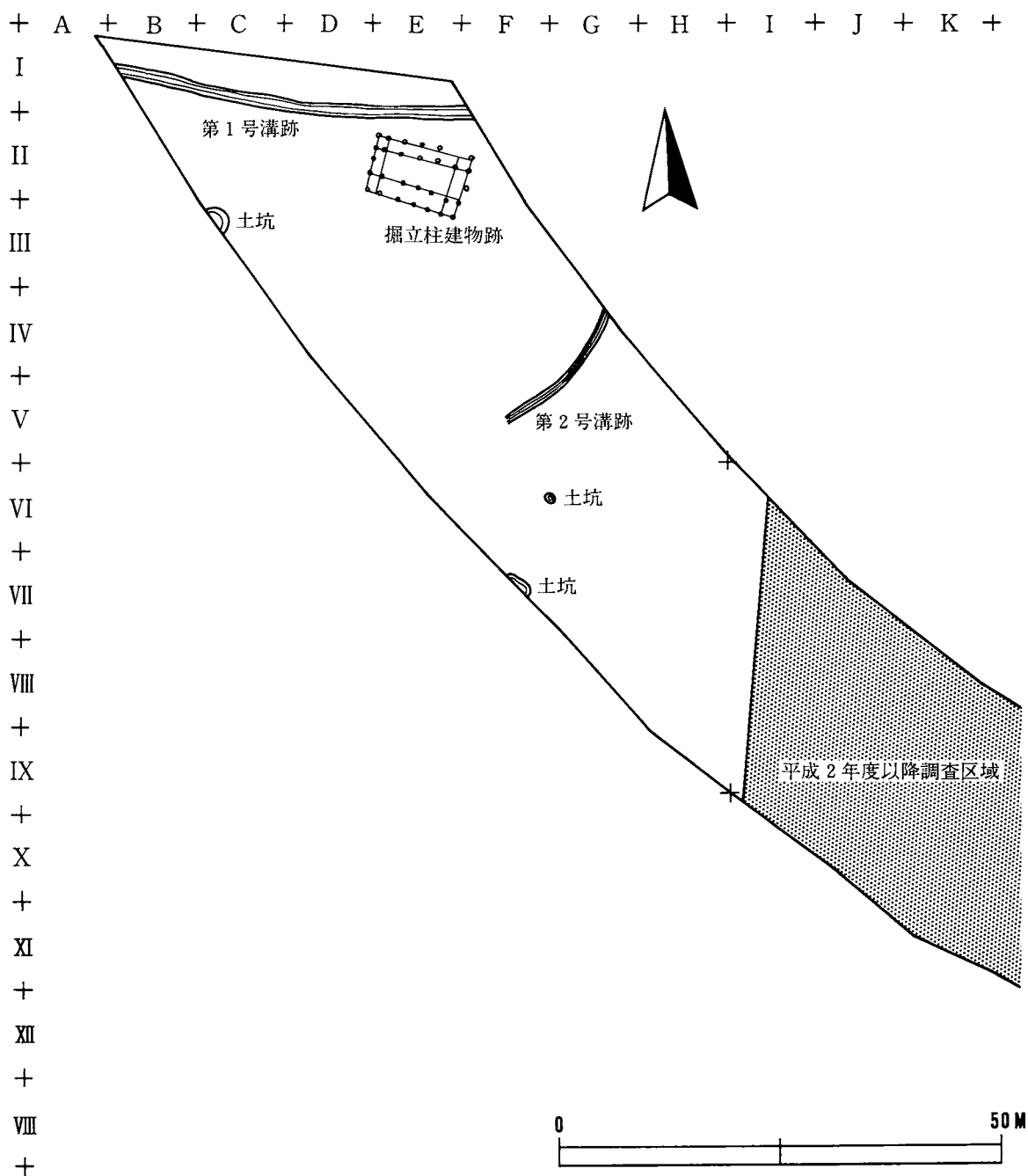


弥生土器出土状況



弥生土器

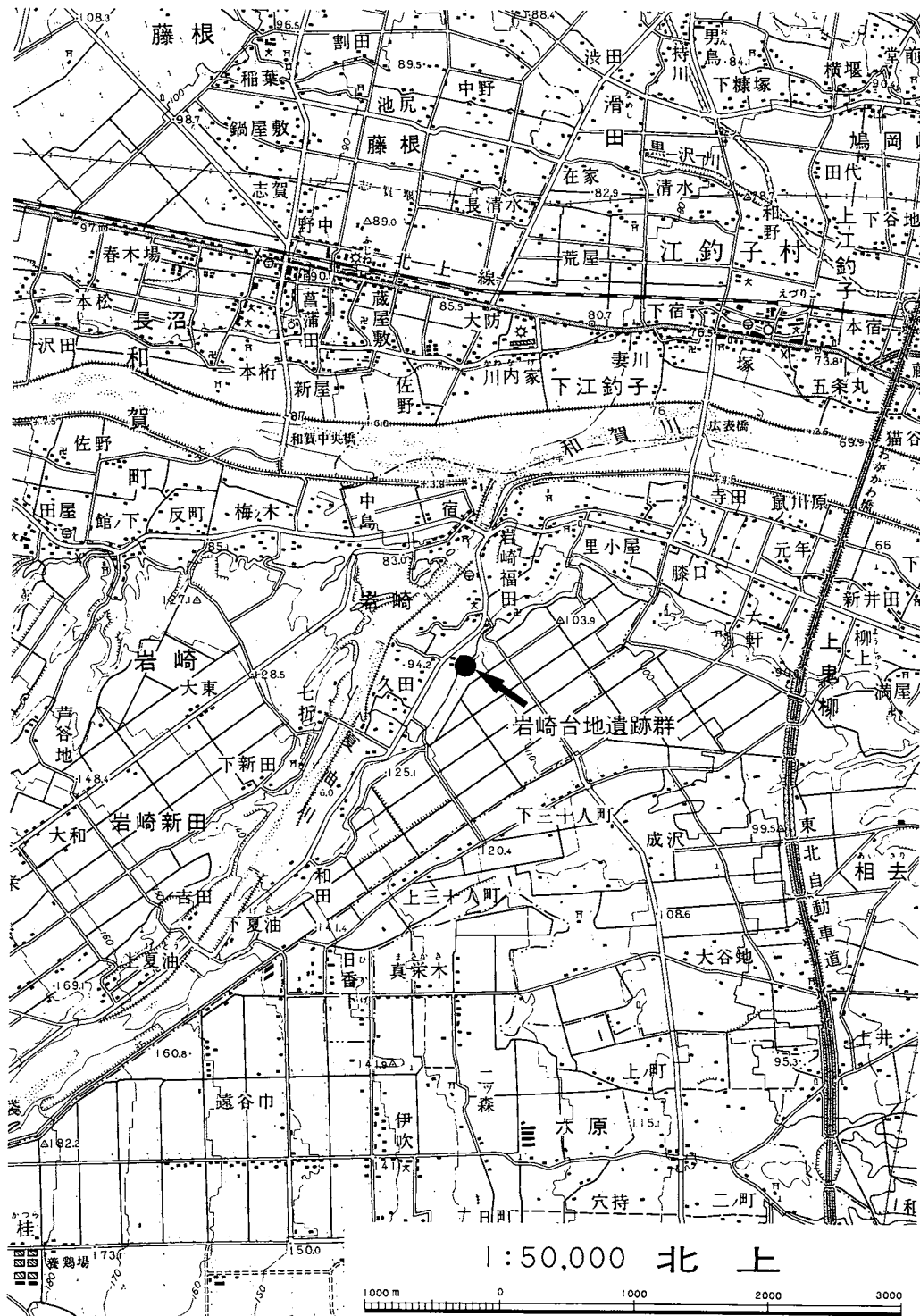
本宿遺跡 遺構・遺物



本宿遺跡遺構配置図

(10) 岩崎台地遺跡群

所在地 和賀郡和賀町岩崎第12地割42ほか  
委託者 岩手県花巻土地改良事業所  
発掘調査期間 平成元年4月11日～6月30日  
調査対象面積 4,723m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 4,723m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 ME64-2360・I S D-89  
調査担当者 遠藤 修・濱田 宏・高橋 堅  
協力機関 和賀町教育委員会



岩崎台地遺跡群位置図

## 1. 遺跡の立地

岩崎台地遺跡群は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南南東約3km付近に位置し、夏油川右岸の金ヶ崎段丘に相当する低位段丘の縁辺部と立地している。夏油川は本遺跡の北東約1kmで和賀川と合流し、遺跡の0.5km北方を東流している。標高は107～118m、夏油川との比高は27～38mである。遺跡の現況は山林、畑、水田等である。

遺跡東側の中位段丘上や開析された小支谷沿いに、下成沢遺跡、上大谷地遺跡など縄文時代から平安時代にかけての遺跡が多く分布している。

## 2. 調査の概要

調査は、北上地区の広域農道整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査区域は南北幅2～12m、東西約600mの範囲であり、昨年度の試掘調査区域を中心におこなった。

発見された遺構は、平安時代の竪穴住居跡9棟、土坑2基、焼土遺構3基、円形周溝跡1基、溝跡5条、塚1基、炭窯1基である。

### 〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡9棟のうち全体を確認できた3棟は方形を呈し、他は調査区域外にかかるため全体形は不明であるが、その平面形はいずれも方形と思われる。

竪穴住居跡の構築時期は出土遺物から複数の時期になるものと思われ、前半の住居跡は暗褐色シルト層に掘りこんでつくられ、一辺が約4mの方形を呈し、カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。後半の住居跡は褐色シルト層を掘りこんでつくられ、一辺が約4mの方形を呈し、カマドは南壁または東南端よりに設けられている。柱穴が検出された住居跡は4棟で、火山灰は2棟の埋土中より検出された。

出土遺物は土師器の坏・甕が主体であるが、須恵器の坏・甕・壺や鉄器も若干出土している。貯蔵穴をもつ住居跡2棟、カマドのつくり替えのある住居跡2棟ある。

### 〈円形周溝跡〉

遺構の北側2分の1以上が調査区域外にあり、正確な規模、平面形は不明である。検出された部分から推定すれば径6m前後の円形を呈するものと考えられる。上部は削平されているが溝幅40～70cm、深さ10cm前後である。出土遺物はなく、時期は不明である。

### 〈土 坑〉

住居跡と同じ明褐色シルト層で検出され、平面形は円形1基、不整形1基である。規模は円径のものが直径1.4～1.6m、不整形のものが長径3.0m、短径1.7mで深さは共に30cm前後である。

いずれも埋土から土師器が出土し、不整形の土坑からは椀形鉄滓が出土している。

#### 〈焼土遺構〉

調査区東側に3基あり、径70～180cmの不整形で、層厚約10cmである。須恵器が出土しており、平安時代に位置づけられる。

#### 〈塚〉

「こうべ塚」とよばれている径5.7×6.6m、高さ0.8mの楕円形の塚である。表土下40cmで礫が20～30cmの厚さを確認できたが、塚に伴う施設は検出されなかった。

出土遺物は、盛土から縄文土器片、土師器片、須恵器片が数点である。

#### 〈溝 跡〉

溝跡5条は段丘縁辺部に向かって南北方向にのびている。溝の長さは約5～65m、溝幅0.3～1.5m、深さ10～50cm、断面形が逆台形を呈している。

平安時代の住居跡を切るもの1条、耕作等で底部しかないもの2条があり、前者の溝からはロクロ成形の土師器片が数点出土している。その他2条である。

#### 〈出土遺物〉

遺物の主体は平安時代の土師器、須恵器で、坏・甕・壺等が遺構内外から出土している。その他、遺構外から縄文土器片、弥生土器片が若干出土している。

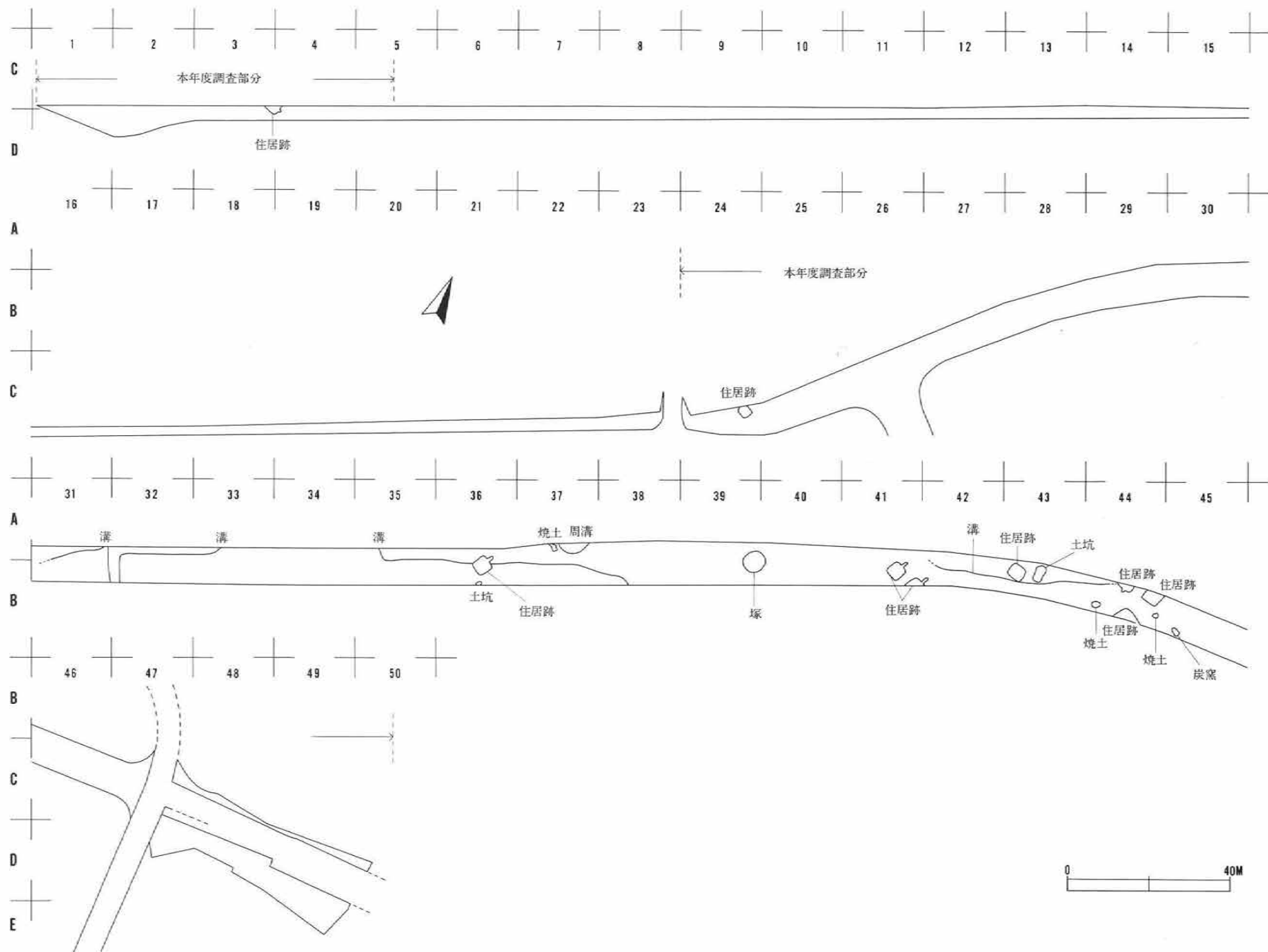
土師器、須恵器の坏はロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切り無調整がほとんどである。土師器の甕は、器高約20～30cmで長胴形の器形を示し、口縁部は短く外反している。体部外面の調整はヘラケズリである。須恵器甕の大型甕は叩き目痕や当て具痕をもつものがある。そのほか、鉄鏃等がある。

### 3. まとめ

昨年度からの調査により岩崎台地遺跡群は、平安時代の集落跡の遺跡であることが明らかになった。集落の主体は段丘の縁辺部であることが推定され、時期によって住居の構築場所が移動しているものと思われる。

また、縄文土器や弥生土器が発見されたことから周辺には縄文時代や弥生時代の遺構が存在することが推測される。





岩崎台地遺跡群遺構配置図



遺跡全景（南から）



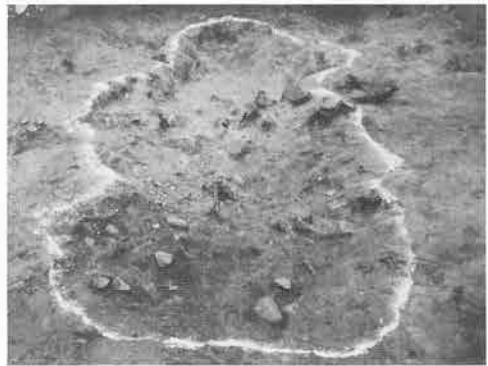
平安時代の住居跡



平安時代の住居跡



周溝跡



土坑

岩崎台地遺跡群 遺構



弥生土器



手捏ね土器



墨書坏



土師器



須恵器



岩崎台地遺跡群 遺物

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二		
副 所 長	鎌 田 良 悦		
〔管 理 課〕			
課 長	鎌 田 良 悦	嘱 託	吉 田 一 男
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎	運 転 技 術 士	佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広	兼 技 能 員	
〔調 査 課〕			
課 長	昆 野 靖		
課 長 補 佐	佐々木 嘉 直		
主任文化財 専門調査員	小田野 哲 憲	文 化 財 專 門 調 査 員	遠 藤 修
〃	三 浦 謙 一	〃	斎 藤 邦 雄
〃	工 藤 利 幸	〃	高 橋 義 介
〃	高橋 與右衛門	〃	佐々木 信 一
〃	平 井 進	〃	小 原 眞 一
〃	中 村 良 一	〃	村 上 修
〃	中 川 重 紀	〃	酒 井 宗 孝
文 化 財 專 門 調 査 員	藤 村 敏 男	期 限 付 專 門 職 員	菊 地 達 哉
〃	斎 藤 實	〃	相 原 伸 裕
〃	光 井 文 行	〃	及 川 靖 世
〃	佐 瀬 隆	〃	女 鹿 文 雄
〃	斎 藤 博 司	〃	濱 田 宏
〃	東海林 隆 幹	〃	及 川 涉
〃	佐々木 弘	〃	星 雅 之
〃	川 村 均	〃	森 下 宏
〃	鈴 木 貞 行	〃	高 橋 堅
〔資 料 課〕			
課 長	高 橋 薫		
主任文化財 専門調査員	田 鎖 寿 夫		

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第147集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成元年度分)

平成2年3月25日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185  
電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社杜陵印刷  
〒020 盛岡市厨川四丁目2番6号  
電話 (0196) 41-8000(代)

---

---

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1990